

教育実践総合センター年報

滋賀大学教育学部
Faculty of Education

2026年3月 第9号



SHIGA UNIVERSITY

教育実践総合センター一年報 第9号

| | |
|---|-------|
| 1 共同研究事業 | 1 |
| 1) 小学校における教科担任制からチーム担任制への推進について | 田中 満 |
| 2) 算数・数学教育実践研究セミナー(算数・数学がんばるセミナー) | 山下 亮 |
| 3) 児童が学びをつなぎ、新たな気付きを生み出す授業づくり | 山下 亮 |
| —小学校算数科における「授業改善シート」を活用した授業構想と授業評価を通して— | |
| 4) 自ら考える児童と学び続ける教師が共に創出する授業を目指して | 山下 亮 |
| 5) 中学校における「共に学ぶ」視点に立った授業づくり | 窪田 知子 |
| —特別支援学級での構想から実践、省察を校内で共有する取組を通して— | |
| 6) 特別支援学校における子どもの可能性を引き出す ICT 活用のあり方 | 石田 基起 |
| —実態に応じた指導・支援の充実と学校全体で推進していく校内連携を通して— | |
| 7) 学び続ける子どもの姿を目指して | 北村 拓也 |
| ～単元で働かせる見方・考え方を重視した授業研究を通して～ | |
| 8) 「自分の考えをまとめ、表現したり記述したりできる子ども」の育成 | 北村 拓也 |
| ～小学校国語科における授業実践を通して～ | |
| 9) 「教職員の研修観の転換」に向けた「探究型研修」に関する研究 | 北村 拓也 |
| 10) 義務教育現場への「リベラルアーツ」導入実践 | 渡邊 史 |
| 11) 特別支援学校における児童生徒の発達理解と支援の充実に向けた 教員研修の実施 | 山川 直孝 |
| 12) 中学校通常の学級における特別支援教育の推進に向けた コンサルテーションの実施 | 山川 直孝 |
| 13) 小・中学校の学びの系統性を意識した授業改善 | 渡邊 慶子 |
| ～甲賀市モデルによる学ぶ力の向上を目指して～ | |
| 14) 自覚的な学びを促す小学校国語科の授業デザインの検討 | 長岡 由記 |
| ～学習方略の認知と使用に着目して～ | |
| 15) 子どもの「やってみたい！」を引き出す造形活動の工夫 | 青木 善治 |
| ～遊びや鑑賞を通して育まれる創造力と表現の楽しさ～ | |
| 16) 子どもが夢中になる造形活動の工夫と実践 | 青木 善治 |
| ～遊びや鑑賞体験を通して育つ表現力～ | |
| 17) 感じ・考え 互いに学び合い高め合う 笠縫魂 | 青木 善治 |
| ～明日につながる保育を求めて～ | |

| | |
|--|-------|
| 18) 対話型鑑賞(朝鑑賞)を通じたアート思考と自己肯定感の育成..... | 青木 善治 |
| —他者理解と多様性の尊重を基盤とした感性教育の実践— | |
| 19) 中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト..... | 林 睦 |
| 20) 附属特別支援学校とおとさぼの連携による「まもりうた」プロジェクト..... | 林 睦 |
| 21) 幼児を対象とした身近な用具(モノ)を使用した運動遊びの実践と検討..... | 山田 淳子 |
| 22) 幼児の明日の遊びにつながる園内研修のあり方..... | 山田 淳子 |
| 23) 子どもが主体となる授業づくりプロジェクト研究..... | 山本はるか |
| 24) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊..... | 森 太郎 |
| 25) 理科指導力向上研修の企画研究..... | 糸 乗 前 |
| ～CST 教員の持続可能性を探る～ | |
| 26) 科学的思考力を育成する授業に関する研究..... | 大山 真満 |
| 27) 高等学校地理歴史科・公民科における探究の過程を通じた学習活動の充実..... | 岸 本 実 |
| 28) 校内研修における教師のリフレクションの深化..... | 岸 本 実 |
| | |
| 2 石山プロジェクト..... | 57 |
| 3 出前講義..... | 59 |
| 4 教職探究講座..... | 69 |
| 5 教育臨床研究..... | 71 |
| 6 情報教育研究..... | 74 |
| 7 教育実習支援..... | 76 |
| 8 教師力向上支援..... | 78 |
| 9 キャリア支援の取り組み..... | 80 |
| 10 教員志望について「志望の変遷」を追う..... | 82 |
| 11 地域教員養成プログラム..... | 94 |
| 12 業務報告..... | 98 |

1 共同研究事業

1) 小学校における教科担任制からチーム担任制への推進について

1. 事業名および担当者

【事業名】 小学校における教科担任制からチーム担任制への推進について

【担当者】 教職大学院：田中 満

大津市立仰木の里東小学校：校長 山尾 健一，教務主任 谷 勇蔵

2. 事業の目的

本校では、従来の学級担任制から、複数の学級担任が1つのクラスに関わることで、より多くの教員のみで児童を支援できるチーム担任制を実施している。令和6年度から、高学年における教科担任による専科指導と、学級担任同士の交換授業を組み合わせることで、全学年で教科担任制を推進してきた。令和7年度は、教科指導だけでなく、更に一歩進めて、学級指導も学級担任間で交換するようにした。また、隣の学級担任や教科担任を副担任として、児童や保護者は学級担任と同様に、連絡・相談ができるようにした。本研究は、チーム担任制を推進する中で、児童・保護者・教員に従来の学級担任制と比較したアンケートを取り、その成果と課題を明らかにする中で、滋賀大学教職大学院の田中准教授に助言を受けながら、これからの小学校の指導体制について考察することが目的である。

3. 事業の概要

(1) 目指すチーム担任制のあり方

本校では、令和6年度に一部で教科担任制を導入し、令和7年度からは更に一歩進めて、チーム担任制へと移行するにあたっては、栗東市立葉山東小学校の実践を参考にした。チーム担任制は、東京都・神戸市・京都市などの小学校で増加しており、それらの先進校では、児童の学級は固定しつつ、加配教員を含む学年担任が一定期間ごとに学級をローテーションしながら担任を務める形態が一般的であり、ローテーションの頻度は、学期ごと、月単位、週単位など学校によって様々である。利点としては、複数の教員が児童に関わることで多面的な児童理解が可能となり、学級指導の安定化が図れる点が挙げられる一方で、保護者からは「責任の所在が不明確」といった懸念、教員からも「特定の学級を持たないことへの不満」が示されることが、先進校の実践例からも予想される。そこで本校では、従来の固定の学級担任制と、先進校のローテーション型のチーム担任制の中間的な形態として、以下のようなチーム担任制を目指した。

・一部教科担任制と交換授業の推進

学級担任による交換授業やローテーション道徳、専科加配教員による一部教科担任制を推進。

・学級指導の交換

固定の学級担任が学級づくりを担いながら、隣の学級担任や専科加配教員も副担任として学級指導（清掃指導など）を行う。

(2) チーム担任制のアンケートから見る成果と課題

令和7年度1学期末（令和7年7月）に、児童・保護者・教員を対象とした以下の質問の無記名アンケートを実施した。

| 組 | 学級担任 | 副担任 | | | 他の教員 | |
|----|------|----------------------|-----|--------|------|-----|
| | | 隣の学級担任 | | 専科加配教員 | | |
| 1 | A | B 社 | C 理 | D 算 | E 英 | F 音 |
| 2 | B | A 家・書 | C 理 | D 算 | E 英 | F 音 |
| 3 | C | A 家・書 | B 社 | D 算 | E 英 | F 音 |
| 校務 | 通常授業 | 交換授業 | | 専科授業 | 入り授業 | |
| | 学級指導 | ローテーションしながら清掃指導等を行なう | | | | |

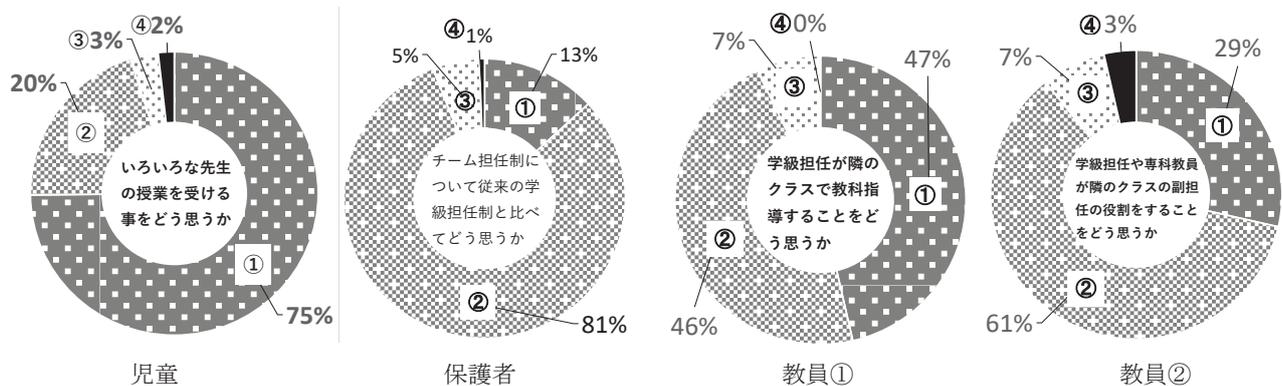
表1 本校の5年生の学年組織と授業割当 *A～Fは教員

〈質問内容〉*回答は4択（①とても良い，②まあ良い，③あまり良くない，④まったく良くない）

・児童アンケート（1～6年生回答数 447名）：質問「学級担任だけでなく，いろいろな先生の授業を受けることをどう思うか？」

・保護者アンケート（回答数 173名）：質問「本校のチーム担任制について従来の学級担任制と比べてどう思うか？」

・教員アンケート（回答数 28名）：質問①「学級担任が隣のクラスで教科指導をすることについてどう思うか？」 質問②「学級担任や専科教員がクラスの副担任の役割をすることをどう思うか？」



児童と保護者のアンケート結果を見ると，共に肯定的回答（①とても良い②まあ良いの合計）が全体の90%以上である。児童の結果を学年別に集計しても，低学年から高学年までほぼ同様（例：1年生95%，6年生98%）の傾向である。児童（5・6年生）と保護者に回答理由を自由記述させ，分類したのが右の表である。児童で最も多かった理由は「いろいろな先生と関われる・仲良くなれる」「いろんな先生に相談できる・安心できる」で，教員との人間関係の広がりにより肯定的な意見が45%を占めた。保護者で最も多かったのが「複数の目による安心感」，次いで「子どもが楽しんでいる」「相談できる先生が増えた」等で，肯定的な理由が過半数を占めた。一方で，「よくわからない」「不満」「可もなく不可もなく」といった中立・否定的な意見も2割程度あった。

教員のアンケートは，隣のクラスで教科指導することについては，児童・保護者と同様に肯定的回答が90%以上あるが，副担任制については，否定的回答（③と④の合計）が10%とやや高い。

なお，3学期始め（令和8年1月）に同じアンケートを行なったところ，児童の肯定的回答は96%，保護者の肯定的回答98%と，共に1学期末より微増していた。

4. 今後に向けて

固定した学級担任を維持しながらも，複数の教員が児童に関わる体制を整えた本校のチーム担任制は，児童や保護者から高い好感を得ており，教材研究等の負担軽減も期待できることから教員にも徐々に理解が広がっている。都市部の先進校のように一定期間ごとに担任が学級をローテーションする形態のチーム担任制の導入については，教員だけでなく児童・保護者にも戸惑いや違和感が生じる可能性があり，その導入のタイミングや方法は，一足飛びではなく，学校の抱える教育課題の実情に応じてゆるやかに対応する必要があると考える。

（山尾 健一・田中 満）

| 分類名 | 割合% |
|------------------------|------|
| 1. いろいろな先生と関われる・仲良くなれる | 32.5 |
| 2. 相談・安心感の向上 | 13.1 |
| 3. 教え方・授業の違いが良い | 12.3 |
| 4. 授業が楽しくなる・やる気が出る | 11.5 |
| 5. 専門性・得意な教科が教えられる | 7.7 |
| 6. 将来への準備・中学校への対応 | 6.9 |
| 7. 学びの多様性・考え方の広がり | 4.6 |
| 8. 担任との時間が減る不満 | 3.8 |
| 9. 教え方の違いによる混乱・不満 | 2.3 |
| 10. 緊張・不安を感じる | 1.5 |
| 11. 特に理由なし・未記入等 | 3.8 |

児童回答理由（自由記述）分類表

| 分類名 | 割合% |
|---------------------|------|
| 1. 複数の目による安心・多面的な理解 | 28.6 |
| 2. 子どもが楽しんでいる・刺激がある | 14.6 |
| 3. 相談しやすさ・信頼関係の広がり | 10.2 |
| 4. 教員の負担軽減 | 8.8 |
| 5. 教員の専門性・授業の質の向上 | 8.0 |
| 6. 教員間の連携と情報共有 | 5.1 |
| 7. 中学校への接続がスムーズ | 2.9 |
| 8. よくわからない | 7.3 |
| 9. 不満・課題 | 5.8 |
| 10. 可もなく不可もなく | 3.6 |
| 11. その他（個別の要望・意見） | 5.1 |

保護者回答理由（自由記述）分類表

1 共同研究事業

2) 算数・数学教育実践研究セミナー（算数・数学がんばるセミナー）

1. 事業名および担当者

事業名は「算数・数学教育実践研究セミナー」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町立豊郷小学校：上松 仁(校長), 大橋 宏星(教頭)

教職大学院：山下 亮

2. 事業の目的

本事業は、犬上郡小中教育研究会算数部会および数学部会が長年にわたり実施してきた取組であり、公開授業や優れた実践事例の紹介を通して、教員が具体的な指導の工夫や手立てに触れる機会を提供するものである。これにより、教員同士が実践に基づいた学び合いを深め、授業改善の視点やヒントを得ることを目的としている。さらに、算数・数学における指導方法への理解を深め、指導の質の向上を図ることを目指している。こうした取組を通して、教員一人ひとりの授業力の向上と学校全体としての授業力の底上げを推進するものである。

3. 事業の概要

年間スケジュールは表1の通りである。8月に実施した研修会では、滋賀県総合教育センターの研究員より昨年度の研究内容について話題提供をいただき、研究の視点や成果について理解を深めた。また、本学担当より、「数学的な見方・考え方」についての講演を行い、算数・数学の授業における指導の在り方について共有を図った。その後、10月の研究授業に向けて、各校の実践を基に授業改善に向けた視点の共有を図った。これらの研修や交流を通して、研究授業に向けた指導の方向性を明確にし、授業改善への意識を高めることができた。

10月には、豊郷町内の小学校および中学校において二日間にわたり、研究授業および授業研究会を実施した。両日とも講師として、国立大学法人岩手大学教育学部の 佐藤 寿仁 准教授を招聘し、授業内容や指導方法、授業構成の在り方について、専門的な立場から指導助言を賜った。特に、児童生徒の思考を深めるための発問や、「数学的な見方・考え方」を働かせるための具体的な手立てについて示唆をいただき、授業改善に向けた視点を得ることができた。これにより、教員が自らの授業を客観的に見直し、指導の意図や手立てを省察する機会となり、指導力の向上につながった。



図1 10月の案内チラシ

表1 年間スケジュール

| 実施日 | 曜日 | 内容 | 場所 |
|--------|----|--------------------|-----------|
| 8月23日 | 土 | 研修会, 指導案の検討 | 豊郷町立豊郷小学校 |
| 10月30日 | 木 | 研究授業(第3学年)および授業研究会 | 豊郷町立豊郷小学校 |
| 10月31日 | 金 | 研究授業(第2学年)および授業研究会 | 豊郷町立豊日中学校 |

3-1 8月の研修会の概要

滋賀県総合教育センターの研究者からは、小学校算数科において、問題発見・解決の過程の四つの段階を基にした授業づくりの実践について報告があった。「数学的な見方・考え方」を働かせ、図や式、表などで表現する場面を意図的に設定するとともに、1人1台端末を活用した「マイ・スタ」による学びの蓄積と活用を行った。その結果、児童は主体的に問題解決に取り組み、数学的に表現しながら論理的に考える姿が見られた。また、指導者の授業改善にもつながり、数学的に表現する力の育成に有効であることが示された。本学担当からは、算数・数学科において「数学的な見方・考え方」を働かせることの重要性について示した。「数学的な見方・考え方」を可視化・体系化し、小中9年間を見通して育成することが、授業改善において重要であることを示した(図2)。

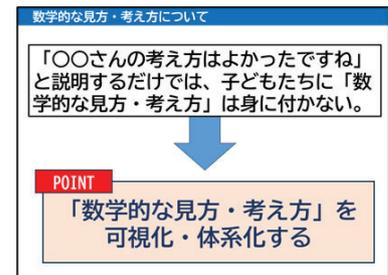


図2 研修会資料の一部

3-2 研究授業および授業研究会の概要

研究授業においては、授業者が児童生徒の思考を促すための発問や展開を工夫し、「数学的な見方・考え方」を働かせることを意識した授業実践が行われた。また、授業研究会では、参加者が授業の意図や児童生徒の学びの姿に着目しながら積極的に意見を交流し、多様な視点から授業を捉え直すことができた。これにより、授業改善に向けた具体的な示唆を得るとともに、教員相互の学び合いが深まる有意義な機会となった。さらに、授業者にとっては自身の実践を省察する契機となり、指導の意図や手立ての妥当性を再検討することにつながった。また、参加者にとっても、自校の実践を見直す視点を得ることができ、今後の授業づくりに生かすことのできる貴重な研修の場となった。

3-3 講師による指導助言

講師の佐藤准教授からは、次期学習指導要領の方向性を踏まえ、今後の算数・数学教育において求められる資質・能力の育成の重要性について指導助言を受けた。特に、全国学力・学習状況調査の結果を基に、手続的知識だけでなく、概念的知識の理解とその活用が学力形成において重要であることが示された。また、構成された数学的知識を基に、既習事項を関連付けながら問題解決に取り組むことの必要性を指摘された。さらに、授業のリフレクションでは、「事象の把握」「問題の設定」「見通し」の各段階を意識した指導の充実が求められるとともに、交流場面において新たな問いの生成につながるような学びの展開を意図的に位置付けていくことが課題として示された。

4. 今後に向けて

以上の取組を通して、教員が「数学的な見方・考え方」を基に授業を見直し、指導の在り方について省察する機会が充実してきていることが明らかとなった。今後も、公開授業や授業研究会、講師による指導助言を通して、実践に根ざした学び合いを継続的に推進していくことが重要である。そのことにより、教員一人ひとりの指導力の向上を図るとともに、算数・数学科における授業の質の向上と授業改善の一層の充実につながることを期待される。また、こうした継続的な取組を通して、学校全体として授業改善に取り組む組織的な体制の充実が図られることも重要である。

(山下 亮)

1 共同研究事業

3) 児童が学びをつなぎ、新たな気づきを生み出す授業づくり

ー小学校算数科における「授業改善シート」を活用した授業構想と授業評価を通してー

1. 事業名および担当者

事業名は、「児童が学びをつなぎ、新たな気づきを生み出す授業づくりー小学校算数科における「授業改善シート」を活用した授業構想と授業評価を通してー」であり、担当者は次の通りである。

滋賀県総合教育センター：太田 義人(所長), 地石 玲子(参事), 高田 真奈美(主幹)

海外 万希子(研修指導主事), 穴堀 春香(研究員)

教職大学院：山下 亮 ※トータルアドバイザーとして関与

2. 事業の目的

令和6年度全国学力・学習状況調査の問題別調査結果[算数]において、数学的な見方・考え方を働かせ、学んだことを生活や学習の場面で活用する力に滋賀県の課題が見られた。この課題を解決するためには、児童が数学的な見方・考え方を蓄積するだけでなく、自立的に活用し、自ら見つけた気づきや問いを生活や学習の中で生かすことを促す授業づくりが重要であると考え。そこで、本研究では、児童が蓄積した数学的な見方・考え方を働かせ、新たな気づきや問いを得る過程に焦点を当てた授業構想に取り組む。また、児童の学びの姿を見取り、授業を振り返り、有効な指導や手立てについて探る授業評価を行う。これらを繰り返し行うことで、児童が数学的な見方・考え方を働かせ、学んだことを生活や学習に活用する力の育成につながると考えた。

3. 事業の概要

本研究では、研究協力校である、野洲市立篠原小学校、長浜市立速水小学校の2校に各校週1回研究員を派遣し、研究協力員とともに、各校の実態や課題を把握し、小学校算数科において、児童が数学的な見方・考え方を働かせ、学んだことを生活や学習に活用する力を育むために、児童が学びをつなぎ、新たな気づきを生み出すための授業づくりを目指した。

3-1 「単元デザインシート」「授業改善シート」を活用した授業づくり

「単元デザインシート」(図1)は、数学的な見方・考え方、目指す児童の姿、既習事項との関連を整理し、学習の系統性を踏まえて単元全体の指導計画を構想するためのシートである。「授業改善シート」(図2)は、「授業計画」と「授業記録」を一体化し、働かせたい見方や考え方を明確にした授業構想と、児童の学びの実態に基づく授業評価を往還させながら、継続的に授業改善を図るためのツールである。授業計画では具体的な手立てや支援を検討し、授業記録では児童の思考やつまづき、その効果を記録することで、次時の授業づくりへとつなげていく。これらのシートを関連付けて活用することで、単元構想から評価・改善までを一体的に進めることができる。

| 単元デザインシート | | 単元名 |
|---------------------------|-------------|-----------------|
| 単元を通して目指す児童の姿 | | |
| 【知識及び技能】 | | |
| 【思考力、判断力、表現力等】 | | |
| 【学びに向かう力、人間性等】 | | |
| 単元を通して働かせたい 数学的な見方・考え方 | | 単元を通して行う手立て |
| 時間 | 各時間に目指す児童の姿 | 働かせたい数学的な見方・考え方 |
| 1 | | |
| 2 | | |
| 3 | | |
| 4 | | |
| 5 | | |
| 6 | | |

図1 単元デザインシート

| 授業改善シート | | 単元名 |
|--|-------------|-----|
| 働かせたい 数学的な見方・考え方 学習されるべき姿 | | |
| 既習事項 | 学びをつなぐ中で、支援 | |
| 数学的な見方・考え方を働かせ、 自らの考えをもつ 課題と向き合いながら、 自らの考えを述べられる 数学のよさを実感する | | |
| 授業計画 - 学習される児童の考えや発言、留意点 | | |
| 問題解決・見直し、あそび | 自らの解決・考えの交流 | まなび |
| 指導者の発問の内容 考えの技法 | | |
| 個別の学びと協働的な学びの内容や時間の配分 粘り強く取り組むことや、自らの考えをもつことが苦手な児童への支援 振り返り | | |
| 授業記録 - 授業の姿や発言、学習態度や支援の様子 | | |
| 問題解決・見直し、あそび | 自らの解決・考えの交流 | まなび |
| 児童が数学的な見方・考え方を働かせている姿 児童の発言 指導者の手立てや支援の効果 児童がどこまでまなんでいるのか 振り返り | | |
| 手立て・支援は 発問を行ったか(○/△/×) 発問の内容や問いの質 児童の考えをもつ 児童の考えを述べられる 数学のよさを実感する | 次の授業に向けて | |
| 単元のよさを実感する | | |

図2 授業改善シート

3-2 児童が数学的な見方・考え方を意識し、活用するために

児童が学びをつなぎ新たな気付きを生み出すためには、数学的な見方・考え方を意識し、学習の成果を蓄積・活用できるようにすることが重要である。そのために、令和6年度研究の成果物であるICTを活用した「マイ・スタディ・ボックス」の「マイログ」と「クラスログ」を活用する。「マイログ」では児童が解決過程での気付きや振り返り、働かせた見方や考え方を個人で蓄積し、「クラスログ」では指導者が学級全体の気付きや学びを整理・共有する。これらを通して、既習事項を生かしながら主体的に問題解決に取り組む力の育成を図る。



図3 研究授業の様子
(野洲市立篠原小学校)

3-3 研究協力校の指導者と児童の変容

研究協力校における質問紙調査の結果、指導者では「学習内容を生活や学習につなげる工夫をしている」と回答した割合が21ポイント増加して71%となり、学びをつなぐ授業づくりへの意識の高まりが見られた。また、児童においても、「学習や生活に活用できないか考える」とする肯定的回答が増加し、学びを生かそうとする意識の向上が確認された(図4)。あわせて実施した学力調査においても、数学的な見方・考え方を働かせて日常生活に活用する力の平均得点が向上した(図5)。

| 算数科で学習したことを、今後の学習で活用できないか考えることがある | | | | | |
|-----------------------------------|----|----|----|----|---|
| 初期 | 27 | 66 | 39 | 23 | 5 |
| 終期 | 39 | 73 | 34 | 17 | 7 |
| 算数科で学習したことを、今後の生活で活用できないか考えることがある | | | | | |
| 初期 | 36 | 71 | 35 | 15 | 7 |
| 終期 | 40 | 77 | 37 | 12 | 4 |

とてもそう思う ややそう思う どちらとも言えない
 あまりそう思わない 全くそう思わない (数値は% 回答総数:113)
 ※割合は四捨五入したものであるため、合計が100%にならない場合がある。

図4 児童質問紙調査結果

3-4 研究の成果

「単元デザインシート」および「授業改善シート」を活用し、授業構想と授業評価を繰り返し行うことで、指導者は児童の姿を具体的に捉えながら、発問の工夫や交流の目的の明確化を図り、児童が学びをつなぎ新たな気付きを生み出す授業づくりを継続して行うことができた。

(初期)示された並べ方を基に、3種類のファイル23人分を全部並べた長さの求め方を式や言葉で表し、計算の結果をもとに判断する。
(終期)350×16の積を求めるために、350×2をもとにして、16が2の8倍であることに着目し、350×2の積の8倍を求め、その求め方を式や言葉で表す。

| 平均値 | 7 | 14 | 43 | 35 | 2 |
|----------|----|----|----|----|---|
| 初期(2.9点) | | | | | |
| 終期(3.3点) | 17 | 14 | 48 | 19 | 2 |

式と言葉で求め方を記述している(5点)
 式と言葉で求め方を記述しているが、説明が不十分な部分がある(4点)
 式と言葉で求め方を記述しているが、表記や計算に間違いがあるまたは、式か言葉のどちらかで求め方を記述している(3点)
 上記以外の解答(2点) 無解答(1点) (数値は% 回答総数:58)
 ※割合は四捨五入したものであるため、合計が100%にならない場合がある。

図5 評価問題による学力調査の結果

4. 今後に向けて

児童が蓄積した数学的な見方・考え方を、単元内にとどまらず、単元間や学年間においても系統的に活用できるようにするためには、学習内容のつながりを意識した指導計画や振り返りの工夫など、指導の充実をさらに図っていくことが求められる。また、目指す児童の姿と実態に基づく授業改善の視点を指導者間で交流・共有を進めることで、授業改善が個々の実践にとどまることなく、学校全体の継続的かつ組織的な取組として一層充実していくことが期待される。



図6 研究授業の様子
(長浜市立速水小学校)

参考：滋賀県総合教育センター 令和7年度 研究員派遣による学校支援に関する研究 研究論文

(山下 亮)

1 共同研究事業

4) 自ら考える児童と学び続ける教師が共に創出する授業を目指して

1. 事業名および担当者

事業名は「自ら考える児童と学び続ける教師が共に創出する授業を目指して」であり、担当者は次の通りである。

長浜市立永原小学校：中岡 勝博(校長) ※長浜市小学校教育研究会 算数部会 部会長

長浜市立塩津小学校：中川 浩伸(教頭)

教職大学院：山下 亮

2. 事業の目的

本事業は、長浜市小学校教育研究会算数部会において、研究授業や授業研究会等の実践的な取組を通して指導技術や授業づくりの工夫について学び合い、市内で算数科を担当する教員の授業力向上を図ることを目的として実施しているものである。

今年度は、児童が主体的に学習に取り組む姿勢や、課題に対する見通しをもって学習を進める力に課題が見られるという実態を踏まえ、「生活に根ざした課題を設定した課題追究型学習と交流活動」を研究の柱として位置付けた。具体的には、実生活と関連付けた問題場面の設定や、式と図を関連付けて考える活動、ペアやグループでの対話的な学びを取り入れることで、児童が自ら思考を深め、考えを表現・共有しながら学びを広げていく授業づくりを目指した。

3. 事業の概要

上記の目的を達成するため、長浜市立長浜南小学校において1月に実施する研究授業に向けて、授業計画の構想および指導案の検討を丁寧に重ねた。第6学年「およその形と面積」の単元においては、児童が身近な事物の形を既習の図形として捉え直し、およその面積や体積を主体的に求める活動を通して、図形の数量的把握に関する思考力・判断力・表現力を育成するとともに、学習内容を生活に生かそうとする態度を養うことを単元の目的として設定した。その達成に向けて、実生活と関連付けた課題設定や、見立て・概測を取り入れた問題解決的な学習過程、さらにペアやグループでの交流活動を位置付けるなど、児童が自ら考えを深められる授業づくりを意図して指導案を作成し、研究授業を実施した。

大学担当者は、事前の指導案検討会における助言および授業研究会における指導助言を通して、単元構想や授業改善について専門的な立場から支援を行った。

なお、年間のスケジュールは表1の通りである。

表1 年間スケジュール

| 実施日 | 曜日 | 内容 | 場所 |
|--------|----|-------------------|------------|
| 8月4日 | 月 | 研究の方向性の確認、指導案検討会① | 長浜市立長浜南小学校 |
| 11月25日 | 火 | 指導案検討会② | 長浜市立長浜南小学校 |
| 1月23日 | 金 | 研究授業および授業研究会 | 長浜市立長浜南小学校 |

3-1 研究授業(第6学年「およその形と面積」)および授業研究会

指導案検討会では、単元前に実施したレディネステストの結果から、「三角形」「平行四辺形」の面積や「円柱」の体積の求積に課題が見られたことが話題となった。そこで、これらの課題を単元を通して意図的に扱い、既習事項を繰り返し活用しながら理解を深められる学習過程を位置付け、単元計画を構想した(表2)。研究授業(第5時)では、「円柱」の体積の求積場面を位置付けるため、第4時の校舎の体積の求積活動から発展させ、世界遺産である「ピサの斜塔」「コロッセオ」を題材とした課題を設定することとした。身近な事物から社会的・世界的な対象へと段階的に広げることで、実生活とのつながりを意識した学びとなるように工夫した。

表2 単元計画 ※研究授業は第5時

| 時間 | 学習活動 |
|----|-------------------------------------|
| 1 | 琵琶湖の概形を捉え、およその面積を求める |
| 2 | いろいろな都道府県の概形を捉え、およその面積を求める |
| 3 | プールの概形を捉え、およその体積を求める |
| 4 | 長浜南小学校の校舎の概形を捉え、およその体積を求める |
| 5 | 世界遺産(ピサの斜塔, コロッセオ)の概形を捉え、およその体積を求める |

研究授業では、子どもたちが課題に対して、既習事項を活用しながら粘り強く求積に取り組む姿が見られた。また、一人一台端末を活用し、地図アプリを用いて世界遺産の実際の高さや長さを調べて計算したり、自分の考えを端末上で整理・可視化した資料を基にペアやグループで交流したりするなど、ICTを効果的に活用しながら思考を深める様子も確認された(図1)。これらの活動を通して、児童が主体的に課題解決に取り組み、根拠をもって考えを表現・共有する姿が見られた。



図1 研究授業の様子

授業研究会における指導助言では、自力解決の場面で児童の思考過程やつまづきを丁寧に見取り、一人ひとりが見通しをもって取り組めるよう適切な支援を行うことの重要性を示した。また、交流場面では、多様な考えに触れながら理解を深めることが大切であり、結果だけでなく思考の過程を共有するよう、授業者が交流の目的を児童に対して明確に示すことの重要性を示した。これらを踏まえ、児童の思考を可視化しながら学びを深める指導の在り方について、授業改善の視点を共有した(図2)。



図2 授業研究会の様子

4. 今後に向けて

本事業を通して、生活に根ざした課題を取り入れた課題追究型学習や交流活動により、児童が既習事項を活用しながら主体的に課題解決に取り組み、図形の数量的把握について思考を深める姿が見られた。また、指導案検討会や授業研究会での協議は、授業づくりや指導方法を見直す貴重な機会となり、算数科における指導力向上につながったと考える。今後も、児童の実態に即した課題設定と対話的な学習の充実を図りながら、生活と結び付いた授業づくりと実践研究を継続していくことを期待したい。

(山下 亮)

1 共同研究事業

5) 中学校における「共に学ぶ」視点に立った授業づくり

－特別支援学級での構想から実践，省察を校内で共有する取組を通して－

1. 事業名および担当者

事業名は「中学校における『共に学ぶ』視点に立った授業づくり－特別支援学級での構想から実践，省察を校内で共有する取組を通して－」である。滋賀県総合教育センターの研究事業「研究員派遣による学校支援に関する研究（特別支援教育）」におけるトータルアドバイザーとして関わった。

担当者は，次のとおりである（生徒の個人情報保護の観点から，研究協力校名を伏せて報告する）。

滋賀県総合教育センター：西川昭子（研修指導主事），北川真世（研究員）他

研究協力校：滋賀県内 Y 中学校，Z 中学校

滋賀大学：窪田知子（学部教員）

2. 事業の目的

「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン（基本ビジョン）」（滋賀県教育委員会，2019）では，特別支援教育の基本理念を達成するための中心の柱として「共に学ぶ」とともに，それを支える柱の1つとして「教員の資質能力向上」が挙げられている。今日，多様な教育的ニーズのある児童生徒がいることを前提とした学級経営・授業づくりが求められているといえる。

前年度には，「中学校特別支援学級の生徒の『共に学ぶ交流及び共同学習』の充実－生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通して－」というテーマで，県内の2つの中学校（X 中学校および Y 中学校）を研究協力校として，特別支援学級に在籍する生徒が持てる力を発揮し，学習活動に参加している実感や達成感を得られるような「自立活動」および「交流及び共同学習」のあり方について検討を行った（『教育実践総合センター年報』第8号，2025）。本研究は，引き続き，中学校における特別支援教育に関わる学びを支える取組として，特別支援学級の授業づくり（構想から実践，省察）を学校全体で共有することを通して，生徒理解の視点や指導方法の工夫などを通常の学級における授業実践に生かすことで，「共に学ぶ」視点に立った授業づくりを校内に広げることがを目的とする。

3. 事業の概要

(1) 研究の進め方

2校の研究協力校（Y 中学校および Z 中学校）において，以下のスケジュールで研究を進めた。週に1回，研究員の北川教諭が各校を訪問し（4～11月），特別支援学級および通常の学級の授業づくりにつ

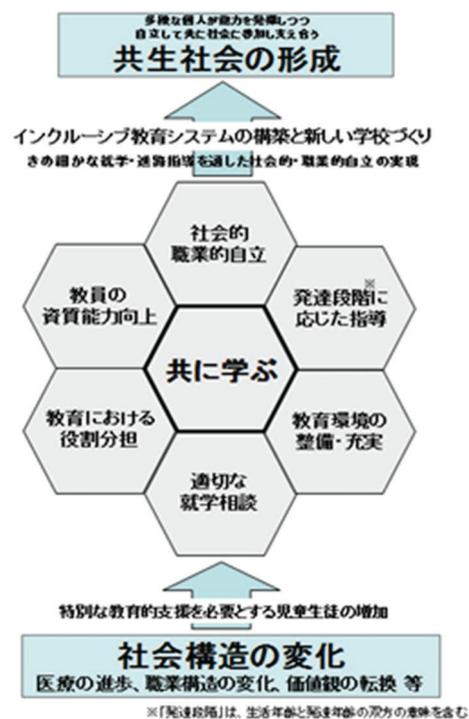


図1 基本ビジョンの構成イメージ

「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン（基本ビジョン）」（滋賀県教育委員会，2015）より抜粋

いて検討を重ねるとともに、2回の派遣研究協議会を実施し、校内の教職員とともに各校での取組について交流・協議を行った。窪田は各校第2回派遣研究協議会に参加し、指導助言の役割を担った。

(2) 各校における研究協議

【第1回派遣研究協議会】

校内の関係教員が協働して特別支援学級の生徒理解を進め、指導内容や指導方法を工夫した授業を構想・実践し、その後、生徒の姿を基に省察し、次の授業を構想した。この一連の過程を校内で公開することで、生徒の実態に応じた指導の工夫やその効果を学校全体で共有した。

【第2回派遣研究協議会】

○ Y中学校：令和7年11月19日

第1回研究協議会で共有した特別支援学級における数学科の授業づくりの取組から、対象生徒（自閉症・情緒障害学級在籍）が安心して交流および共同学習に参加できるよう、①個に応じた支援、②「見て分かる」支援を取り入れた家庭科の授業実践を共有し、協議を行った。

○ Z中学校：令和7年12月3日

自閉症・情緒障害学級担任による通常の学級の国語科の授業を参観し、特別支援教育の知見を生かした授業づくりや指導の工夫（①授業冒頭の5分間の『学習タイム』、②めあてを『見える化』したプリントの活用、③段階的な朗読練習、④ICTの活用）を中心に、協議を行った。

(3) まとめ

終期の質問紙調査では、本研究を通じて、Y中学校、Z中学校ともに、「個に応じた指導内容や指導方法の工夫に対する気付きがあった」「通常の学級の授業づくりに取り入れたいと感じる特別支援教育の視点があった」という設問に対して多くの教員が肯定的に回答していた。また、授業者自身が「誰かに行う支援は、他の誰かにも役立つ」「生徒一人一人が安心して学べる授業になるよう表情や進度を丁寧に見取りながら指導を行うことで、どのように進めると分かりやすいのかを考える場面が増えた」と振り返っている。これらのことから、特別支援学級の授業づくり（構想から実践、省察）を学校全体で共有することを通して、特別支援教育の視点（生徒理解や指導方法の工夫など）を通常の学級における授業実践に生かすことが、「共に学ぶ」視点に立った授業づくりの実現に寄与する可能性を示すことができたと考える。

4. 今後に向けて

本研究で追究してきた「共に学ぶ」視点とは、特別支援学級に在籍する生徒の交流及び共同学習だけを指すのではなく、通常の学級に多様なニーズの生徒が学んでいることを前提に、どの生徒も安心して学習に向かえる環境整備や「わかった」「できた」という実感を支える授業の工夫を含むものとして、教師一人ひとりが意識して取り入れていくことが必要である。そのための核となりうる特別支援学級の実践を継続的に校内で共有する仕組みづくりとともに、学校全体で授業改善に取り組んでいくことができる校内体制のあり方については、今後も引き続き検討していきたい。

(窪田 知子)

1 共同研究事業

6) 特別支援学校における子どもの可能性を引き出す ICT 活用のあり方

－実態に応じた指導・支援の充実と学校全体で推進していく校内連携を通して－

1. 事業名および担当者

事業名は「特別支援学校における子どもの可能性を引き出す ICT 活用のあり方－実態に応じた指導・支援の充実と学校全体で推進していく校内連携を通して－」である。滋賀県総合教育センターの研究事業「研究員派遣による学校支援に関する研究（特別支援教育 ICT 活用）」におけるトータルアドバイザーとして関わった。

担当者は、次のとおりである（児童生徒の個人情報保護の観点から、研究協力校名は伏せて報告する）。

学部教員：石田基起

滋賀県総合教育センター：高田真奈美（主幹），大石泰士（研究指導主事），西尾芽（研究員）他

研究協力校：県立 X 特別支援学校，県立 Y 特別支援学校

2. 事業の目的

今日、特別支援教育においては、個々の教育的ニーズに応じた指導の充実とともに、ICT を効果的に活用した学習環境の整備が求められている。近年、GIGA スクール構想の推進により、学校現場における ICT 環境は大きく整備された。一方で、機器が整っても、どのような場面で、どのような目的で活用するのかという教育的視点が十分に共有されていない場合もあり、個別的・断片的な活用にとどまることも少なくない。また、児童生徒の反応や変化をどのように捉え、支援の改善につなげるかという評価の視点も課題となっている。

こうした状況を踏まえ、本事業では、学校現場への研究員派遣を通して、ICT を活用した教育実践の具体化とその構造化を図るとともに、児童生徒の実態や反応を手がかりとしたアセスメントに基づく指導・支援の在り方を検討することを目的とする。あわせて、校内における ICT 担当教員や関係部署との連携を促進し、実践の共有と改善を重ねることにより、児童生徒が学習活動に主体的に関わることを支える ICT 活用モデルの構築を目指すものである。

3. 事業の概要

(1) 研究の進め方

2校の研究協力校において、以下のスケジュールで事業を進めた。研究員が週1回程度各校を訪問し、ICT を活用した授業実践および個別の支援場面について参与観察を行った。あわせて、校内研修会やワークショップを実施し、ICT 活用の目的や方法について共有を図った。その上で、児童生徒の学習参加の様子を踏まえ、ICT 機器の選定や活用方法、支援の工夫について協議を重ね、実践の改善を図った。

| | X 特別支援学校 | Y 特別支援学校 |
|----------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 【第1回派遣研究協議会】 ICT 活用の現状把握と課題整理 | 令和7年8月28日（木） 10:30～12:00 | 令和7年8月18日（月） 10:00～11:30 |
| 【第2回派遣研究協議会】 成果報告と支援モデルの整理 | 令和7年11月21日（金） 16:00～17:00 | 令和7年11月14日（金） 16:00～17:00 |

(2) 各校における研究協議

【X 特別支援学校】

第1回研究協議会では、1学期の実践や質問紙調査の結果について報告された。また、第1回ワークショップ「ロイロノート・スクールについて」、第2回ワークショップ「iPadのアクセシビリティ機能と入出力装置について」の報告があり、2学期に向けた課題が整理された。第2回研究協議会では、2学期の実践を振り返り、活用場面の具体化やICTの役割について整理した。ICT活用の目的を共有することで、教員間の連携が円滑になり、児童生徒の主体的な活動参加が増加したことを確認した。

【Y 特別支援学校】

第1回研究協議会では、1学期の実践や質問紙調査の結果について報告された。また、第1回ワークショップ「ロイロノート・スクールについて」についての報告があり、2学期に向けた課題が整理された。第2回研究協議会では、実践成果を共有するとともに、課題の抽出を行った。ICT活用により、自信を持って考えを共有できたり、自ら工夫して活動参加したりする姿が見られたことを確認した。

(3) まとめ

本事業では、子どものアセスメントに基づく授業改善と校内連携を軸に、特別支援学校における子どもの可能性を引き出すICT活用のあり方について検討した。

学校現場では、ICT機器の導入や操作技能の習得が目的化されやすい側面がある。しかし本事業では、子どもの実態や教育的ニーズを踏まえたアセスメントを起点とし、何のためにICTを用いるのかという活用の意図を明確にすることが重視された。

その結果、ICT活用は補助的な機器利用ではなく、子どもの学習参加の質や自己表現の幅を広げる手立てとして再定義されていった。視線入力装置による描画活動や、ロイロノートを活用した個別最適な学びの実践においては、児童生徒の集中の持続、主体的な参加、自己表現の拡大といった具体的な変容が確認された。さらに、ワークショップやロイロノートによる情報共有を通して、教員間で実践事例や子どもの変容を伝え合う機会が生まれた。質問紙調査の結果からも、「指導・支援におけるICT活用」および「情報共有の意識」において有意な向上が認められ、ICT活用をめぐる校内文化に変化が生じつつあることが示唆された。このように、アセスメント→実践→子どもの変容→共有→教員の意識変容→新たな実践という循環が徐々に形成された点に、本事業の意義があると考えられる。

4. 今後に向けて

今後は、校内体制や研修と連動させながら、持続可能な活用の仕組みを構築していく必要がある。ワークショップやロイロノートによる情報共有は一定の成果を示したが、知識の共有を実際の授業実践へと結びつける支援のあり方が課題として残された。そのため、継続的な研修体制の整備とともに、子どもの具体的な変容を含めた情報共有が求められる。ICTを目的化するのではなく、児童生徒の主体的な学習参加を支える手立てとして、日常の授業づくりの中に位置付けていく視点が重要である。

(石田 基起)



図1 研究概要 (研究発表大会助言スライド)

1 共同研究事業

7) 学び続ける子どもの姿を目指して

～単元で働かせる見方・考え方を重視した授業研究を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「学び続ける子どもの姿を目指して～単元で働かせる見方・考え方を重視した授業研究を通して～」である。担当者は以下の通りである。

東近江市教育研究所：田中 慶希(所長)，小笹 由花(指導主事)，藤原 里菜(研究員)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

東近江市は、「なぜだろう?」「わかった!」「またやりたい!」と学び続ける子どもの姿を目指し、継続して研究を進めている。令和7年度は、「学び続ける子どもの姿を目指して～単元で働かせる見方・考え方を重視した授業研究を通して～」を研究テーマとし、「子どもが主体となる探究型授業の実現」「単元をデザインする授業スキルの向上」「単元で働かせる見方・考え方を明確にした授業」をキーワードに、授業づくりに取り組んだ。本事業は、これらの取組を踏まえ、「単元をデザインする」ことに重点を置いた授業づくり、「学び続ける」子どもの姿の実現、校種や教科を超えた授業研究会の一層の充実をねらいとした。そして、単元で働かせる見方・考え方を明確にした授業づくりを協働で進めることで、教科指導や授業改善に生きる視点を見いだすことを目的とした。

3. 事業の概要

東近江市では、授業改善推進委員会において指導案の検討や授業研究会を実施し、研究授業の成果と課題を分析している。これらの成果は、本市で夏季休業中に開催される教育研究所研究発表大会での報告や指導案の公開を通して市内へ発信し、その後の支援とあわせて普及を図っている。

本学教員はアドバイザーとして参画し、指導案検討や授業研究会において指導助言および講義を行った。本学教員が関わった事業の日程は以下のとおりである。

6月 9日(月) 第2回授業改善推進委員会(指導案検討会)

6月 20日(金) 第3回授業改善推進委員会(授業研究会，小学校算数科)

6月 24日(火) 第4回授業改善推進委員会(授業研究会，中学校理科)

9月 30日(火) 第5回授業改善推進委員会(指導案検討会)

10月 23日(木) 第6回授業改善推進委員会(授業研究会，中学校国語科)

10月 28日(火) 第7回授業改善推進委員会(授業研究会，小学校社会科)

(1) 小学校算数科の実践より

小学校第6学年「データ活用」において、「目的に応じてデータを集め、代表値(平均・最頻値・中央値)やグラフを使って判断する力を身に付けること」や「自分の考えが本当に妥当かを批判的に考察する力を身に付けること」を単元の重点目標として授業を実践した。

研究授業では、本時の学習内容とこれまでの単元での学習とを関連付けた導入の工夫、日常生活と結び付けた学習課題の設定、ICTを活用した他者参照の機会の提供といった手立てを講じたことで、

主体的に学びに向かう児童の姿が多く見られた。研究協議では、他者参照する学習活動の中で、「なぜそのように考えたのか」「どのように考えを導いたのか」といった思考の過程や意図を共有し合うことで、数学的な見方・考え方の広がりや深まりにつながることを確認した。

(2) 中学校理科の実践より

中学校第3学年「電池とイオン」において、「金属の種類によってイオンのなりやすさが異なることを理解すること」や「電池の仕組みを説明できること」を単元の重点目標として授業を実践した。

研究授業では、30分間を生徒に委ね、協働的に学ぶ環境を設定した。その結果、互いに疑問点を尋ね合いながら課題を解決し、主体的に学びを進めることができていた。また、その過程で教科書やこれまでの学習記録を自ら参照し、学んだ知識を活用して課題に向き合うなど、学び方を身に付けている姿が確認できた。研究協議では、協働的な学びに入る前に、説明に必要な知識や考え方の視点を考える場面を設定し見通しをもたせることで、より深く学ぶことができることを確認した。

(3) 中学校国語科の実践より

中学校2年生「古人と語る(徒然草)」において、「古典に表れたものの見方や考え方を理解することができること」や「古人の見方や考え方に対して自分の考えを述べることができること」を単元の重点目標として授業を実践した。

研究授業では、学習時間の多くを生徒に委ねる展開とした。その結果、分からない語句を自ら調べたり、ICTを活用して古文を読み解いたり、グループで課題解決の進め方を話し合ったりするなど、自ら学習を進める姿が多く見られた。研究協議では、「子どもが主体となる探究型授業」の実現に向けて、学習内容を自身の経験や価値観と結び付けて考えることができるようにするなど、生徒一人一人の個性があらわれる学習内容にすることも大切な視点であることを確認した。

(4) 小学校社会科の実践より

小学校第6学年「武士による政治の安定」において、「江戸幕府の政策や身分制度などを理解すること」や「江戸幕府の政治が長く安定した理由を考え、自分の考えをもつこと」を単元の重点目標として授業を実践した。

研究授業では、「一人で考えるのか」「他者と協働するのか」「誰と交流するのか」などの学び方を児童が選択できるように学習環境が整えられていた。その結果、児童は自分のペースで学ぶことができていた。また、他者との交流のデモンストレーションを取り入れたことで、新しい気付きを得たり考えを深めたりする姿が多く見られた。研究協議では、「新しい疑問が出てきて、もっと詳しく知りたい」など、学習後も学び続けたい学習にすることが重要であることを確認した。

4. 今後に向けて

どの研究授業においても、子どもたちが自ら「見方・考え方」を働かせながら学ぶ姿が多く見られた。その要因として、授業者が単元のねらいと教科の特質を踏まえ、子どもたちに働かせたい見方・考え方を具体的にイメージしていたことが挙げられる。また、子どもたちに多くの時間を委ねる学習展開としたことで、探究的に学ぶ子どもの姿が生まれたと考える。今後は、こうした学びがより深まるよう、授業者が子どもたちの学びの進捗や方向性を見取りながら適切にコーディネートしていくことが重要になる。これらを踏まえ、さらなる授業改善・指導改善につなげていきたい。(北村 拓也)

1 共同研究事業

8) 「自分の考えをまとめ、表現したり記述したりできる子ども」の育成 ～小学校国語科における授業実践を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「自分の考えをまとめ、表現したり記述したりできる子ども」の育成～小学校国語科における授業実践を通して～である。担当者は以下の通りである。

甲賀市立伴谷小学校：校長 松村 隆雅，校内研究主任，教職員

湖南市立下田小学校：校長 須佐見 浩樹，校内研究主任，教職員

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

滋賀県教育委員会では、令和7年度の取組の重点として「学んだことを基に、自分の考えをまとめ、表現したり記述したりする力の育成」を掲げている。このことは学校現場の教職員も課題として認識しており、自分の考えをまとめる力や書く力の向上を校内研究のテーマとして掲げる学校も多い。

そこで、本事業は、「自分の考えをまとめ、表現したり記述したりできる子ども」の育成を目指し、校内研究へ参画する2校との協働的な研究を通して、指導改善や授業改善に必要な視点进行を明らかにすることを目的とする。

3. 事業の概要

本学教員は指導案検討や授業研究会において指導助言および講義を行った。本学教員が関わった事業の日程と内容は以下のとおりである。

(1) 甲賀市立伴谷小学校の実践より

○ 事業の日程

5月14日(水) 指導案検討会 5月21日(水) 授業研究会 6月25日(水) 授業研究会
10月14日(火) 指導案検討会 10月22日(水) 授業研究会 11月19日(水) 授業研究会

○ 事業の内容

伴谷小学校では、令和7年度の校内研究において、「自分の思いを書いて表現できる伴谷っこの育成～「できた！」がたくさん溢れる言葉の指導を通して～」をテーマに研究を進めた。

第3学年の国語科の授業実践(6月)では、「書くこと」の指導事項である「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること」を重点目標に設定し、社会科の校外学習で訪れた消防署やスーパーマーケットで収集した情報を整理し、自分が見つけた仕事の工夫について報告文にまとめる学習を行った。授業研究会において、以下のことを確認した。

- ・他教科との関連を図り事前に書く材料を集めることは、児童にとっても授業者にとっても学習目標や内容を焦点化することにつながり、効果的である。
- ・書く学習において、児童がどのように思考しどのように判断しているかを見取ることが重要である。そのためには、書く過程を可視化できるような手立てを講じることが大切である。

第4学年の国語科の授業実践(11月)では、「必要な語句などの書き留め方を理解し使うこと」や

「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること」の指導事項の育成を目指し、自分の好きな伝統工芸品についてリーフレットをつくり紹介する学習を行った。授業研究会において、以下のことを確認した。

- ・児童が自分自身の興味・関心に応じた学習のゴールを選ぶことで目的意識を強くもつことができ、自分の考えをまとめたり表現したりする学習活動に粘り強く取り組むことができる。
- ・自分の思いを表現できる力の育成に向けて、これまでの「書くこと」に関する学びを結び付け、総合的に力を発揮できるようにする授業の構成の工夫が求められる。

(2) 湖南省立下田小学校の実践より

○ 事業の日程

5月12日(月) 指導案検討会 6月4日(水) 授業研究会 9月17日(水) 授業研究会

○ 事業の内容

下田小学校では、令和7年度の校内研究において、「自分の考えを持ち、自ら学び続ける子どもの育成～一人ひとりの確かな学力の向上を目指した指導法の工夫～」をテーマに、「課題に対して、自分の考えを持つことができるための手立て」「子どもが安心して伝え合える手立てや環境づくり」「まとめや振り返りで学びを自覚できるための手立て」の三点を重点に研究を進めた。

第5学年の国語科の授業実践(6月)では、「書くこと」の指導事項である「目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすること」を重点目標に設定し、自分が選んだユニバーサルデザインを3年生に報告文で紹介する学習を行った。授業研究会において、以下のことを確認した。

- ・思考ツールの活用は、思考の過程を可視化することができ、自分の考えをまとめるときや互いの考えや書き方を共有するときに効果的である。
- ・子どもが自分の考えをもつために、「何を書くのか」「どのように情報を整理するのか」「どのような構成にするのか」など、自ら見通しをもてるように支援することが重要である。
- ・子どもが安心して伝え合える環境づくりに向けて、心理的安全性が保たれる学習集団にすることが大切である。

特別支援学級での生活単元学習の授業実践(9月)では、「友達の話の内容に注意を払い、集中して聞くことができる」や「話の構成や表現を工夫して、自分の思いや経験を分かりやすく伝えることができる」を重点目標に設定し、「夏休みの思い出を伝え、クイズ大会を開こう！」の学習を行った。授業研究会において、以下のことを確認した。

- ・学習の目標に応じた振り返りを行えるようにすることで、子どもたちの学びの実感につながる。
- ・確かな学力の向上に向け、子どものつまずきを見取り次の授業に生かす「学習改善等につなげる評価(形成的評価)」の充実が重要である。

4. 今後に向けて

「自分の考えをまとめ、表現したり記述したりできる子ども」を育成するために、どのようにまとめるのか、どのように表現するのか、といった総合的な力を身に付け発揮できるようにすることが重要である。また、子どものつまずきを見取り次の指導に生かす形成的評価を充実させる視点も欠かせない。このことは、次期学習指導要領の改訂に向けても重視されていることである。これらを踏まえ、さらなる授業改善・指導改善につなげていきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

9) 「教職員の研修観の転換」に向けた「探究型研修」に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名は、「教職員の研修観の転換」に向けた「探究型研修」に関する研究である。担当者は以下の通りである。

滋賀県総合教育センター：所長 太田 義人

研修指導主事 海外 万希子，前田 顕吾，寺川 絵理，中谷 諭

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、教師自身の学び(研修観)の転換を図ることが求められている。この方針を受け、滋賀県総合教育センターでは、理念である「子どもの夢と生きる力を育むための教職員の探究的な学びを全力支援」のもと、参加者が「問いをもつ」「対話する」「知識・スキルとであう」「省察する」の学びのサイクルを通して「豊かな気づきの醸成につながる探究型研修」に取り組んでいる。このことを踏まえ、本研究では、本学教員が参画する研修において、研修実施者と協働で研修をつくるプロセスに着目する。そして、研修講師の視点から「探究型研修」を実現するために必要な要点を見いだすことを目的とする。

本研究の対象とする研修は以下の通りである。

- ・教職2年次研修(小学校/第1回)
- ・教職3年次研修(中学校/第1回)
- ・校内研究主任パワーアップ研修(小学校・中学校/第1回～第3回)

3. 事業の概要

(1) 教職2年次研修，教職3年次研修より

○ 研修の目的や内容

教職2年次研修(小学校/第1回)は、「主体的な学びを育む国語科の授業づくり」と題して、国語科の授業力向上を目的とした研修を実施した。教職3年次研修(中学校/第1回)は、「今求められている授業づくり」と題して、滋賀県が推進する「子どもたちが主体の授業」と関連させながら、さらなる授業力向上につなげる研修を実施した。

○ 研修実施における工夫と取組

- ・イントロダクションにおいて、研修のテーマの視点から、これまでの授業実践の経験を振り返り、「どのような授業ができる教師になりたいか」をイメージし対話を行った。そして、そこから自分なりの目標や問いをもって研修に臨めるような場面を設定した。
- ・教職2年次研修では、事前に自分で設定した授業力向上のテーマが共通する参加者同士でチームをつくり、「モチモチの木」を教材として、どのような授業を構想するかを検討する場面を設定した。教職3年次研修では、研修のテーマに関連する国や都道府県が示す複数の実践事例を用意し、その中から参加者が自分のニーズにあった実践事例を選択して学び、学んだ内容を共有する場面を設定した。

○ 参加者の学びの姿より

参加者の学びに対する自己評価では、教職2年次研修では「学びが深まった」69%、「やや深まった」

30%、「どちらとも言えない」1%という結果であった。教職3年次研修では「学びが深まった」65%、「やや深まった」33%、「どちらとも言えない」2%であり、いずれの研修においても多くの参加者が学びの深まりを実感していることが分かる。

学びの振り返りの記述をみると、教職2年次研修の参加者の約65%が「他の先生方と対話する機会が多く、自分で考えるより学びが深まったと感じた」「同じ悩みをもつ先生方との対話を通して、自分の授業のよい面や課題に気づくことができた」など、共通の目的をもつ教員同士で対話することの有効性について言及していた。また、教職3年次研修では、約35%の参加者が、「実践事例を調べる時間があり、少しもやもやを解消することができた」「国や都道府県の授業実践例を見て、自分たちの授業に生かせるかを考え、ワクワクを見つけることができた」など実践事例や資料を手掛かりに、個別や協働を一体的にしながら探究的に学ぶことのよさについて述べていた。

(2) 校内研究主任パワーアップ研修より

○ 研修の目的や内容

校内研究主任パワーアップ研修(小学校・中学校)は、校内研究主任としての職務および校内研究を組織的に推進するための明確なビジョンと手法を学ぶことを目的とした研修である。第1回で、「効果的な校内研究を進めるための校内研究主任の役割」について、第3回で、「校内研究のまとめ・評価、および次年度の構想に向けて重視すべき視点」について講義を行った。

○ 研修実施における工夫と取組

- ・研修の構想段階では、研修実施者とともに、「研修の目的(実現を目指す教職員の姿)」と「研修の目標(参加者にどのような気づきや変化があるか)」について検討し、共通理解を図った。
- ・全3回という研修の構成を踏まえ、各研修の終末には、所属校での実践に向けた目標や内容を考え、見通しをもつことができるようにした。そして次の研修において、その実践を振り返り、他者との対話を通して新たな気づきを得る場面を設定した。
- ・従来のように、講師が長時間講義を行うという形式とは異なり、本研修は、「参加者が経験や実践を振り返り他者と対話する」「自分の好きな読み物資料を読む」「実践事例を聞く」「講義を聞く」といった多様な学びの機会を組み合わせる構成であった。そのため、講義については、知識や情報の伝達ではなく、講師自身の経験を語るというスタンスで行うことを大切にされた。

○ 参加者の学びの姿より

学びの振り返りをみると、参加者が、講義の内容と自身の「校内研究観」「校内研究主任観」と照らし合わせる中で、自信を深めたり、新しい見方や考え方に気づいたりしている記述が多くみられた。また、「教師も探究していく研修が必要であることがよく分かった」「3回の研修を通して、探究的・主体的・対話的な学びを実際に体験し、自分だけでなく学校全体がめざす理想の学び方を実践的に学べた」などの記述から、教師自身が探究的に学ぶ意義に気づき、「探究的に学ぶ」ことへのイメージをより明確にしている姿がうかがえた。

4. 今後に向けて

本研究を通して、「探究型研修」を実現するためには、研修実施者と研修講師が「研修の目的」や「研修の目標」を共有し、共通理解をすることが重要であることを改めて実感した。また、研修講師自身も今求められている教職員研修のあり方を理解し、単なる知識の伝達にとどまらず、探究を促すファシリテーターになるなど、研修観の転換を図る必要があると考える。

(北村 拓也)



資料2. 事業広報フライヤー

プロジェクトは順調に完了し、作品を2月22日に YouTube_渡邊史公式研究チャンネルにて、リリース公開した。作品は以下から鑑賞することができる。 ■ <https://youtu.be/ZwQikNTfqXs>

「多国籍のパーティ」をメインイメージとし、学外からはミシガン州立大学連合日本センター (JCMU)、放送大学滋賀学習センター、鎌倉女子大学、その他、音楽団体や音楽愛好家、演劇業界方面の人材が参集。2歳から80代の幅広い年齢層、立場、地域から、延べ90名のエントリーと、昨年度に増して広範囲からの参画規模となった。音声データの採取はスマートフォンなど手持ちのデバイスで十分なクオリティを得ることができ、データ授受は“LINE オープンチャット”など、汎用されているシステムを用いることで全員がスムーズに取り組むことができた。これらのことから、筆者が研究を進めている「遠隔型 協働イベント」の実施シミュレーションとして、今年度も充分な有効データを採取することができた。

③ステージング実践〜どう見える？どう見たい？どうしたい？
〜きょうの自分をプロデュース!!

令和8年1月20日に附属中学校・多目的室にて行った。講義展開のねらいは、以下を生徒に体験させ、実践に導くことである。●目的を設定し、身体を用いた計画的表現活動を試みる ●見本となる「型」や「技術」を知った上で、それらを応用する ●他者と自身を比較し、自己調整を行いながら「客観的視点」の発揮を導く ●「想像」を具体化、具現化するため、論理的な思考を展開する ●他者と協働しつつ「ステージ」の空間・時間の創出を体験する。

ワークシートを用いて「架空のミュージカル作品」への出演を想定しつつ、キャラクターや役どころを自由に考案する」ところから開始し、1)「表現」とは何か、2)表現の「型」3)エンタテインメントにおける「表現」、4)実践ワーク、の流れで進行した。生徒各々が「想像を具現化する」ために、自分の身体をどのように用い(自己認識)、それがどのように見えるかを予測し(客観性)、実施する(具体性)内容は、リベラルアーツ教育のねらいに合致するものである。

外部講師として、著名な音楽家であるバリトン歌手／大谷圭介氏、ピアニスト／小林千恵氏を招き、実演鑑賞も併せて行った。また、講義の数日後、対象生徒たちはびわ湖ホールにてオペラの鑑賞機会があった。既修の学び、知識をもって臨むことで、より多様な視点から観劇することができたことが報告された。

4. 今後に向けて

現行『学習指導要領』にては「近年の国内外の学力調査の結果などから、我が国の子どもたちには思考力・判断力・表現力等に課題がみられる」と特筆され、「表現力拡大」の必要性が頻回に言及されている。しかし、その具体的な方法については詳らかにされておらず、「各教科の努力」に任されているのが現状である。“entertainment”は人類の発明であり、人類の歴史の中で常に希求されてきた。筆者は、日々の生活、社会こそが、entertainment (心を惹きつけるもの) であるべきだと考えている。我が国の教育目的「生きる力」の獲得とは、個々が自身の人生を entertainment としてプロデュースできる能力の獲得ではないだろうか。リベラルアーツ教育は、そのために力を発揮する、と確信している。

次代を担う児童生徒たちの「表現力」を育成するため、理論的かつ具体的な方法の開発、およびメソッドの構築が、筆者の主たる研究課題である。今後も自身が現役の舞台芸術表現者であることの知見を反映しながら、学びと研鑽を怠らず、さらに研究を進めてきたい。 (渡邊 史)

1 共同研究事業

11) 特別支援学校における児童生徒の発達理解と支援の充実に向けた教員研修の実施

1. 事業名および担当者

事業名は「特別支援学校における児童生徒の発達理解と支援の充実に向けた教員研修の実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

A 特別支援学校：林紗稚枝教諭

2. 事業の目的

特別支援学校に在籍している児童生徒（特に知的障害）が増えている。同じ障害種別の児童生徒であっても、その子どものよさや課題、これまでの育ちなどは一人ひとり異なる。そのため、特別支援学校には、より多様な児童生徒が増えているといっても過言ではない。児童生徒の発達を理解し、適切な支援を行っていくためには、アセスメントが重要である。知能検査や発達検査もアセスメントの一つである。児童生徒の支援にあたって、検査の概要や数値で表される指標の意味、結果を解釈する際の留意点、結果をどのように実践に役立てていくかについて、理解を深める必要がある。そこで、本研究では、知的障害と肢体不自由の児童生徒を対象とした特別支援学校を実践校として、その学校に就学や進学する際に引継ぎ情報として得られていることの多い発達検査である新版K式発達検査2020を取り上げた教員研修を行うこととした。特別支援学校の教員がその概要や結果の解釈などについて学ぶとともに、事例検討として事例生徒1名を取り上げ、学校での様子や課題、検査結果の分析、支援方法の検討などをプログラムに取り入れ、その効果を明らかにすることを目的とした。

3. 事業の概要

(1) 対象者

A 特別支援学校（知的障害・肢体不自由）を実践校とし、その学校で勤務する教員 34 名を対象とした。

表 研修プログラム

| 時間・研修項目 | 内容 |
|--|---|
| 講義 40 分：講義「新版 K 式発達検査 2020 の概要・解釈」 | ・新版 K 式発達検査 2020 の概要・解釈の概要を知る。 ・検査結果で示される領域やその数値の意味、解釈の仕方、留意点、リスクについて学ぶ。 |
| 演習 40 分：事例検討 ・生徒の実態、課題、検査結果から支援方針を検討 ・支援方法を発表（オンラインフォームツール）に入力 | ・事例生徒の主訴や学校での様子、検査中の様子や検査結果について、検査を実施した教員より説明する。 ・検査結果からわかることや支援方法等をペアで検討を行う。 ・オンラインフォームツールにより、支援方法を回答する。 ・現在の担任が、いまの学校での様子や担任の支援等を説明する。 ・講師によるコメントを行う。 |
| まとめ 10 分：振り返り、質疑応答 | ・発達検査を実践で活用する際の留意点等について説明する。 |

(2) 講義「新版K式発達検査2020の概要・解釈」

新版K式発達検査2020は、対象は0歳から成人で、1980年の公表以来40年以上の歴史をもつ検査であり、2020年に再改訂が行われた。子どもの発達の状況や行動特性を理解し、望ましい行動の発達を援助する手がかりが得られることが特徴である。その検査の結果「姿勢・運動領域(P-M)」「認知・適応(C-A)」「言語・社会(L-S)」「全領域」の3つの領域が数値で示される。新版K式発達検査2020は、検査場면을構造化された観察場面と捉えており、さまざまな種類の課題が用意され、検査を通じて、多くの情報を収集できる。対象年齢が0歳から成人と幅広く、障害の程度が重い児童生徒も実施することができる。子どもに合わせて検査項目の順番やどこまで実施するかを、一部を除いて検査者が柔軟に決められるところも特徴の一つであると説明した。結果の解釈にあたっては、主訴と検査の目的に照らし合わせて解釈していくことが求められ、受検者の反応について、その検査項目が該当している年齢水準の標準的な反応との比較等により分析していくと説明した。ただし、結果として算出される発達指数や発達年齢の取り扱いには十分注意する必要があると、数値にとらわれ一喜一憂したり、一面的な捉え方になったりする恐れがあることを伝えた。検査項目について、できたかできなかったかだけで評価するのではなく、受検者が見せた反応を観察し、支援に生かす必要があると説明した。例えば、できなかった場合についても、その時に見せた子どもの姿によって、発達の様相は異なり、支援の仕方も違うであろう。解釈は、主訴と検査の目的に応えるよう検討することが求められると説明した。

(3) 事例検討

実際にA校に在籍している生徒Bを取り上げることとした。生徒Bの検査を実施したA校の教員より、生徒Bの実態や課題、検査結果の情報を提示しながら説明し、対象者が支援方法を検討することとした。検討を行う際には、対象者同士がペアになり対話をしながら行った。検討の時間を15分ほどとり、ペアで考えた支援方法をオンラインフォームツールに回答してもらい、全体で共有することとした。回答は「体験と視覚支援を取り入れた理解を促す支援（体験を重ねながら視覚的に支えることで、確実に理解できるようにする）」と「やり取りと表現活動を通じたコミュニケーション能力を育てる支援（他者との関わりの中で、自分の思いを表現しようとする姿を育む）」の大きく2つに分類された。

(4) まとめ

研修を振り返り、あらためて発達検査を実践で活用する際の注意点について説明した。具体的には、検査結果を「客観的・正確なもの」と過信せず、数値が独り歩きしないようにすることや、行動観察も重要なアセスメントの一つであると伝えた。さらに、アセスメントの際には、できていないことばかりに目を向けるのではなく、子どものよさやできること、できつつあることにも着目するように促した。

4. 今後に向けて

本研究では、新版K式発達検査2020の概要や結果の読み取り方を理解するだけでなく、実際の事例を基に検討を行い、検査結果を支援にどう生かすかを考える構成とした。就学する際に引継ぎ情報として得られていることの多い新版K式発達検査2020を研修で取り上げたが、対象者のニーズや実践に関連するものであり理にかなっていた。研修プログラムは、知識の習得だけに留まらず、理解した内容を実践に結びつける「学びの循環」を重視した点に特徴がある。その結果、特別支援学校における教員研修のあり方を再考する示唆を与え、校内研修の一つのモデルになるといえよう。

(林紗稚枝・山川直孝)

1 共同研究事業

12) 中学校通常の学級における特別支援教育の推進に向けたコンサルテーションの実施

1. 事業名および担当者

事業名は「中学校通常の学級における特別支援教育の推進に向けたコンサルテーションの実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

滋賀県内公立中学校：X 教諭（本報告では連携先学校名、担当者名の公表を控える）

2. 事業の目的

滋賀県教育委員会が令和7年（2025年）に公表した「滋賀の特別支援教育」によると、公立中学校の通常の学級における特別な支援を必要とする生徒数（割合）は4,661人（12.53%）となっている（令和6年9月1日現在）。これは10年前の平成27年度に比べて、対象の生徒数は1.54倍（割合は4.87ポイント）に増えている。このことから、通常の学級において、多様な特別な教育的ニーズのある生徒への支援が喫緊の課題になっているといえよう。生徒への支援を充実させるためには、専門的な助言等を要請するなどして、組織的、計画的に取り組むことが求められている。本研究では、中学校にコンサルテーションを実施し、通常の学級での支援の充実に取り組むこととした。

3. 事業の概要

本研究では、実践校として県内の公立中学校1校を指定した。実践校には、今年度約400名の生徒が学んでいる。実践校では特別支援教育コーディネーターX教諭が本研究の窓口となった。通常の学級で特別な教育的ニーズのある生徒をケースに取り上げ、年間3回（7月、11月、3月）、教職大学院担当者が実践校を訪問し、コンサルテーションとして、授業での観察や関係教員（特別支援教育コーディネーター、学年主任、担任）と懇談を行った。懇談では、個別の指導計画の記載内容や支援の状況、各教員が課題や不安に思っていることへの助言を行った（表）。

なお、本事業には、教職大学院に在籍する学生も関与し、コンサルテーションに帯同し、中学校における特別支援教育の現状や具体的な取り組み等について理解を深めた。

表 コンサルテーションの内容

| 時間・研修項目 | 内容 |
|-----------------|---|
| 30分：各生徒についての説明等 | ・特別支援教育コーディネーターとの打ち合わせ（日程の確認等） ・ケース生徒の主訴，学校や家庭での様子，学校の指導体制についての聞き取り，個別の指導計画等の確認。 |
| 50分：生徒観察 | ・ケース生徒の授業での様子，教員の授業の進め方，実際に行っている支援等について確認する。 |
| 75分：個別の事例検討と助言 | ・特別支援教育コーディネーター，学年主任，担任と，ケース生徒の実態と今後の支援を中心に検討をする。 ※生徒一人あたりおおむね20分程度 |
| 10分：その他 | ・特別支援教育コーディネーターとコンサルテーションのふりかえり |

毎回のコンサルテーションの冒頭では、特別支援教育コーディネーターより、ケース生徒の学校や家庭での様子、学校の指導体制、個別の指導計画の内容についての説明があった。生徒の主訴や具体的な課題としては、「学習への意欲が乏しい」「生徒同士のトラブルがある」「授業内容の理解が難しい」などであった。教員は「授業改善」「ICTの活用」「あたたかい励まし」「ルールを決める」「個別に声を掛けたり説明をしたりする」「座席等の教室環境の配慮」「教材の工夫」などの支援に心がけていた。個別の指導計画については、支援の対象となる生徒については全員作成されており、教員は学年会といった既存の会議を活用して教員間で情報共有を進めて支援にあたっており、組織的に取り組まれていた。生徒観察では、ケース生徒の実態や授業での様子、教員の授業の進め方、支援等について直接確認した。

個別の事例検討と助言では、ケース生徒一人ずつ（各25分程度）個別に設定し、今後の支援を中心に検討を行った。教職大学院担当者からは、具体的な目標の設定や教員の手立てを明確にすることや、支援にあたっては生徒のできることやできつつあることに目を向けることを伝えた。また、保護者も悩んでいるケースが少なくないことや学校だけでは対応が難しいケースについては、福祉や心理相談など、県内の公的な外部機関を示し、その関係機関へのつなぎ方や連携の仕方等についても説明した。

生徒指導提要によれば、生徒の学校生活における困難な状況の背景には、その個人が抱える課題と教職員や周りの生徒との人間関係や学習環境に関する課題の両面が影響しており、学級全体の生徒への指導や支援から学級の中での個別的な指導や支援、そして、必要に応じて個別的な場での個別的な指導や支援を階層構造で考える必要があると指摘されている。実践校においては、授業改善や教員間の連携を意識した指導が行われており、これらの取り組みは、生徒指導提要の発達支持的生徒指導の充実につながる意義ある実践であると考えられる。生徒理解を深化させることにつながるであろう。今後も継続的に取り組んでいくことが重要であろう。

コンサルテーションについてX教諭からは「第三者の視点から助言をもらうことで、自分たちの支援を客観的に振り返ることができた」「これまで行ってきた支援の方向性が間違っていなかったことを確認でき、安心感につながった」「具体的な目標や手立てを整理することで、今後の指導の見通しが持てた」といった声が聞かれた。このことから、本事業におけるコンサルテーションは、教員の実践を支え、心理的安全性を高める機能も果たしていたと考えられる。

4. 今後に向けて

今回のコンサルテーションは、個々の生徒に応じた支援の充実に向けて、校内の教員のみでは気づきにくい視点から助言を得る機会となった。また、これまで実践校が積み重ねてきた取り組みを評価し、言語化する機会にもなった。外部の専門家が支援の状況を確認するという点で、実践を点検するチェック機能としての意義も大きい。特別支援教育を推進していく方策の一つとして、コンサルテーションは有効であり、今後は県内に広げ、より一層充実させていくことが求められる。県内市町の中には、特別支援教育に関する専門家チームを編成し、小中学校への巡回指導を行っている自治体もみられる。本研究で実施したプログラムが、こうした取り組みを検討する際の一つの参照事例となることが期待される。

本研究には、教職大学院の学生2名が関与した。通常の学級における特別支援教育の実態を具体的に理解する学習機会となった。生徒の実態把握から支援の検討、教員間の協議に至るまでの一連の過程を実地で経験することができ、特別支援教育に関する理論と学校現場での実践を結び付けて捉える機会となった。今後もこうした学生が研究に関与する機会を検討していきたい。

(山川 直孝)

1 共同研究事業

13) 小・中学校の学びの系統性を意識した授業改善 ～甲賀市モデルによる学ぶ力の向上を目指して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「小・中学校の学びの系統性を意識した授業改善～甲賀市モデルによる学ぶ力の向上を目指して～」であり、担当者ならびに機関によって遂行された。〔学部教員〕渡邊慶子、〔連携先機関〕甲賀市教育研究所、甲賀市教育委員会事務局学校教育課、甲賀市立伴谷小学校、伴谷東小学校、土山小学校、油日小学校、甲南第一小学校、信楽小学校、雲井小学校、水口中学校、城山中学校、土山中学校、甲賀中学校、甲南中学校、信楽中学校〔連携先担当者〕原奈津子（甲賀市教育研究所・課長補佐）

2. 事業の背景と目的

本研究の目的は、甲賀市教員の小中連携を意識した授業力向上を図り、とりわけ「授業づくりを通じた教員の育成」を実現する授業研究の方法をモデル化することである（このモデルを暫定的に「甲賀市モデル」と呼ぶ）。兼ねてより甲賀市では、小学校教員と中学校教員が共同して校内研修の方法を研究したり、授業研究会に校種の別を超えて参加し合ったりしてきた（例えば、令和6年度共同研究事業）。これは、子どもたちの学力向上が、教員の授業力の向上に基づく「産物」として実現するという根本理念に基づき、長年実施されてきた取組である。

従来、教育現場では学ぶ力向上や児童生徒の主体的な学びを促進するための授業改善が求められてきた。その中でも、特に小中学校における学習内容の系統性を意識した授業改善は、教育の質を向上させるために重要な要素と考えられる。系統性とは、学習内容が段階的に積み重なり、関連性をもっていることを指す。系統性を意識した授業は、児童生徒が前の学年で学んだ内容を基にして、新しい知識及び技能、また思考力・判断力・表現力等を習得することを可能にする。このように、系統性を意識した授業を行うことで、児童生徒の学びが教科特有のものの方・考え方を養い、育てたい資質能力を身に付けることに繋がると考えられる。

また、系統性を考慮した授業改善は、教師の授業力向上にとっても重要である。教師が各学年のカリキュラムを把握し、小学校と中学校との連携を図ることで、授業の質が向上し、児童生徒の学びをより効果的にサポートすることができる。さらに、教師同士の情報共有や協力が促進されることで、教育現場全体の活性化にも繋がる。

しかし、実際の授業において学びの系統を知ることが、授業実践にどのように生かされ、また、どのような効果をもたらすかについては、まだ十分な研究が行われていないのが現状である。本研究では、国・社・算/数・理の教材開発や授業実践を小・中教員が共同ですることにより、一層の小中連携を図るとともに、小中学校における系統性を意識した授業改善の具体的な方法を探求し、教育現場に実践的な提言を行うことを目指した。

3. 事業の概要

本研究は、小中学校9年間を一貫した学びの過程と捉え、国語科、社会科、算数/数学科、理科の4教科において、児童生徒の学びをどう繋ぎ、高めていくかを検証したものである。授業実践では、教員が伝達することを中心とした授業スタイルを反省し、子どもたち自身の学びのプロセスを生かした指導を改めて明確化することに焦点があてられた。教員が正解を単に提示するのではなく、子どもたちが自ら問いに向き合い、仲間との対話や試行錯誤を繰り返す時間を十分に保障した。その結果、多様な考えを尊重しながら粘り強く取り組み、自分たちの力で学びをつくり上げようとする主体的な子

どもたちの姿が各教科で具体的に観られた。こうした変化が生まれた一つの背景には、12名の学力向上推進委員が校種の枠を超えて授業を共に作り上げたことが挙げられる。互いの専門性を尊重し、共に悩みながら協議を重ねたことで教員同士の関係が築かれた。この教員の繋がりこそが、9年間の学びを支える土台となり得ることが分かった。

(1) 「根拠」を大切にす探究スタイルの定着

すべての教科において、自分の考えに「文章の記述」や「実験結果」といった客観的な根拠をもたせる指導を重視した。これは、探究的な活動をする際の基本的な姿勢であると考えている。また、社会科で提案された、小学校での「小さな範囲での発見と解決（小サイクル）」を基礎とし、中学校で「単元を貫く深い探究（大サイクル）」へと繋いでいくモデルは、9年間の学びの質を段階的に高めていくための有効な指針となった。これらは、「探究」を意識した単元デザインの拠り所となる成果だと捉えている。

(2) 「委ねる」指導への転換

児童生徒に学びを委ねる場面を意図的に設定した。推進委員が互いの校種の授業を参観し合い、協議を重ねる中で、「教師が教えるよりも、子ども同士が根拠を言い合える方が深い理解に繋がる」という手応えを共有できたことは、推進員の授業観を変える大きな成果となった。

(3) 仲間としての繋がり

本研究の最大の成果は、小中の教員が同じ子どもを育てる仲間として繋がり、互いの専門性や苦勞を尊重し合える関係を築けたことにある。この関係があったからこそ、形式的な連携に留まらず、推進委員会の場合以外でもTeamsや前年度までの調査研究でツールとして活用したLSシートを使用し、自分たちの授業をよくするための共通実践として、具体的なキーワードの活用や授業例の共有が進んだ。

4. 今後に向けて

(1) 学び方のスキルの整理と積み上げ

子どもたちに学びを委ねるためには、その前提となるものが必要である。情報の収集・整理・引用の仕方、根拠の説明の仕方、ノートやワークシートの使い方、さらには、自身の学び方を反省するための方法といった学習技能（スキル）を、その学年でどこまで身に付けるのか教科を超えて具体化し、学校全体で指導していく体制づくりが求められる。

(2) 「探究」と「効率」を両立させる単元デザイン

学習内容が多く、時間の制約が厳しい中学校現場において、すべての授業で時間をかけた探究活動を行うことは難しい。今後は、単元全体を見て、「ここは教師が教える部分」「ここは時間をかけて児童生徒がじっくり考える部分」と、メリハリを付けた授業設計を行うための教材研究を深める必要がある。

(3) 自分事として教員間で広がる情報共有の仕組み

本研究で得られた成果を、推進委員だけでなく、市内のすべての教員が活用できるようにしていく必要がある。すぐに授業で使える共通のキーワードの提示や、1時間分の成功事例をTeams上で手軽に参照できる仕組みを整えるとともに、小中間の対話の機会を継続していくことが、学びの連続性を保障するものとなる。

今年度の成果を市内に広めるために、市内全小中学校教職員に配布をするリーフレットを作成した。小中の教職員が互いの学びの様子や内容を知り、意識することで、令和10年度から始まる小中一貫教育に向けた授業改善を進めることができ、それは、子どもたちの学力向上に繋がるものであると同時に、教職員の今後の授業改善のヒントになると確信している。

参考文献：甲賀市教育研究所（2026）「令和7年度 研究紀要（第21号 人材育成）」. 未公開.

（原 奈津子・渡邊 慶子）

1 共同研究事業

14) 自覚的な学びを促す小学校国語科の授業デザインの検討 ～学習方略の認知と使用に着目して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「自覚的な学びを促す小学校国語科の授業デザインの検討～学習方略の認知と使用に着目して～」である。

【担当者】 教育学部附属小学校 教諭 柴原 茜, 野間 隆秀, 伴野 彰宣
学部教員 長岡 由記

2. 事業の目的

本事業は、児童の学習方略と読解方略の認知・使用に着目し、児童の自覚的な学びを支える小学校国語科の授業デザインの要素を明らかにすることを目的とする。具体的には「読むこと」の授業を考察対象とし、児童が読むことの学習方略と読解方略を効果的に認知・使用できるようにするための授業デザインの要点について実証的な検討を行う。授業研究には大学院生と学部生も参加し、小学校国語科の授業デザインについて実践的に学べるようにする。

3. 事業の概要

本事業では、附属小学校の「これからの学びを語る会」（令和7年8月1日開催）と「第79回教育研究発表協議会」（令和7年11月15日開催）で公開された研究授業について、児童が「自然な思考の流れ」のなかで使用する学習方略及び読解方略に着目した検討を行った。また、それらの検討結果を踏まえて、12月に小学校4・5年生を対象として読解方略に関する質問紙調査を実施した。調査結果については現在分析途中であるため、その内容と考察等については、別稿にて発表する予定である。

本稿では、学習方略及び読解方略についての本研究での枠組みを示した上で、「第79回教育研究発表協議会」で公開された各学年の「読むこと」に関する授業について、学習方略に関連する学習指導の概要をまとめるとともに、児童の自覚的な学びを支える授業デザインの工夫について整理する。紙面の都合上、授業中に見られた方略の一部を取り上げてまとめることとする。

3. 1 学習方略及び読解方略の定義と考察の枠組みについて

「学習方略(learning strategy)」とは、「学習の効果を高めることをめざして意図的に行う心的操作あるいは活動」(辰野, 1997, 11)と定義され、「学習を促進する効果的な学習法・勉強法を用いるための計画, 工夫, 方法のこと」(前掲書, 11)を意味する。学習方略には様々な側面があることが指摘されており、論者によってその分類方法や項目は異なる。本研究では、佐藤(1998)の調査で用いられている「柔軟的方略」「プランニング方略」「作業方略」「人的リソース方略」「認知的方略」の学習方略カテゴリーを基に整理・検討する。

3. 2 各学年の授業の概要と考察

【2年生】単元名：「がまくん・かえるくんに大好きレターを送ろう～「ふたりはシリーズ」から「お手紙」の想像を広げる「〇〇くんらしさ」～」(光村図書2年下)

本単元は、「お手紙」(アーノルド＝ローベル)を読み、「人物らしさ」や「場面の対比構造」に着目

して登場人物の言動やその理由を解釈し、がまくん・かえるくんになりきって手紙のやりとりを行うことを通して、物語の場面の様子を具体的に想像する力を育てる授業である。本単元では、主に物語の設定や描写に着目して登場人物の行動や気持ちを読み取る認知的方略、手紙のやりとりを通して他者の考えと比較しながら理解を深める人的リソース方略、さらに単元の見通しを共有しながら学習を進めるプランニング方略の認知と使用を促す指導場面を組み込んでいる。具体的には、①単元導入で学習の目的や活動の見通しを共有すること、②登場人物の行動や会話など、どの叙述に着目して考えたのかを言語化することで読みの過程を意識させること、③手紙のやりとりを通して互いの解釈を交流し、自らの解釈を再構築する学習過程を設けること等の工夫を行っている。

【4年生】単元名：「音楽物語「ごんぎつね」で、読み味わたったことを表現しよう～行動や様子から読み深める登場人物の「心の声」～」（光村図書4年下）

本単元は、「ごんぎつね」（新美南吉）を叙述に即して読み深め、場面の移り変わりや登場人物の心情の変化を捉えながらごんの「心の声」を想像し、その解釈を音楽物語の表現に生かす学習を通して、場面の展開と人物の心情を関連付けて具体的に想像し、根拠に基づいて解釈・表現する力を育てる授業である。本単元では、主に学習課題と学習計画を設定するプランニング方略、叙述を基に登場人物の行動や心情を解釈する認知的方略、さらに友達と考えを比較し意見交流しながら読みを深める人的リソース方略の認知と使用を促す内容を組み込んでいる。具体的には、①単元冒頭で学習の見通しを共有し、方略使用の目的を明確化すること、②どの叙述を根拠に考えたのかを言語化させることで読解の過程をメタ認知的に振り返らせ、読解方略の自覚的使用を促すこと、③対話を通して解釈の違いに気づかせ、根拠を吟味しながら心情理解を確かなものにする学習過程を設定すること等の工夫を取り入れている。

【5年生】単元名：「資料の効果とわたしの工夫で、未来に願いを届けよう～「固有種が教えてくれること」と「自然環境を守るために」をつないで考える「資料の意味と価値」～」（光村図書5年）

本単元は、「固有種が教えてくれること」（今泉忠明）などの説明的文章を読み、筆者の意図を解釈しながら資料（図表・グラフ・写真等）の効果について考え、その学びを基に意見文を作成・推敲することを通して、資料の効果と論の進め方を関連付けて解釈したり、資料を意図的かつ効果的に活用して文章を書いたりする力を育てる授業である。本単元では、文章構造を捉えて学習計画を立てるプランニング方略、文章と資料とを結び付けて筆者の意図や資料の効果を読み取る認知的方略、さらに他者と資料の効果や分かりやすさを比較・交流しながら理解を深める人的リソース方略の認知と使用を促す内容を組み込んでいる。具体的には、①単元冒頭で学習の目的を共有し、文章を分析する視点を明確化すること、②どの資料がどの主張を支えているのかを言語化させることで、筆者の意図と資料の効果とを結び付けてメタ認知的に振り返らせること、③資料の分類・整理や、資料の効果について他者と対話的に検討することを通して、資料選択の判断理由を言語化させる場面を設ける等の工夫を行っている。

4. 今後に向けて

今後は、方略の認知・使用に加えて、方略の選択理由や調整過程の自覚化を促す授業デザインの在り方について検討を深めるとともに、質問紙調査の分析結果を踏まえ、実証的な研究を進めていきたい。

【文献】

佐藤純(1998)「学習方略の有効性の認知・コストの認知・好みが学習方略の使用に及ぼす影響」『教育心理学研究』46(4)、日本教育心理学会、367-376。

辰野千壽(1997)『学習方略の心理学－賢い学習者の育て方－』図書文化社

(長岡 由記, 野間 隆秀, 伴野 彰宣, 柴原 茜)

1 共同研究事業

15) 子どもの「やってみたい！」を引き出す造形活動の工夫 ～遊びや鑑賞を通して育まれる創造力と表現の楽しさ～

1. 事業名および担当者

事業名は、子どもの「やってみたい！」を引き出す造形活動の工夫 ～遊びや鑑賞を通して育まれる創造力と表現の楽しさ～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治

豊郷町立豊郷幼稚園：大和 高成（園長），教職員

2. 事業の目的

子どもが「つくりたい」と思う気持ちを育み、主体的・創造的に表現する力を伸ばすために、保育者の関わりや環境の構成を工夫しながら、造形活動を中心とした実践を追究する。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

申請者は、昨年度に引き続き今年度も、子どもたちを対象とした造形活動や対話型鑑賞活動に関する共同研究の依頼を受け、本研究に取り組んだ。本研究では、子どもの「やってみたい」という内発的な意欲を引き出す導入の工夫や、多様な素材を生かした表現環境の構成、活動の継続性を意識した展開の在り方、さらに他者とのかかわりを通して生まれる学びに着目し、新たな活動を実践する。これらを通して、幼稚園児の実際の姿をもとに、造形活動における効果的な題材設定や支援の在り方を明らかにすることを目的とする。

（2）成果と課題

10月15日に、年長・年中園児を対象として、ステージを備えた広い空間において、ワークショップ形式による共同制作を、休憩時間を含め約60分間実施した。「みんなでつくろう長い旗」では、ロール紙の代わりに耐久性に優れた建築資材であるタイベックシートを用いて活動を行った。ワークショップの主な流れは、次のとおりである。

- ① 強度に優れた住宅用資材であるタイベックシートの上に寝転び、思い思いのポーズをとる。
- ② 教職員がそのポーズの輪郭をマジックでなぞり、園児一人ひとりの「分身」を描き出す。その際、必ず隣の園児と手や足など身体の一部が重なるように設定した。
- ③ 大まかな下描きができた後、絵の具、刷毛、筆、ローラー、スタンプ、スプレー等の中から自分で使いたい道具を選び、全身を使って自由に表現する（図1）。

活動中、園児たちは刷毛やローラーに加え、自分の手足も用いながら、思い思いに表現に没頭する姿が多く見られた。



図1 表現する園児

また、その様子を参観していた教職員も、園児一人ひとりの感じ方や考え方に思いを寄せ、寄り添いながら、保育において大切にすべき視点について学び合う姿が見られた。参観後に記入された任意のアンケートには、本実践の成果が端的に表れていたため、その一部を以下に紹介する。

- ・自分の体のかたちを先生にペンでなぞってもらい、最初は「くすぐったい！」と笑っている子もいて、みんな楽しそうでした。自分のかたちが紙にうつると、「ぼくってこんななんだ！」「おおきいね」と自分の姿に驚いている様子が見られました。その後、ぬる作業では、自分の顔を描く子や、服に見立てて個性あふれる作品ができあがりました。色の選び方や塗り方にも工夫があり、子どもたちの表現力や想像力が育っていることを感じました。完成した作品を見せ合うと「すごーい!」「〇〇ちゃんのかわいい」と友達の作品をほめる声もあり、互いを認め合う温かい時間にもなりました。ありがとうございました。(ひまわり組)
- ・楽しい活動をありがとうございました。最初は一人一人の子ども達の型取りをするということではなかなか斬新でびっくりしましたが、普段、絵の描けない子、苦手な子も何のためらいもなく参加できて、みんなが同時に進んで行くことで一緒に楽しみながら、どんどん色の楽しさの世界に入ってダイナミックになっていく姿をみさせていただき、絵の無限の世界を感じさせていただきました。また、楽しい活動をよろしくお願いします。(年中)
- ・とっても楽しい活動ありがとうございました。どんな感じに色をぬるのかなあと思っていたら、線からはみださず丁寧にぬったり、ローラーをしたり子どもたちの性格がよくわかりました。普段からよく絵の具遊びはしています。あれだけ大きい紙に描いたのははじめてで、子どもたちもイキイキと楽しんでいたなと感じました。スタンプも様々な形があり、描くことに抵抗がある子でも楽しんで参加できると思います。今回教えてくださった活動をまたやってみたいです。(5歳児担当)

これらの感想から、自分の身体のかたちを起点とした活動設定が、園児にとって親しみやすい導入となり、造形活動への心理的なハードルを下げていたことがうかがえる。また、大きな画面と多様な用具を用いた環境構成により、描画に苦手意識をもつ園児も含め、全員が安心して主体的に表現に向かうことができていた。さらに、作品を見せ合い互いのよさを認め合う姿が見られたことから、本活動は造形表現を通して、自己肯定感や他者理解を育む契機となっていたと考えられる。活動後の後片付けや清掃までを含めた環境づくりについては今後の課題とする。

4 今後に向けて

幼稚園における遊びの中で、子どもが気づき、考え、試しながら楽しむ造形活動の可能性について、共同研究を通して一定の成果と課題を明らかにすることができた。本実践から、用途や完成形を限定しない素材の設定や、子どもの発想を受け止める保育者の関わりが、園児の「やってみたい」という内発的な意欲を引き出し、没頭を伴う造形行為につながることを示唆された。今後は、年齢や発達段階の違いによる活動の深まり方や、保育者が関わる場面と見守る場面の在り方に着目しながら、幼稚園教育における造形活動の質を高めるための視点を整理していきたい。あわせて、保育者自身の省察を促す研修のあり方についても、共同研究を継続しながら追究していく。

(青木 善治)

1 共同研究事業

16) 子どもが夢中になる造形活動の工夫と実践 ～遊びや鑑賞体験を通して育つ表現力～

1. 事業名および担当者

事業名は、「子どもが夢中になる造形活動の工夫と実践～遊びや鑑賞体験を通して育つ表現力～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治

豊郷町立愛里保育園：小野 淳（園長），教職員

2. 事業の目的

本事業では、保育園児における子どもの「夢中になる力（＝主体的に取り組む姿勢）」を大切にしながら、造形遊びや鑑賞体験を通して、表現する喜びや創造する楽しさを育む造形表現活動の在り方を明らかにすることを目的とする。

具体的には、豊郷幼稚園で行った実践と共通する全身を使った造形活動に加え、年中児を対象に、緩衝材・エコプラスの素材の特性を生かした「くっつけてつくろう」の活動を取り入れ、子どもが素材に触れ、試し、つくりながら没頭していく過程に着目する。これらの実践を通して、子どもの主体性を引き出す題材設定や環境構成、保育者の関わりの在り方について検討していく。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

本研究は、保育園児が造形活動において主体的に関わり、夢中になって取り組む姿がどのような条件や関わりのもとで生まれるのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、豊郷幼稚園で行った実践と共通する全身を使った造形活動に加え、年中児を対象に素材の特性を生かした「くっつけてつくろう」の活動を実施し、子どもが素材に触れ、試行錯誤しながら表現を深めていく過程に着目する。これらの実践を通して、子どもの「夢中になる力」を引き出す題材設定や環境構成、保育者の関わりの在り方について検討し、保育における造形表現活動の充実に資する知見を得ることを目指す。

（2）成果と課題

本実践では、多様な用具や素材の特性を生かした造形活動により、活動への不安や抵抗を示していた子どもも含め、全員が安心して主体的に表現に参加する姿が見られた。特に、水に湿らせるだけで接着できる緩衝材は、扱いやすく参加しやすい素材であり、子ども一人ひとりの発想に応じた多様な表現を引き出していた。また、素材の感触を楽しんだり、試行錯誤を重ねたりする中で、造形遊びが活動後もクラス内で継続して行われるなど、遊びが日常へと広がっていく様子が確認された。

一方で、緩衝材を用いた造形遊びでは、比較的手で持てる大きさの作品づくりに集中する傾向が見られ、形や空間的な広がりを伴う表現へと発展させるためには、題材提示や保育者の関わり方に工夫の余地があることが課題として挙げられる。また、全身を使った活動については、子どもが安心して思い切り表現できるよう、活動後の後片付けや清掃を含めた環境づくりを事前に整えていく必要がある。

参観された先生方が記した任意のアンケートに本事業の成果が端的に記されているので一部紹介させていただきます。

- ・自分の型をとることに抵抗がある子どももいたが、その後のローラーやポンポン?等で絵具あそびでは全員が楽しめていたのでよかったです。(5歳児担当)
- ・水だけでくっつくという手軽さが、普段のりやボンドを難しく思う子どもたちにも参加しやすかったように思います。初めてこの素材で造形遊びをしましたが生徒の数だけ様々な表現があり、とてもおもしろかったです。その後も継続して遊び、色を付けたい子や異素材と組み合わせたい子など遊びも深まっていきました。楽しい活動を教えていただき、ありがとうございました。さらにどのような素材と組み合わせ遊びを広げられるのか、教えていただけたら嬉しいです。(4歳児担当)
- ・今回の活動を通して、子どもたちが自由につくったり試したりする姿が印象的でした。緩衝材そのものの感触を楽しみながら、なぜ水でぬらすとくっつくのかという疑問を口にする子や何をつくらうかなと考えながら想像を膨らませる子など、子どもたちがそれぞれに楽しさやおもしろさを感じていたように見えました。今回の造形遊び後も、クラスで作品づくりをして遊んでいます。貴重な体験をありがとうございました。(4歳児担当)
- ・今回使用させていただいた道具は園にはないので、欲しいなと思いました。また、描画活動(経験したことの絵を描く)の指導をもっと知りたい。よかったら青木先生が指導している様子も見せてもらえると嬉しいなと思いました。(5歳児担当)
- ・トウモロコシが原料の素材で水に湿らせただけでくっつくということに驚きました。子どもだけでも簡単にくっつけることができるというのがよかったです。最初からつくるものを決めて形をつくっていく子や、くっつけることを楽しんでいる子など、いろいろな様子が見られ、それぞれに集中してつくっていたと思います。ありがとうございました。(4歳児担当)



これらの感想から、本実践で行った子どもが夢中になる造形活動の工夫と実践により、多様な用具や扱いやすい素材の特性を生かすことで、活動への不安や抵抗感をもつ子どもも含め、全員が安心して造形活動に参加し、楽しむ姿へとつながっていったことがうかがえる。特に、水に湿らせるだけで接着できる緩衝材は参加しやすく、子ども一人ひとりの発想に応じた多様な表現を引き出していた。

また、素材の感触を楽しんだり疑問をもったりする姿や、活動後も継続して作品づくりに取り組む様子が見られたことから、こうした造形活動は感覚的な楽しさにとどまらず、思考や探究心を伴いながら日常の遊びへと広がっていくことが示唆される。

一方で、緩衝材を用いた造形遊びでは、作品の大きさや空間的な広がりに伴う表現へと発展させるための題材提示や関わり方について、今後さらに工夫していくことが課題として挙げられる。

4 今後に向けて

本実践を通して、子どもが素材に触れ、試し、作りながら夢中になって表現する姿を引き出すためには、素材の特性を生かした題材設定や、安心して参加できる環境構成が重要であることが明らかとなった。特に、水に湿らせるだけで接着できる緩衝材は、子ども自身の手で扱いやすく、主体的な造形遊びを支える有効な素材であった。

今後は、こうした素材のよさを生かしつつ、異素材との組み合わせや題材提示の工夫により、形や大きさ、空間的な広がりに伴う表現へと発展させることを検討していきたい。また、活動の過程や子どもの姿を保育者間で共有し、造形活動における関わり方や環境づくりについて省察を深めることで、日常の保育に生かされる実践へとつなげていきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

17) 感じ・考え 互いに学び合い高め合う 笠縫魂 ～明日につながる保育を求めて～

1. 事業名および担当者

事業名は、「感じ・考え 互いに学び合い高め合う 笠縫魂 ～明日につながる保育を求めて～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治

草津市立笠縫こども園：管 久美子（園長），教職員

2. 事業の目的

本事業は、子どもが楽しんで取り組める造形遊びの在り方を探るとともに、造形遊びを進める上でのポイントや多様な技法について、保育者自身が実技を通して学び合うことを目的とする。子どもの姿を起点に、造形活動における環境構成や関わり方を見直し、明日につながる保育の実践へと生かしていくことを目指す。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

本研究は、子ども一人ひとりが感じ、考えたことを造形表現を通して自分らしく表し、仲間や保育者と互いに学び合い、高め合う過程に着目し、造形活動が子どもの創造力や自己肯定感の育成にどのように寄与するのかを明らかにすることを目的とする。あわせて、造形遊びにおける素材の選択や環境構成、保育者の声かけや関わり方について検討し、「明日につながる保育」の在り方を探究する。

（2）成果と課題

本実践では、全身を使って表現する造形活動（ワークショップ）を通して、子ども一人ひとりが強い期待感とワクワク感をもって活動に向かい、安心して夢中になって取り組む姿が多く見られた。大きな画面や豊富な色彩、すぐに表現に入ることができる環境構成が、子どもの「やってみたい」という気持ちを高め、友だちと関わり合いながら、また黙々と集中しながら表現を深める姿につながっていた。また、本実践は子どもの姿にとどまらず、保育者自身の学びや省察を促す機会ともなっていた。子どもの行為を否定せず受け止め、「楽しい」に変えていく声かけや関わり方が、子どもの意欲や主体性を一層引き出すことが、保育者の実感として共有された。準備や片付けへの不安を抱きつつも、子どもと同じ立場で造形活動を体験することで、保育者自身の保育観や関わり方を見つめ直す契機となっていた点は、大きな成果である。

さらに、こうした体験が活動後の保育室での遊びへとつながり、絵の具遊びや造形遊びが日常の中で継続・深化している様子が見られたことから、本実践は一過性の体験にとどまらず、「明日につながる保育」へと広がる可能性をもっていたと考えられる。一方で、全身を使ったダイナミックな造形活動であるがゆえに、準備や片付けを含めた環境構成や動線の工夫、保育者間での役割分担については、今後も継続して検討していく必要がある。

また、子どもの表現をさらに広げていくための題材提示や関わり方についても、実践を重ねなが

ら整理していくことが課題として挙げられる。

実践後に記入された任意のアンケートには、成果が端的に表れていたため、その一部を以下に紹介する。

- ・とても楽しかったです。前日に人型アートをすることを子どもたちに伝えると、とても楽しみにしていて、当日遊戯室に入ると、いつもにも増したキラキラの笑顔でした。自分の体の大きさに喜び、夢中になって絵の具だらけになっていました。自分が主となって進めていると見えない子どもの姿や呟き、発見がたくさんあり学びになりました。ありがとうございました。
- ・「思う存分に絵の具を楽しめる環境の準備」「どのタイミングも子どものやっていることを否定せず、楽しく変える」が私の1番の印象でした。特に最初の説明が始まる前にローラーを触り始めていた子どもに対し、青木先生の「触ってまってもいいよ」という一言で、子どもたちのわくわくがさらに大きくなっていると感じました。私の心のどこかにある「あ〜汚さないで」「こぼれる!!」「〇〇させたい」等の気持ちは捨てて、子ども主体で一緒に楽しむことを改めて大切にしていきたいと思いました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。
- ・先日は、心動かされまくりの造形遊びをありがとうございました。全身を描くと聞いて、楽しみな反面、準備と片付けの大変さが先に頭に浮かび、保育で実践するには勇気があるなどと思っていました。遊戯室に入り、目に飛び込んだ大きな白い紙！つながってる！？一人一枚ではないことにまず心がウキウキ！そして、色鮮やかな絵の具に心がわくわく！もう早くやりたい！私の心も子どもたちと同時進行でした。大きな紙に寝っ転がり、近くの人とつながるポーズ。楽しすぎます。そして、すぐにぬり始められる環境。混ぜても、手足も、道具も何もかもOK！！こんなに「やりたい」と思い続けられた遊びを準備してくださり、本当に感謝と学びで大爆発です。子どもたちが友達と言葉をたくさん交わしたり、また黙々と夢中で取り組んだり、そんな姿がたくさん見られた活動でした。絵の具が苦手だった子どももそんな素振りを見せず、喜んで参加していました。また、普段できない混色を思う存分楽しみました。感触もたくさん楽しみました。私は、かかどに付いた赤の絵の具がまだ残っています。この時にできた経験が保育室でも自由に絵の具で遊ぶ子どもたちの姿につながっていると思います。たくさん心を動かさせていただき、ありがとうございました！！紙コップの遊びも楽しんでます！！追いコップしてもらいました。！！



これらの感想から、自分の身体のかたちを起点とした活動設定が、園児にとって親しみやすい導入となり、造形活動への心理的なハードルを下げていたことがうかがえる。また、大きな画面と多様な用具を用いた環境構成により、描画に苦手意識をもつ園児も含め、全員が安心して主体的に表現に向かうことができていた。さらに、子ども園の作品展において、子どもたちの作品とともに本活動の成果が展示され、保護者と作品を見せ合いながら互いのよさを認め合う姿が見られたことから、本活動は造形表現を媒介として、子どもが自分の表現に自信をもち、他者の表現を受け止め合う関係性を育む機会となっていたと考えられる。

4 今後に向けて

本実践を通して、用途や完成形を限定しない素材の設定や、子どもの発想を受け止める保育者の関わりが、園児の「やってみたい」という意欲を引き出し、没頭を伴う造形活動につながる事が確認された。今後は、年齢や発達段階に応じた活動の深まり方や、保育者の関わりと見守りの在り方に着目し、幼児教育・保育における造形活動の質を高める視点を整理するとともに、保育者の省察を促す研修の在り方についても検討していきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

18) 対話型鑑賞（朝鑑賞）を通じたアート思考と自己肯定感の育成 －他者理解と多様性の尊重を基盤とした感性教育の実践－

1. 事業名および担当者

事業名は、「対話型鑑賞（朝鑑賞）を通じたアート思考と自己肯定感の育成－他者理解と多様性の尊重を基盤とした感性教育の実践－」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立平田小学校：北川祐子（校長），教職員・学級担任等

2. 事業の目的

本事業は、朝学習の時間を活用して行われている「対話型朝鑑賞（朝鑑賞）」について、継続的に実践してきた取組の効果と課題を明らかにすることを目的とする。平田小学校では、「朝読書」「朝学習」等に充てられている短時間の学習時間を活用し、学級担任がアート・カード等の美術作品を用いた対話型鑑賞を実施している。

本年度は、実践開始から5年目にあたることから、これまでの継続的な取組の成果を整理するとともに、学級や教員の変化を含めた効果と課題を検証する。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

対話型鑑賞（朝鑑賞）においては、児童が作品を見て感じたことや考えたことを言葉にして共有することを通して、自分の感性に自信をもち、他者の多様な見方や価値観を認め合う姿勢が育まれると考えられる。こうした実践の積み重ねは、学級における感性を大切に作る風土の形成や、安心して自己表現できる人間関係の基盤づくりにもつながる。

本研究では、筆者の前任校および埼玉県所沢市立三ヶ島中学校において効果が確認されてきた朝鑑賞の実践を、共同研究の依頼を受けた彦根市立平田小学校において2021年9月より継続的に実施してきた成果をもとに、その効果と課題を明らかにする。特定の美術知識を前提とせずに作品を楽しみ、他者と対話を通して意味や感じ方を共有する経験が、児童のアート思考、想像力、自分で考える力を育てるとともに、自分の考えを話す力や他者の話を聴く力といったコミュニケーション能力、さらには自己肯定感の育成にどのように寄与しているのかを検討する。

また、今年度は異動職員が多い状況を踏まえ、教員間での実践共有やアート思考に関する理解の深化、指導観の変容にも着目する。あわせて、発達段階や学級の特性に応じた鑑賞題材の開発・選定方法について整理し、継続的な実践に生かす視点を検討していく。

（2）成果と課題

朝鑑賞を実施された担任の先生方が記した任意のアンケートにその成果が端的に記されているので紹介させていただく。

- ・ 友達の意見に共感したり，納得したりする学級経営の大切さを朝鑑賞を通じて感じています。
- ・ 自分の感じたこと，気付いたことを自由に発言でき，周りもそれを認める雰囲気が出まわってよいです。活気ある時間。どの子も発言できる時間です。
- ・ 子どもの意識の中に，何を発言してもよいという安心感が存在する時間であると感じます。自分自身も，美術館等に関心をもつ機会となりました。
- ・ 正解不正解がないので，どの児童も積極的に発表しています。
- ・ 友達の意見に対して自分の意見を伝える，考えるがより一層できるようになった。
- ・ 関係はわかりませんが，図工の作品をつくる時に，「何をかいたらいいのかわからない」という児童が大変少ないと感じています。
- ・ 意見を受け入れる，認めることができている。(子ども)
- ・ 子どもの感性を知ることができる。(教師)
- ・ 柔軟な考えができる児童が多く，みんな意見が違って当たり前という認識をもっている。一方で正解を求める児童も一定数いる。
- ・ 「何か言ってみよう！」の気持ちが高まり，様々な教科の授業での発言回数が増えた。
- ・ 特別支援学級は，異学年で朝鑑賞をしていますが，低学年～高学年の違いがあっても取り組みやすくよかったです。自由に発言できる雰囲気ができたことがよかったです。

これらの感想から，朝鑑賞は，子どもが安心して考え，表現し，多様性を認め合う学級文化を育て，その学びが日常の授業や表現活動へと広がっていることがうかがえる。

また，実践を重ねる中で寄せられた先生方の質問や悩みに対し，筆者は「朝鑑賞参観レポート」を発行し，実践の一助となるよう共有してきた。

Q2：多くの絵や写真を見ながら意見や感想を伝え合う活動は盛り上がっていましたが，限られた時間の中で1枚の作品を深く味わう活動は難しく感じました。

A2：15分程度という限られた時間で1枚の作品を深く味わうことは，確かに容易ではありません。まずは，朝鑑賞が「1問1答」で終わっていなかったかを振り返ってみてください。朝鑑賞において教師は「教える人」ではなく，「問いをつなぐファシリテーター」として関わります。例えば，子どもが「時計が見えます」と発言した際に，「確かにそうですね」で終わらせるのではなく，「作品のどこからそう思いましたか」と問い返します。すると子どもは，「ここに数字や針のようなものが見え，これは6時頃をさしているように見えるので，時計だと思いました」と，表している時間や自分なりの根拠を言葉にし始めます。そこでさらに「6時頃というのは朝でしょうか，夕方でしょうか」と問いを重ねることで，子どもたちは作品の細部に目を向け，考えを深めていきます。このように問いを重ねることが，1枚の作品を深く味わうことにつながります。ただし，最も大切なのは，子どもが発言しているかどうかではなく，思考しているかどうかです。発言していなくても，友達の話を聴きながら考えている子どもも多くいます。教師は発言の量だけでなく，表情や姿勢，視線などから，子どもたちの思考の動きを捉えていくことが重要です。

今後も，先生方お一人お一人の悩みや課題に寄り添いながら，学び合っていきたいと考えている。

4 今後に向けて

朝鑑賞の実践が5年目を迎え，異動してこられた先生方との間で，取組に対する意識の違いが見られるようになった。そこで，ミニ研修会の実施や「朝鑑賞参観レポート」の配布を通して，対話型鑑賞の意義や留意点について，継続的に共有を図ってきた。

現在においても平田小学校では，どの学級においても，朝から落ち着いた雰囲気の中で一日が始まっている。今後も原点に立ち返り，子どもたちとともに正解のない問いを楽しみながら，朝鑑賞の効果と課題を明らかにしていきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

19) 中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名：中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト

担当者：林 睦（学部教員）

連携先担当者：高月道代（附属中学校教諭）

研究協力者：麻植美弥子、麻植理恵子（箏演奏家）

参加学生：学部生3名（交流実習）、教職大学院生1名

2. 事業の目的

事業の目的は、附属中学校と音楽科における箏の授業開発プロジェクトを実施し、その成果を今後の中学校の音楽の授業に活かすことである。

3. 事業の概要

・令和7年11月25日26日の2日間にわたって附属中学校の1年生3クラスに2時間ずつ箏の授業（箏の基本奏法の実技指導、「さくらさくら」の鑑賞と演奏）を実施した。音楽教育専修専攻の学生3名と、教職大学院生1名がサポートに入った。指導は附属中学校の高月道代教諭と箏演奏家の麻植美弥子氏、麻植理恵子氏の協力を得て実施された。これは、令和6年度の事業を改良したものとなっており、12月5日の附属中学校の校内研公開授業「箏の音色や響きと奏法の関りを理解して「さくらさくら」を演奏しよう」の全5時間の題材の第1時、2時として設定された。

・授業の概要と振り返り

ねらい：「どうすれば響きのあるいい音で演奏できるか」という問いを設定し、「自分のイメージした音を表現できる技能を身につけること」をめあてとして授業を設定した。「いい音」とは、個人によって感じ方が違うが、本授業では「響きのある音、余韻を感じられる音」と定義した。

授業の実際：授業は、鑑賞・講義・実技を組み合わせ進めた。授業を始めるにあたり、「どのような音が鳴るか弾いてみよう」とだけ指示し、目の前の箏を自由にさわらせた。生徒たちは箏のどこを弾くのか、どこに座るのかなどの情報がないままであったが、どんな音が鳴るのかを確かめ、爪ではじくと容易に音が出る箏の音色に親しんだ。

次に、ゲストティーチャーによる演奏を鑑賞し、自分たちの演奏と比べ、単に爪ではじくだけでなく、指ではじいたり左手で弦を押し下げる奏法による音色の違いを味わった。続いてゲストティーチャーによる響く音を弾く基本奏法の確認があり、2人で1面の箏を使い、親指の奏法を確認し、弾いた音の余韻をしっかりと感じられるよう練習した。ここでは授業開始前に共有した実技指導のポイント（①爪を滑らせ



て弾く、②弾き終わった時に次の弦で爪をとめる。③コロリンは一つずつ爪を上げずに一回で弾き切る)を、ゲストティーチャー、学部生、院生が生徒個別につき、響きのある芯のある音で弾けるようサポートして指導した。最後に、「さくらさくら」の最初の2小節「七七八 七七八」だけを弾いた。七七と同じ音が続くときの弾き方と、続けて弾く八の余韻にこだわって練習をした。2人で一面の箏を使うことにより、自分が演奏していない時は、仲間のサポートをしたり、演奏の仕方や余韻を客観的に観察していた。

再度、ゲストティーチャーによる「さくらさくら」の全曲の演奏を鑑賞し、唱歌の確認をした。演奏するときに唱歌を歌うことにより、伸びる音の音価や、「コロリン、テーン」の音の雰囲気を共有した。続いて生徒は「さくらさくら」の曲全体の練習をした。途中で、全員で合わせて弾く場面を作り、唱歌を歌いながら余韻を感じて演奏した。ここでは、全員で合わせたときに「伸びる音」が意識できず、自分のペースで弾いていた生徒も多く、「お互いに、伸びている音を聴いて、唱歌で歌っている音の長さを意識して弾こう」と声掛けをし、何回か演奏を繰り返した。授業の最後には、ゲストティーチャーによる「さくらさくら」の二重奏の模範演奏を鑑賞し、次回以降の課題を確認し終了した。



昨年度の事業で、ゲストティーチャーの活用を創作の授業につなげたことで、学びが深まったことを受け、今回は、自分の思いや意図を表現するための「技能習得」の部分ゲストティーチャーが担い、それを受け、中学校教員が展開するという授業を開発できた。授業に参加した学部生や院生には、現場で一教員として授業を展開するイメージをもって参加してもらえた。生徒は、自分の演奏した一音の余韻に浸り、箏の音色を味わうことができたことで、表現を工夫することにつながられるようになると思う。

4. 今後に向けて

本事業を通して、生徒が一音一音の余韻に意識を向け、箏の音色や響きを味わいながら演奏する姿が見られたことは、大きな成果であった。特に、ゲストティーチャーによる専門的な実技指導と、中学校教員による授業展開を組み合わせることで、生徒が箏の音に丁寧に向き合いながら、技能習得と音楽的な表現意識を高めていく授業を構成することができたといえる。こうした学習過程を通して、生徒が自分の音を聴き、表現を工夫しようとする姿勢も育まれたと考えられる。

今後は、本事業で培った「響きのある音を意識して演奏する技能」を、創作や鑑賞の学習と関連付け、生徒が自分の思いや意図をより主体的に音楽表現へとつなげられる授業開発を進めていきたい。また、学部生や大学院生にとっても、専門家や現職教員と協働しながら授業に関わる経験は、学校現場における授業実践を具体的にイメージする貴重な機会となった。今後も附属中学校との連携を継続し、中学校音楽科における指導内容・方法の充実を図っていきたい。

(林 睦 高月道代)

1 共同研究事業

20) 附属特別支援学校とおとさぼの連携による「まもりうた」プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名：附属特別支援学校とおとさぼの連携による「まもりうた」プロジェクト

学部教員：林 睦，宝田美子（学部教員）

附属特別支援学校：須田ひとみ，久田広光，早川千尋，前田容子，山崎雄大，山本玲奈，前川諒平，大塚紳史，水村浩樹，田中晋一（附属特別支援学校中学部教諭）

研究協力者：DA/LEDA 鈴木久仁子（ピアノ）佐藤朋子（ソプラノ）岩崎真弓（ヴァイオリン）
矢口亮子（チェロ）

参加学生：教職大学院生2名，学部学生2名

2. 事業の目的

附属特別支援学校中学部と附属音楽教育支援センター（おとさぼ）の協同による新たな音楽づくりプロジェクトを実施して研究につなげ，学会等でも発表する。また，おとさぼ体験プログラムに参加している学生の研修の場として，学生の学びにもつなげる。

3. 事業の概要

子どもが自分の歌をつくる「まもりうた」プロジェクトを提唱している東京の演奏団体 DA/LEDA の音楽家4名を招き，中学部の生徒一人ひとりと向き合っ，それぞれが自分の「まもりうた」をつくる活動をする。翌日，生徒たちを前に，音楽家が一人ひとりの「まもりうた」を演奏する演奏会を開く。学生が生徒の歌づくりをサポートする経験をするほか，音楽家らによる，子どもと「まもりうた」をつくるワークショップを受けられる機会も提供する。

・「まもりうた」づくり

朝から「今日はどんないいことがあるのかな？」と期待いっぱいに登校してきた生徒たち。活動の場となる多目的室をのぞきに來たり，教師に「今日は歌作るんやろ？」とたずねたりとわくわくした気持ちを行動の端々にのぞかせていた。

多目的室に集まり，DA/LEDA のみなさんの演奏を聴くと，パッと目が輝いた。直に，しかもこんなに近くで演奏を聴く機会はありません，その響きを肌で感じ，心を揺さぶられているようだった。動物の鳴き声というイメージしやすい音をテーマにした絵本の読み聞かせには，楽器でこんな表現ができるのかということに驚いたようだった。



歌の作り方を教えていただき，それぞれが1対1でうた作りに取り組み始めると，自分の番が待ちきれない様子だった。「自分の好きなこと」という自分にとって大事なことを開示するのは勇気のいることでもあると思うが，DA/LEDA のみなさんが自分の話を丁寧に聞き取ってくださることで緊張していた気持ちもやわらいでいくようだった。生徒の中には，話をしていく中で「好きなことをするときには集中する」

というエピソードと本人の持つやわらかい雰囲気とをつないで『もくもく』というタイトルを考え出せた子がいた。そのように多くの生徒が「もっと聞いてほしい、話したい」という思いを持つことができたのではないかと思われた。普段の授業の中では思春期らしく、自分の思いを表出することに躊躇する生徒も少なくないのだが、いくつかの例示を聴きながらどのメロディがいいかを決めていく場面では、なげやりな発言をする生徒はなく、じっくりと考えて「こっち！」と決める様子があった。一人ひとりを大切に時間を持つことでできあがった「まもりうた」は、生徒にとって「自分を大切にしてもらった」という経験を含めてとても大事なものとなったのではないかと思う。できあがった渾身の一曲に「自分なりの最高傑作ができた」と教師に報告する生徒もあり、生徒一人ひとりを大切にすることの意味を改めてとらえなおすことができた。

・「まもりうた」発表会

大切な「まもりうた」を一緒に作った DA/LEDA のみなさんとの再会、プレイルームに置かれたキラキラの王さま椅子に昨日以上の期待が高まっていた。発表が始まり自分の番が来ると、恥ずかしそうな表情ながらも少しうれしそうにキラキラの椅子に腰かけている生徒が多かった。



目をつむって頭を気持ちよさそうにかたむけながら生の楽器の音を聞く姿を見せた生徒の保護者は「楽しんでいるのだなとわかり、またコンサートに行ってみたいと思う」という感想を寄せてくださった。

車やバスに「オーライオーライ」と声をかけることが大好きな生徒は、その言葉を曲にしてもらった。声楽家の方に歌ってもらおうと、満面の笑みでオーライの手ぶりを付けながら自然と一緒に歌いだしていた。



発表する生徒だけでなく、それを見守る生徒も「どんなうたを作ったんだろう？」と楽しみにし、あたたかく応援するような気持ちで鑑賞する様子があった。

今回は保護者に参観は自由とお知らせしていたが、「まもりうた」づくりの日に家に帰った後「(明日のコンサートを) 見に来てほしい」と話した生徒があり、そのリクエストにこたえる形で参観に来てくださった保護者もあった。家族に聴いてほしいと思える、それくらいに大切な「まもりうた」となったのだと思われる。コンサートを参観できなかった保護者も、楽譜や mp3 音源をもとに家で生徒と一緒に楽しんだと伝えてくださる方が多くあり、音楽をきっかけに家族との会話が生まれたのがうかがえた。生徒と演奏者の方々、生徒同士、生徒と家族と、音楽を通してさまざまなつながりが生まれることが感じられた。



4. 今後に向けて

「まもりうた」づくりの活動は、「自分が自分であることの喜び」を味わう活動なのだと思う。音楽で表現したり、鑑賞したりすることで、楽しさが加わり、友達との共有もスムーズになる。「ひとり一人が大切にされること」の意味を改めて考えさせられる充実した活動となった。(林睦・須田ひとみ)

1 共同研究事業

21) 幼児を対象とした身近な用具(モノ)を使用した運動遊びの実践と検討

1. 事業名および担当者

事業名は、「幼児を対象とした身近な用具(モノ)を使用した運動遊びの実践と検討」であり、担当者は以下のとおりである。

学部教員：山田 淳子

草津市立矢倉こども園：檜崎 香(園長)，辻 愛里(副園長)，

竹内 智美(保育教諭)(以下、研修担当教諭と示す)，

小賀 菜月(3歳児担任)，奥島 未来(4歳児担任)，吉村 涼(5歳児担任)

2. 事業の目的

本研究では、保育者(担任)が幼児を対象に身近な用具(モノ)を使用した遊びの実践を行い、その成果を幼児の遊びに関わっていく姿から検証することを目的とした。特に本研究では運動遊びに焦点を置き、こども園の教育・保育目標の合言葉「こころわくわく やってみよう！はっけんいっぱい それいいね！」の達成につながるような実践を学部教員の支援のもと保育者(担任)とで行った。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本研究対象のこども園は、2年前から学部教員が子どもの運動能力の向上を目的として運動遊びの指導している。本年度は「教員が身近な用具(モノ)を活用してどのような運動遊びを実践することができるか。」という問いを解決していくことをめざした研修会を年間3回行った。この実践のファシリテーター役でもある研修担当教諭が、事前に各担任から各時期の幼児の興味関心と各担任の思いを聞き取り学部教員との話し合いの中で、研修会で使用する身近な用具(モノ)を決定した。研修会では、まず学部教員が幼児といっしょに身近な用具(モノ)を使用した運動遊びを行った。学部教員と幼児との遊びの時間が終了後、各担任、研修担当教諭および学部教員とで幼児の姿を振り返り、その後の遊びの発展のさせ方について話し合った。さらに研修後、各担任は各回の研修で学んだことを学級での継続的な活動として取り組み、その成果および課題を幼児の姿から明らかにした。

2) 本年度の活動内容 ※【 】内には使用した用具を記載

① 5月19日(月)

(3歳児)サーキット遊び全身を使った運動遊び【動物カード】

(4歳児)全身を使った運動遊び【新聞紙】(図1)

(5歳児)走る楽しさが感じられる遊び【新聞紙，ボール】

② 9月2日(火)

(3歳児)「走る」「止まる」という動きの要素を入れた運動遊び【タオル】

(4歳児)ボール遊びにつながる運動遊び【タオル】

(5歳児)視野を広げいろいろな動きが表出する運動遊び【平ゴム】(図2)

③ 1月19日(月)

(3歳児)浮遊スカーフを使った運動遊びの発展【浮遊スカーフ】(図3)

(4歳児)なわを使った運動遊びの発展【なわ】

(5歳児)タオルや浮遊スカーフを使った運動遊びの発展【タオル, 浮遊スカーフ】



図1 なげて、やぶって
新聞紙まみれになろう！



図2 くぐって、とんで！



図3 ふわっと、キャッチ！

3) 幼児の姿から成果および課題

(3歳児)

タオルやスカーフは「見立てる」「投げる」「跳ぶ」等、様々な使い方ができ、何よりも体にあたって安全ということで、遊びに取り入れやすいと感じた。そして、タオルを床に置き、跳び越えようとしていたり、両足を揃えようとしていたりすることで、ジャンプする動きにつながった。できるようにさせようとするのではなく、こどもたちがやりたくなるような声かけや工夫で、失敗を感じさせない遊びになることを学んだ。

(4歳児)

教えてもらった身体の動かし方を、普段の遊びの中でも意識して取り入れる姿が見られた。タオル遊びでは、身近で使い慣れた素材であるタオルを使うことで、こどもたちは難しさを感じることなく安心して身体を動かし、意欲的に遊びに参加することができていた。

(5歳児)

新聞紙、ゴム、タオルなど身近なものを使って、走る・跳ぶ・くぐる・投げるなど多様な動きを楽しみながら経験することができた。身近な道具が1つあることで、普段とは違う遊び方や体の使い方を楽しむことができ、遊びの広がりや発見につながった。特に、タオルをボールにして遊ぶ活動は、かたいボールではなく、タオルという素材だからこそ、「怖い」「当たると痛い」という気持ちが軽減され、自然と足を前に出してキャッチしようとする姿勢がとれていた。「最初からうまくできなくても大丈夫」と毎回の振り返りの中で言ってくれたことで、まずは、身体を動かす楽しさを感じられることを大切にする意識をもつことができた。

4. 今後に向けて

毎回の研修会(運動遊びの日)を幼児および保育者が楽しみにしている姿が感じられた。本実践から、幼児の運動遊びは保育者のアイデアや用具(モノ)使い方が無限に広がることを確認できた。今年度は特に、各担任と学部教員が研修担当教諭を介して事前に綿密な打ち合わせができたこと、また研修会後の園内での情報の共有化がしっかりとされたことが効果的であったと考えられる。今後は、今年度試すことができなかった身近な用具(モノ)からどんな遊びをつくることができるか、さらにどのような動きが表出するかを観察評価してその効果を検討していきたい。

(山田 淳子)

1 共同研究事業

22) 幼児の明日の遊びにつながる園内研修のあり方

1. 事業名および担当者

事業名は、「幼児の明日の遊びにつながる園内研修のあり方」であり、担当者は以下のとおりである。

学部教員：山田 淳子

草津市立笠縫こども園：管 久美子（園長），宇野 智子（副園長），
藤木 佐織（3歳児担任），溝渕 吉祥（4歳児担任），
中森 百香（5歳児担任）

2. 事業の目的

本研究では、草津市立笠縫こども園において保育者（担任）が年間を通して幼児の健やかな体づくりを目的として園内研究を試み、その成果を幼児の遊びに関わっていく姿から検証することを目的とした。特に本研究は、保育者（担任）が学部教員の助言を得ながら運動遊びの実践を行い、その直後に行うミニ研修会を通して日々の運動遊びに繋げていくことに重点をおいた。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本研究対象のこども園では、5年前より学部教員が子どもの運動能力の向上を目的として運動遊びの指導を行ってきた。本年度は、これまでの継続的な取組を生かし、保育者（担任）がさらなる運動遊びへの関心と指導スキルを身につけていくことを目的とした研修会として位置付けた。年間7回の取組の中で、研修会前に日々の運動遊びを通じた保育の課題について聞き取りを行い、研修会当日は各担任が示した課題を解決するための助言や支援を学部教員が行った（図1）。研修後、各担任は研修で学んだ内容を学級での継続的な活動として実践し、その成果と課題を子どもの姿から明らかにした。

2) 本年度の活動内容

① 6月30日（月）

（4歳児）走る、ジャンプ、スキップ、ギャロップ等を取り入れたリズム運動遊び

（5歳児）運動会のリレーにつながる運動遊び（1回目）

② 7月14日（月）

（4歳児）鉄棒などを取り入れたサーキット遊び

（5歳児）運動会のリレーにつながる運動遊び（2回目）

③ 9月3日（水）

（3歳児）ゲーム性のある運動遊び

（4歳児）ボールを使った運動遊び

（5歳児）運動会のリレーにつながる運動遊び（3回目）（図2）

④ 11月13日（木）

（4歳児）運動能力調査

（5歳児）運動能力調査



図1 担任と学部教員とのミニ研修会



図2 担任と幼児がリレー遊びを実践

⑤12月8日(月)

- (3歳児) ゲーム性のある運動遊び
- (4, 5歳児) なわを使った運動遊び

⑥1月16日(金)

- (3歳児) 鬼ごっこ(ふえ鬼, おひっこし鬼)などの競い合う運動遊び
- (4歳児) ルールのある運動遊び(鬼ごっこ, ドンジャンケン)
- (5歳児) ドッジボールおよびボール遊び

⑦2月10日(火)

- (3歳児) 鬼ごっこ(しっぽ取り鬼)などあきらめない力が育まれる運動遊び
- (4歳児) 鬼ごっこやボール遊びなど集団で楽しめる運動遊び
- (5歳児) ドッジボール

3) 研修の実際(5歳児の取組から)

本報告では、5歳児担任と学部教員との研修の実際について具体的に紹介する。本園では、運動会における5歳児の種目としてトラックリレーを実施している。5歳児担任が他の教員から知り得たリレーを「やってみたい」という思いを実現するため、段階を追って幼児に指導していくことにした。6月から5歳児担任と学部教員が相談しながら、各研修会におけるリレー遊びの内容を決定した。幼児の姿をみとる際には、走ることやバトンの受け渡しといった技能の優劣を評価するのではなく、リレーを遊びとして楽しめているかどうかに着目し、声かけを行うことを心がけた。3回のリレー遊びにおける研修内容および運動会での幼児の姿は以下の通りである。

- 1回目：自分の順番を理解し、次の走者にバトンを渡すことができるようになることを目標に、サークルリレーに取り組んだ。サークルの周囲を走るというシンプルな設定であったため、一人ひとりが自信をもって走りきる姿が見られた。
- 2回目：1回目と同様のサークルを用い、2チームに分かれて対戦形式で行った。幼児はサークルの外側を全力で走れるようになり、勝敗にこだわることなく、リレー遊びそのものを楽しむ姿が見られた。
- 3回目：遊戯室にミニトラックを描き、カーブでのバトンの受け渡し方法や、これから走る幼児、走り終えた幼児の待つ位置について、担任と学部教員が随時話し合いながら修正を加え、指導を行った。

運動会当日：当日までの幼児の姿として、繰り返しリレー遊びを楽しみ、チームで作戦を練る姿が見られた。当日は、結果に捉われずに一人ひとりが達成感と満足感をもって終えることができた(図3)。

(担任の感想) リレー遊び一つにしても、折り返しリレーや終わり

を決めないエンドレスリレーなど、段階を踏んで遊びを進めることで、



図3 運動会当日の幼児の姿

勝つためのコツやリレーそのものの面白さを子どもたち自身で発見できるようになることを学んだ。

4. 今後に向けて

各担任は、本研修を通して得た運動遊びに対する視点や指導の工夫を、日々の保育の中で意識的に実践していた。今後は、友だちと関わりながら遊ぶ楽しさや、挑戦しようとする気持ちを大切に運動遊びへの関わりを継続し、幼児が主体的に運動遊びに取り組めるよう支援していきたい。

(山田 淳子)

1 共同研究事業

23) 子どもたちが主体となる授業づくりプロジェクト研究

1. 事業名および担当者

事業名：子どもたちが主体となる授業づくりプロジェクト研究

学部教員：山本はるか（滋賀大学教育学部）

連携担当者：大島聖子（滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事）

杉本惇（滋賀県総合教育センター研究員） 橋本健（滋賀県総合教育センター研究員）

田中節子（高島市立教育研究所研究員） 斉藤好弘（高島市立今津東小学校教諭）

吉田教人（長浜市教育センター研究員） 美濃部俊道（長浜市立南中学校教諭）

福田淳史（東近江市教育委員会事務局学校教育課指導主事）

福永光希（東近江市立八日市北小学校教諭）

2. 事業の目的

本研究は、小・中学校における「子どもが主体となる授業」の実現を目指して取り組んだものである。「子どもが自ら問いを見いだして目標を設定し、目標に向かって試行錯誤しながら課題解決に取り組んだり学びを振り返ったりするなど、子どもが自らの学びを調整する機会を充実することで、子どもが主体となる授業が実現できるだろう」という仮説のもとに進められた。

3. 事業の概要

本プロジェクト研究は、全8回の研究会を通して進められた。連携担当者らが「主体性」が発揮されている子どもの姿を具体的にイメージしながら、目指す子どもの姿を共有したり、市を越えて授業を参観し協議することで、目指す子どもの姿を実現するための授業像を生み出したりするなど、市町を越えて連携し、研究に取り組んだ。共有された目指す子どもの姿は、資料1に示す通りである。自らの学びを調整する子どもを育成するために、学習過程を三つの段階に整理し、各段階において目指す子どもの姿を設定した。この子どもの姿の育成を目指して、資料2に示す通り、「活動」「共同体」「空間」「人工物」の4つの要素にもとづいて学習環境をデザインするとともに、「学びの過程を可視化し、他者と共有する振り返り」と「子どもが自らの学びを調整するための支援」を指導

の手立てとして整理した。前者では、1単位時間の最後に行う振り返りにおいて、自らの学びを評価し、うまくいったこととその理由を書き込むことで、学びの過程を可視化させる。後者においては、学び方についてのチェックリストやルーブリックなどを作成し、子どもが自らの学びを振り返って評価することができるようにした。

資料1 目指す子どもの姿

| 段階 | 目指す子どもの姿 |
|-------------|---|
| 目標を設定する段階 | 学習の導入時に、これまでの学習を振り返ったり学習課題を基に自ら問いを見いだしたりしながら、目標を設定し見通しを立てる。 |
| 課題解決に取り組む段階 | 目的に応じて学習環境を選択しながら、課題の解決や目標の達成に向けて進んで学習に取り組む。 |
| 学びを振り返る段階 | 試行錯誤しながら課題解決に取り組んだ学習内容や学び方を振り返ったり他者と共有したりして、得られた気づきを次の学習に生かす。 |

資料2 目指す資質・能力の育成に向けた学習環境デザイン

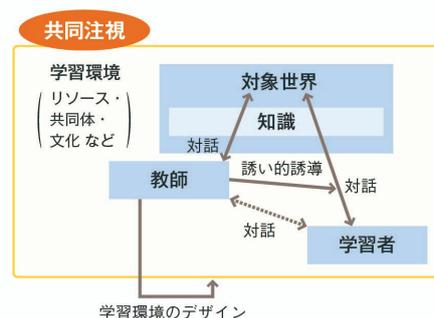
| |
|---|
| 活動：子どもが課題の解決や目標の達成に向けて取り組む学習活動 |
| 共同体：子ども一人一人の心理的安全性を確保する集団づくりや、 子どもの学習活動に合わせた学習形態 |
| 空間：子どもが学習形態に合わせて学習活動を行う場所やレイアウト |
| 人工物：子どもが自ら学習活動を進めるための資料や道具 |

一つの実践事例として、小学校第5学年算数科「四角形と三角形の面積」の授業を取り上げよう。この授業では全11時間のうち、第1～4時までは一斉に等積変形や倍積変形で求積できることを学習し、第5時以降は既習事項を生かしながら、自由進度学習として、多様な面積を求める課題に取り組む時間が設けられた。「子どもを主体とする授業」と聞くと、学習目標や内容などを子どもに委ねることと想像する人がいるかもしれない。しかしながら、自らの学習の舵取りを行うためには、課題解決に必要な知識・技能の習得や伴走者の存在が不可欠である。この実践は、普段会議室として使用している部屋を算数科教室と設定し、壁面には公式や課題などが掲示され、教室には個人やグループなど、多様な学び方が可能となるスペースが用意されている。学習者は自分に合った課題と学び方を選んで学習し、教師は常に机間指導を行いながら、学習者の学習状況を把握し、必要な支援を考える。資料3に示すのは、授業中、課題への取り組みに困難を感じた学習者が教師に質問した際、ともに黒板前まで歩いていき、既習事項を確認する場面である。学習者が必要とする既習事項を口頭で伝える

資料3 ともに対象世界を見る



資料4 共同注視



のではなく、よりよい解決策を探るために、教師と学習者がともに対象世界を見て、どこに行き、何を確認すればよいのかを考える。この授業場面は、資料4に示す、石井の言うところの「共同注視」ⁱの場面であるだろう。本実践事例では、教師によるソフト・ハード両面からのきめ細やかな指導が行われており、子どもが主体となって学習に取り組む授業の一つの優れた事例であると言えるだろう。

4. 今後に向けて

「子どもが主体となる授業」は、教師主導の授業を批判的に捉え、それを乗り越える意図をもって使用される場合が多い。しかしながら、主体性という用語のもつ危険性にも留意する必要がある。それは、教師の思い描く主体的な姿に、子どもを当てはめようとする志向性が働くことである。溝上によれば、主体性は「行為者（主体）から対象（客体）へとすすんで働きかけるさま」と定義されるⁱⁱ。その対象や働きかける様子が、教師の望むものではない可能性や、教師にとって望ましいものであったとしても、学習者によって多義的に解釈されるものである場合もあるだろう。どのような主体性を目指すのか、それは真に子どもの望む主体的な姿であるのか、議論し、共有することが不可欠であるだろう。

最後に、本研究に取り組むにあたって特に印象深かったのは、連携担当者らの柔軟性である。異なる市・校種に属し、異なる専門性を持つ担当者らが、協働して授業研究を行い、良いと考えた視点を即座に授業に取り込んでいく姿が見られた。子どもたちに主体的な学習者であることを望むのであれば、授業者らも、適宜修正を加えながら授業研究を進めていく主体性が求められる。本研究の担当者らが「子どもの主体性」を軸に集まり、立場の違いを踏まえながら、議論を通じて共通性を見出す姿は、まさに「多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出す」ⁱⁱⁱ主体的な姿であったと考える。(山本はるか)

ⁱ 石井英真編『高等学校 真正の学び、授業の深み』学事出版、2022年。

ⁱⁱ 溝上慎一「主体的な学習とは」 ([https://smizok.com/education/subpages/a00019\(agentic\).html](https://smizok.com/education/subpages/a00019(agentic).html)、2026年2月27日確認)

ⁱⁱⁱ 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)」2021年。

1 共同研究事業

24) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」であり、担当者は次の通りである。

学部教員：森 太郎，久保加織，石川俊之

地域ボランティア：石橋克也，内藤京子，奥田由紀，尾崎保子

大津市石山公民館専門委員：大伴真由美

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し，食の安全・安心について考えるような「食・農・環境教育」が求められている。しかし学校現場において，このニーズに対応できるプログラムの確立，対応できる教員の確保は不十分である。そこで，地域の住民と連携して，小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し，「食・農・環境教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに，教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し，教育現場において「食・農・環境教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは，石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は参加者の募集業務，地域ボランティアスタッフが畑体験の具体的指導，滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生が体験活動内容の計画立案，指導を行っている。本活動は，2002年4月から始まり，3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園，小学校の児童と保護者を対象に，「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」への参加申込書を配布している。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて，毎週水曜日の15:30～17:00まで食農体験活動を実施し，3月まで約38回の活動を行っている。本年度は，11家族32名が参加し，滋賀大学自然環境教育施設の農場での活動に加え，日常の管理，農場の収穫物を使った食体験活動や蚕の飼育など自宅での活動の様子について，コミュニケーションアプリLINEを用いて交流を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

| 実施月 | 主な活動内容 |
|-----|---|
| 4月 | 開始式，自己紹介，野菜の播種（トウモロコシ，キュウリ，エダマメ，カボチャ，ヘチマなど），花の播種（マリーゴールド，コキアなど），野菜の観察・スケッチ，タケノコ掘り |
| 5月 | 夏野菜（4月に播種した作物，トマト，ナスなど）・花の定植・管理（支柱立て，誘引，わき芽取り），サツマイモ挿苗，稲のモミ播種，タマネギ収穫，花の寄せ植え |
| 6月 | 梅の収穫・梅ジュース・梅干し作り，蚕の飼育，ジャガイモ収穫，夏野菜の管理，収穫，田植え |
| 7月 | 七夕工作，田んぼの生き物（ミジンコ，カブトエビなど）観察，夏野菜の管理・収穫（トマト，エダマメなど），焼きトウモロコシ・ポテトチップス試食，梅ジュース試飲 |
| 8月 | 夏休みであるが，当番制で畑の管理，水やりを実施 |
| 9月 | 秋冬野菜（ハクサイ，ブロッコリー，キャベツ，コールラビ，ロメインレタス，ニンジン，ダイコン，ミズナ，ハウレンソウ，カブなど）の播種，ヘチマ水採取・タワシ作り |

| | |
|-----|--|
| 10月 | 秋冬野菜苗の定植，秋冬野菜の間引き・草取り，稲刈り・稲架がけ・脱穀，大学祭の出店準備（リース作り，ドライフラワーの花束，稲わら細工など），藍のたたき染め，蚕繭の糸繰り・ペン立て作り |
| 11月 | サツマイモ掘り，干し柿作り，チューリップの球根植え，タマネギ定植，秋冬野菜の間引き・草取り・収穫，米・梅干しの試食 |
| 12月 | 落ち葉ワークショップ，干し柿試食，焼き芋，きなこ作り，餅つき，しめ縄作り，秋冬野菜収穫 |
| 1月 | 秋冬野菜収穫，畑の野菜を使った七草粥・味噌汁・浅漬作り・試食，紙漉き・しおり作り，コキアのほうき作り，紙漉き |
| 2月 | 秋冬野菜収穫，紙漉き，豆まき，蚕繭で雛人形作り，白玉ぜんざい作り・試食 |
| 3月 | 秋冬野菜収穫，漉いた紙で修了証づくり，ジャガイモ埋め込み，閉校式 |

本年度も年間を通して多様な食・農・環境教育に関する活動を行うことができた（図1）。昨年度に引き続き，自ら飼育・栽培して生産した蚕繭・花・稲わらを使って工芸品（蚕繭のペン立て，ドライフラワーの花束，稲わら箒など）を制作し，大学祭で販売した。活動を学生や地域の方々に知ってもらうために大学祭に出店して活動を通じた成果物を販売することを目的・ゴールとして設定したことにより，工芸品の制作活動に親子で主体的に取り組む姿が見られた。また，本年度新たなプログラムとして，「落ち葉ワークショップ」を実施した（図2）。キャンパス内を探索し，落ち葉が堆積している場所で土壌を下層まで観察して落ち葉が土壌生物により分解されて土壌になっていくことや，落ち葉が堆積している土壌，していない土壌，アスファルトにおいて土の硬さ，水の染み込み方・流れ方を比較して降雨時の土壌や森林の防災的役割について体験的に理解することができていた。



キュウリ収穫

焼きトウモロコシ試食

サツマイモ収穫

餅つき

コキアのほうき

図1. 本年度の活動の様



図2. 落ち葉ワークショップ

4. 今後に向けて

本事業は2002年にはじまり，大学・地域・家庭が連携して，24年間継続して実施できている。本事業は貴重な「食・農・環境教育」を行う場であり，今後も地域・家庭と連携して実施していきたいと考えている。また，例年多くの学生が主体的に本活動に参加しており（本年度は11名），将来教育現場で「食・農・環境教育」の体験活動をリードできる人材育成の場としての役割も担っている。今後も，地域の子供への教育と学生への教育の両面から新しい活動プログラムの開発と実践を行っていきたい。

（森 太郎）

1 共同研究事業

25) 理科指導力向上研修の企画研究 ～CST 教員の持続可能性を探る～

1. 事業名および担当者

事業名は「理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部教員：糸乗 前，大山 真満

CST (コア・サイエンス・ティーチャー)：渡辺 幸寛 (甲賀市立城山中中学校校長 H24 年度認定・滋賀 CST 研究会会長)，青木 勇雄 (東近江市立蒲生西小学校校長 H22 年度認定)，尾関 大応 (草津市立老上中学校教頭 H22 年度認定)，田中 憲治 (大津市立瀬田小学校教頭 H24 年度認定)，小林 大輔 (東近江市立蒲生北小学校教頭 H27 年度認定)，大橋 良平 (長浜市立虎姫学園教諭 H22 年度認定)，手島 剛也 (大津市立田上中学校教諭 H25 年度認定)，神田 健太 (草津市立山田小学校教諭 H26 年度認定)，坂田 恵理 (日野町立日野小学校教諭 H28 年度認定)，森田 博 (長浜市立南郷里小学校教諭 H30 年度認定)

准 CST：齋藤 優一 (大津市立坂本小学校教諭 H29 年度認定)

協力者：大津市小学校理科部会(参加者 24 名)・大津市中学校理科教員 1 名・湖南市中学校理科教員 1 名

2. 事業の目的

平成 21 年度より滋賀大学が継続して認定してきたコア・サイエンス・ティーチャーであるが、既に 69 名の CST 教員と 42 名の准 CST を送り出した。平成 28 年には認定 CST 教員による滋賀 CST 研究会を発足させ、滋賀県内で 6 ブロックを設定して活動している。毎年各ブロックでの CST 教員による小中学校教員向けの研修会を実施しており、滋賀県内の理科教育へ多大なる貢献をしてきた。これらの活動の中心となる教員研修会を支援する。

3. 事業の概要

今回、夏休みの期間に行われた 2 市(大津市，甲賀市)の研修会の企画，運営に携わった。

大津市においては、准 CST 教員(今年度 CST 養成プログラム受講生)齋藤優一を中心による授業案作成会を、甲賀市においては、認定 CST 渡辺幸寛を講師として小中学校教員に向けた「顕微鏡のメンテナンス」について研修会を開いた。また、大津の指導案作成会は、その後研究授業、授業研究会へと進み、認定 CST も参加し授業の検討を行った。それぞれの事業について詳細を述べる。

(1)滋賀 CST 全体研修会&大津市小学校理科部会夏季研修会

日時 令和 7 年 7 月 30 日(水)

会場 大津市教育センター

参加者 認定 CST，認定准 CST，大津市小中学校理科教員，他市町理科教員 37 名

内容 ①「大地のつくり」授業実践報告

②化石レプリカづくり体験

③プラネタリウムを活用した学習投影について

④導入場面の検討 (各学年にわかれ，2 学期の学習内容の導入について協議)

- ・大地のつくりの単元では、地域の教材など受け継ぐものは多くあるが、フィールドワークに出ることは難しく、どのように授業を進めるのがよいか悩む教員も多い。そのため、市内教員による

実践報告は、2学期に取り組む授業の参考になる内容であった。

- ・化石レプリカづくり体験では、認定 CST が所有するキットを借用し、児童でも簡単に作れるレプリカづくりを多くの先生方が体験し、今後活用していただくために持ち帰ってもらった。レプリカとは言え、写真で見るより、いろいろな方向から見ることができ、児童の興味・関心を高め、気づきや考えを深めるアイテムとなると考えられる。
- ・隣接する大津市科学館のプラネタリウムで、学習投影をしていただき、星について学ぶ機会と、利用について館員より説明を受けた。他市町からの利用は難しい面もあるが、体験機会があるならば、学習投影内容と授業をリンクさせることで、より深く学ぶ機会になる可能性が見出された。
- ・導入場面の検討においては、認定 CST も小学校の各学年に入り、今までの経験や、中学校から意見を出しながら検討を進めた。学習単元を貫くテーマを設定したり、学習問題の見出しを工夫するなど、実践に基づく意見がたくさん出て、短い時間ではあったが有意義な検討会となった。

(2)大津市小学校理科部会授業研究会（滋賀 CST 研究会からも参加）

日時 令和7年11月14日(金)

会場 大津市立坂本小学校

参加者 認定 CST(他市町)、大津市小学校理科教員 8名(うち認定 CST, 准 CST 3名)

内容 第6学年「月と太陽」

テーマ「児童の学習意欲が高まり、主体的に学習する態度が見られる授業」

- ・活動時間の設定や、モデル実験の方法、意見の交流の仕方など、いろいろな場面での生徒の動きについて協議することができた。

(3)甲賀市中学校理科部会夏季実技講習会

日時 令和7年8月1日(金)

会場 甲賀市立城山中学校

参加者 認定 CST, 甲賀市中学校理科教員 8名

内容 「誰一人取り残さない顕微鏡観察のための一助」

受講者の感想：

- ・見えないものと諦めていた教材も、ちょっとした工夫、正しい使い方によって見えるということがわかり、とても勉強になった。
- ・倍率変更時に見えなくなる生徒が多くいたが、その理由がわかった。顕微鏡についての知識が深まり、学校に帰ったら夏休み期間中に教わった部分のメンテナンスをしてみようと思います。
- ・顕微鏡だけでなく、教材に工夫をするだけでも、見え方が違うのに驚きました。今年は終わってしまったけど、来年以降、この方法で生徒にも見えるうれしさを体験させたいと思います。



4. 今後に向けて

今年度は、認定 CST が協議の場に入りながら、自分の経験を活かし助言する場面を活動の場として設定することができた。また、それぞれが持つ知識・技能を伝達する場ともなった。今年、事業が始まってから17年を迎えたが、これまでの会員による授業研究会や、知識・技能向上のための研修会の開催だけでなく、CSTの名のように、地域での理科教育のコアとなり、理科教育向上のための牽引者だけにとどまらず、次世代の教員を育成する立場として、さらに各市町の小・中理科部会と連携しながら、養成講座で学んだことや、滋賀 CST 研究会での経験を活かし指導的立場で活動を進めたい。

(渡辺 幸寛・糸乗 前)

1 共同研究事業

26) 科学的思考力を育成する授業に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名は、『科学的思考力を育成する授業に関する研究』であり、担当者は次のとおりである。

学部教員： 大山 真満，糸乗 前

連携教員： 平木 亮祐（竜王中学校 教諭；令和3年 CST 認定）

2. 事業の目的

児童・生徒の課題解決能力の育成が求められている中、理科においては科学的思考力の育成が重要である。一方、大学生では、理科においても暗記主体の学習が身につけている者が多い。そこで、大学入学生の理科学習の基盤となる中学校理科教育に焦点をあて、今年度はまず中学生の現状を把握することを目的とする。

3. 事業の概要

3-1 意識調査（調査1）

○調査日：2025年7月17日（木）

○調査対象：中学2年生 100人，中学3年生 93人

○調査と結果の概要：

中学生の理科や理科学習に対する意識を調査した。調査項目は、理科は好きか、理科は得意か、理科の各分野は暗記分野と思うか、グラフ・表の読み方や書き方はわかるか、授業内で行う実験をなぜ行うかを授業時にわかっていたか、考察やまとめに関する意識、などで、選択形式で実施した。その結果の概要を以下に記す。

- ・自然や科学に興味がある／どちらかというに興味がある： 193人中 118人（61.1%）
興味がない／どちらかというに興味がない： 75人（38.9%）
- ・理科という教科が好き／どちらかというが好き： 193人中 116人（60.1%）
嫌い／どちらかという嫌い： 77人（39.9%）
- ・理科は得意／どちらかという得意： 193人中 76人（39.4%）
苦手／どちらかという苦手： 117人（60.6%）
- ・『エネルギー』分野を暗記分野と思う／どちらかというと思う： 193人中 133人（68.9%）
- ・『粒子』分野を暗記分野と思う／どちらかというと思う： 193人中 150人（77.7%）
- ・『生命』分野を暗記分野と思う／どちらかというと思う： 193人中 174人（90.2%）
- ・『地球・岩石地質』分野を暗記分野と思う／どちらかというと思う： 192人中 163人（84.9%）
- ・『地球・気象』分野を暗記分野と思う／どちらかというと思う： 179人中 143人（79.9%）
- ・グラフの読み方がわかる／どちらかというわかる： 193人中 138人（71.9%）
- ・グラフの書き方がわかる／どちらかというわかる： 192人中 138人（72.3%）
- ・表の読み方がわかる／どちらかというわかる： 193人中 162人（83.9%）
- ・表の書き方がわかる／どちらかというわかる： 192人中 143人（74.5%）

さらに，“授業最後のまとめに関して、なぜそのまとめになるのか、時々わからなかった／ほぼいつもわからなかった”を選択した人は、この間に回答した190人中79人(41.6%)の生徒であった。そこで、各質問の回答該当者数を用いて、各項目間の関連を検討するためカイ2乗検定を実施し、効果量として ϕ 係数を算出した。その結果，“授業のまとめがなぜそのまとめになるのかをわかる／わからない”については，“表の読み方・書き方が分かる／わからない”と“グラフの読み方・書き方が分かる／わからない”という項目それぞれと5%水準で有意な関連が認められ、また、 ϕ 係数は中程度の値を示した。

3-2 グラフに関する実践と調査（調査2）

調査1の“授業のまとめを理解する”と“グラフや表の読み方・書き方の理解”に有意な関連が認められた結果を踏まえ、中学1年生に対してグラフの書き方に関する解説の有効性を検討した。まず、解説前の9月下旬にグラフを描く調査を行い、その後、12月中旬に解説を実施した。その解説の1か月後の持続性を確認するため、1月に追跡調査を実施した。調査の概要は以下の通りである。なお、両方の調査に参加した生徒を分析対象者とした。

○調査日（解説前）：2025年9月29日（月）

○グラフの解説実施日：2025年12月18日（木）

○調査日（解説後）：2026年1月8日（木）

○調査対象：中学1年生 105人

○調査と結果概要：

調査問題は、中学1年生の学習内容の範囲である『力の世界』の「力の大きさとばねののびの関係」を題材とし、“力の大きさ”と“ばねののび”の表から一次関数となるグラフを描かせる問題とした。ただし、表の値は誤差を含んだ値である。

分析においては、まず生徒の解答から「目盛りの幅が一定ではない」、「目盛りが書けていない」など表を描く上での不適切な観点別で整理した（重複あり）。その後、解説前の9月調査と解説後の1月調査とを比較するため、各観点でMcNemar検定を実施した。

その結果、「目盛りの幅が一定ではない」に関して、9月調査では105人中21人(20.0%)が該当していたが、1月調査では11人(10.5%)に改善されていた。解説前後で変化した人の内訳は、改善した人が14人、逆に不適切になった人が4人であり、McNemar検定の結果5%水準で有意差が認められた。一方、「点がずれている（正しくプロットできていない）」は改善した人が10人に対し、不適切になった人は24人と増加し、5%水準で有意差が認められた。他の観点については、両調査間に有意差はみられなかった。

4. 今後に向けて

グラフや表の読む力／描く力は、理科や自然科学を理解する上で欠かすことはできない。そのため、生徒の技能を向上させるための方策の検討が必要である。一方で、“なぜそのまとめになるのか”を理解するためには、表やグラフに関する技能以外の要素も考えられる。今後はそれらの要因についても検討する必要がある。

(大山 真満)

1 共同研究事業

27) 高等学校地理歴史科・公民科における探究の過程を通じた学習活動の充実

1. 事業名および担当者

事業名は「高等学校地理歴史科・公民科における探究の過程を通じた学習活動の充実」である。担当者は、滋賀県総合教育センター太田義人所長，福西洋一研究員，黒川勇暉研究員及び県内公立高校5名の教諭である。学部教員は，岸本実である。なお，この事業は，滋賀県総合教育センターの「高等学校探究的な学びプロジェクト研究」に対する滋賀大学における地域連携事業に位置付けられている。

2. 事業の目的

高等学校の地理歴史科，公民科のすべての科目は，現行の学習指導要領より「探究」を基盤としたものとなった。本研究は，このような学習指導要領の改訂を受けた授業改善の方向性を具体化し，学習活動の充実のモデルを提案することを目的とする。

3. 事業の概要

滋賀県内5つの公立高校の地理歴史科・公民科の教諭を研究協力者として，探究を基盤とした学習を展開する授業を開発し，学習活動を充実させるモデルを構築した。1学期の研究授業の成果を，夏季に中間的にまとめ，2学期の研究授業につなげ，総括した。

(1) すべての教科に通じる探究イメージ

本研究は，高等学校の地理歴史科，公民科における「探究」に焦点化するものであるが，第一の特徴は，すべての教科に通じる汎用的な探究イメージを基礎に置いた点にある。中央教育審議会(2016)「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申)」の別添資料(別添3-6)「社会科，地理歴史科，公民科における学習過程のイメージ」で示された次のプロセスである。すなわち，大きくは「課題把握」「課題追究」「課題解決」「新たな課題」の4段階として探究のプロセスをとらえることである。この4段階は，総合的な探究の時間のモデルとも重なり，すべての教科における探究イメージに通じるものである。そこで，本研究の成果は，高等学校のすべての教科等において「探究的な学び」を推進していく取組に通じるという意義を持つ。

(2) 社会科・地理歴史科・公民科に固有の探究イメージ

さらにこのイメージでは，「課題把握」を「動機付け」「方向付け」に，「課題追究」を「情報収集」「考察・構想」に，「課題解決」を「まとめ」に，「新たな課題」を「振り返り」という6段階に整理して，社会科・地理歴史科・公民科に固有な探究イメージに再整理している。ここで，「考察・構想」については，学習指導要領の目標の用語に継承され，高学年以上の社会科，地理歴史科，公民科のキーワードとなっている。このイメージ図においてもすでに，考察は「社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察する」，構想は「社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する」と具体化され，学習指導要領の用語とも一致した構造が示されている。

(3) 5つの授業実践による探究の6つのステップの具体化

2学期の5つの研究授業の単元、学年、科目は、A「イスラーム世界」（3年，世界史に関わる学校設定科目），B「黒船の来航と日本の対応」（2年，歴史総合），C「政治参加と公正な世論の形成」（2年，公共），D「第二次世界大戦」（3年，日本史に関わる学校設定科目），E「日露戦争とアジア」（1年，歴史総合）である。これらの授業実践から，探究の6つのステップが，次の表のとおり具体化された。

まず，4段階・6段階までは，多くの教科で共通する用語として整理するため，4段階目の「考察・構想」は「考察」として再整理した。そして，地理歴史科・公民科にとって重要となる文脈に即した探究の6段階を整理し，それぞれの段階の学習活動の具体例を整理した。

表 授業実践からみる地理歴史科・公民科における探究の6つのステップ

| 4段階 | 課題把握 | | 課題追究 | | 課題解決 | 新たな課題 |
|------------------------|--|--|--|---|---|---|
| 6段階 | 動機付け | 方向付け | 情報収集 | 考察 | まとめ | 振り返り |
| 地理歴史科・公民科の文脈に即した探究の6段階 | 当事者意識や具体的なイメージを持って学習課題を設定する | 概念・イメージ・人物・国などから予想・仮説を設定し，資料収集の計画を立てる | 資料（文献，文書，絵画，統計，政策など）を収集し，批判的に読み解く | 事象の意味・意義・特色・相互関係を考察する 課題を把握し，解決を構想する | 考察したことを説明する 構想したことを議論する | 学習したことをよりよい社会，より豊かな人生の観点から評価する |
| 主な学習活動の具体例 | <ul style="list-style-type: none"> ・当事者意識を持つ ・視覚資料からイメージする ・概念のずれに気づく ・当時と現在のずれに気づく ・初見の意見を自覚する | <ul style="list-style-type: none"> ・人物の主張などの選択と分析 ・国別の背景や利害の予想と分析 ・概念（共生）を多角的に分析 ・社会的事象（戦争）についてのイメージの選択と分析 ・統計・制度・意識の面からの分析 | <ul style="list-style-type: none"> ・史料を読み取る ・国際情勢に関する史料，風刺画を読み取る ・歴史リブレットの読み取り ・情勢や軍・生活関連史料の読み取り（ジグゾー） ・統計・制度・言説資料の読み取り | <ul style="list-style-type: none"> ・歴史的意思決定を再構成する ・国際関係をモデル化して説明する ・過去の共生モデルについて対話する ・ジグゾーにより多面的・多角的に因果分析 ・統計・制度，意識調査の結果から制度設計 | <ul style="list-style-type: none"> ・自己の意見の変化の自覚と視点の拡張 ・他地域や時代への視点の拡張 ・現代社会の共生モデルと比較 ・世論形成の構造比較と視点の拡張 ・自己の政治観の変容の自覚と民主主義の制度比較 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見の変化・拡張を成長として評価 ・視点や立場の多様化を現代社会に意義付ける ・世論形成の意義と自分の意見形成の意味を関連付ける ・よりよい民主主義の在り方と自分の意見形成を関連付ける |

4. 今後に向けて

地理歴史科・公民科にける必修科目・選択科目・学校設定科目，そして総合的な探究の時間のそれぞれにおいて，探究の位置づけを区別・関連付け，系統化することが必要である。また，同じ科目内でも，探究の6段階の一つの段階⇒複数の段階⇒すべての段階を含むような授業配列・単元配列により，教師による探究指導⇒教師に伴走された生徒による探究⇒生徒による自律的・主体的探究へと発展させる系統的なカリキュラム・科目の編成が求められる。（岸本 実）

1 共同研究事業

28) 校内研修における教師のリフレクションの深化

1. 事業名および担当者

事業名は「校内研修における教師のリフレクションの深化」である。担当者は、甲賀市立希望ヶ丘小学校村地昭彦校長と瀬戸山茜教諭、および、学部教員は、岸本実と岸田蘭子である。

2. 事業の目的

教師の専門職性を保障する不可欠の要素は、リフレクションと同僚性である。新しい時代からの要請や多様な教育課題に対応するため今日の教師は専門職として学び続ける必要がある。そこではリフレクションと教員相互の組織的なつながりが重要となる。そこで、校内研修における、校内研究、OJT研修、そして、カリキュラム・マネジメントの3つの取組を三位一体的に推進することにより、リフレクションの質を深化させていく校内研修システムの在り方を解明することが本研究の目的である。

3. 事業の概要

子どもの問いを引き出す授業をテーマとした校内研究、それを支えるG-OJT研修、子どもの問いを生み出す話し合いの系統表を軸としたカリキュラム・マネジメントの3つの取組を一体的に進めるシステムにより、教師のリフレクションが技術的省察、実践的省察、そして批判的省察（van Manen, M. 1977.

Linking ways of knowing with ways of being practical. Curriculum Inquiry, 6(3), 205–228.）へと深化することを見取りその効果を検証した。

(1) カリキュラム・マネジメントの連動

カリキュラム・マネジメントと校内研究を意図的に連動させることで、学期や学年、学校レベルの中長期的なリフレクションと授業や単元レベルの短・中期レベルのリフレクションを連結させた。このことにより、教師のリフレクションの水準が深化するプロセスが明らかにされた。授業改善を踏まえ、児童の分析を基に重点単元を設定し、単元構想を協働的に作成した。その結果、校内研究でのリフレクションが、手立て中心の技術的省察の水準のものが大半であったものが、単元目標や教科間の関連を意識したカリキュラムに基づいたものとなった。

(2) 校内研究リフレクションの深化

校内研究では、AARサイクル（見通し Anticipation-実践 Action-振り返り Reflection）を取り入れたリフレクションシートを全教員で活用した。リフレクションシートにおける教師による記述を分析した結果、記述語数が7月130語から2学期末には183語へ増加した。さらに省察3水準では、実践的省察24.1%から39.8%、批判的省察8.6%から15.4%と大きく伸びた。これは、授業技術という技術的省察レベルにとどまらず、単元目標を結び付け、その目標そのものも問い直すような実践的省察レベルの視点の拡張、さらに、自身の教育観の広がりや視野の広がりへとつながる批判的省察へと、省察が成長したことを示している。

(3) G-OJT 研修でのリフレクション

校内研究の学びを日々の授業実践へとつなぐ場として G-OJT を導入した。また、G-OJT の活性化により、日々の授業実践に裏打ちされた校内研究へと発展し、両者の連携は相互補完的なものとなった。若手教員の T 教員はメンターとの対話を通じ、技術的省察から、単元のゴールと子どもの学びの関連を踏まえた実践的省察へと変容し、省察における記述において、実践的省察レベルの出現語が 8 語から 25 語に増加した。中堅教員の Y 教員は授業観の問い直しを通して批判的省察が生じた。その省察から「児童の発想を自由に引き出すにはどのような指導法が有効か」という新たな技術的省察につながり 3 水準の中でもサイクルが生まれた。

4. 今後に向けて

以上のように、校内研究をカリキュラム・マネジメントと G-OJT と連結し、3 つの柱を校内研修のシステムとして再構築する点で、本研究の実践的な意義は大きい。特に、AAR サイクル及び技術的・実践的・批判的という省察の 3 水準を位置付けることで、省察の成長を可視化し、成長を支える研修の手立てを構築できている点が特筆すべき意義である。

他方で、教師教育研究や教師の専門職性の研究における「省察」をめぐる国内外の議論、すなわち、van Manen, M. (2014. *Phenomenology of Practice*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press.), Hatton, N. & Smith, D. (1995. *Reflection in teacher education: Towards definition and implementation*. *Teaching and Teacher Education*, 11(1), 33–49.), Zeichner, K. M. & Liston, D. P. (1996 / 2014. *Reflective Teaching: An Introduction*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum / New York: Routledge.), 山崎準二, 高野和子他編 (2024 『「省察」を問い直す: 教員養成の理論と実践の検討 学文社』) などで整理・問い直し・発展がみられる「省察」概念やその系譜に、本実践的研究を位置づけなおすことが今後の課題として考えられる。

特に、Manen 自身が、3 水準の省察モデルを、段階的に「より高次」へ進むモデルとして理解されがちだったと、後に自己批判している。彼の中核的概念は、reflection から “tact / thoughtfulness” へと転換している (Manen, 2014)。彼は、事後的に記述された省察よりも、言語化できない判断・応答・沈黙も含めて重視し、教育実践の質は省察の水準によってではなく、行為の中で発揮される pedagogical tact (教育的タクト) によって捉えられるべきだと論じている。省察の 3 水準については、分類概念や発展段階としての理解については自己批判しつつも、実践理解の視点装置としては、後年の理論的発展においても継承されていると考えられる。このような変化をふまえた研究設計も今後求められる。

さらに、省察の 3 水準と AAR サイクルとの関連付けについても、検討の余地がある。AAR サイクルは全体としても省察を含む学習・実践プロセスであり、省察そのものは主として R に位置づくと考えられる。ただし、Manen の後年の理論との関連では、Anticipation や Action にも省察的判断が浸透していると考えられる。彼にとっては、Reflection は必須ではあるが、二次的という位置づけになり、Anticipation はそれを受けた実践の準備と位置付けられ、彼にとってはむしろ、Action においてこそ重要な「省察的判断」があることになる。

Zeichner (1996, 2014) も、省察を、技術的 (technical)、文脈的／実践的 (contextual)、批判的 (critical) に分類している。特に「批判的省察」を権力・不平等・社会正義と明示的に結びつけている。また、Hatton & Smith (1995) は、教師教育の成長を可視化できる段階モデルとして位置付けている。すなわち、記述的記録 (descriptive writing)、記述的省察、対話的省察、批判的省察である。これらの研究もふまえて、学校現場での教師の成長を関係的自律性の視点から研究することが今後の課題である。(岸本 実)

2 石山プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、石山プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治 田中 満 山下 亮

大津市立石山小学校：中渕 清子（校長） 大津市立石山幼稚園：岡田 美由紀（園長）

2. 事業の目的

子どもたちの多様化した課題を抱える今日の学校状況から、新規採用教員といえども、即戦力として実践的指導力や教員としての専門性が強く求められるようになってきている。本学部では、平成 17 年度に「石山プロジェクト」を立ち上げ、以後大学近隣の公立小学校と公立幼稚園の協力を得て、学生を毎年、学校の教育活動に参加させる活動（スクールサポーター活動）に取り組んでいる。参加の学生は全て本人の自主参加である。この活動の目的は、学生が子どもや学校の実情を体験的に知るだけでなく、具体の場面における子どもの心情の理解や教師として求められる対応の仕方など、実践的な指導力を身に付けることや、子どもたちとふれあう経験を積む中で、定期的に熟練の教職経験者に相談し共に語り合うことで、教師としての対応力を高めることをねらいとしている。

3. 事業の概要

本事業に対して、当該校園のみならず省察会講師をお願いしている退職校園長からの評価は高い。その理由は、サポーターとして本事業に参加している学生の意識の高さと教師を目指している純粋な姿に、これからの教育を担う若者への期待を強く感じていただいているからである。昨年度は春学期 幼9名、小24名（内、R5年度より継続3名含む）、秋学期 幼8名（内、春より継続3名含む）、小31名（内、春以前より継続13名含む）が参加、今年度は春学期 幼5名、小21名、秋学期 幼5名（内、春より継続2名含む）、小29名（内、春より継続9名含む）が参加となった。

①春秋の学期に合わせて参加希望を募る。年間に春秋で30時間の活動を目指す。

②学生個々の予定を勘案して学校園と相談のうえ各自の活動日時を決める。ほぼ週1～2日。

③春秋、各2回省察会 午後4時30分～約1時間 場所/大学、参加は自主参加

幼：9月・2月に報告会、場所/石山幼稚園 小：2月に年間報告会、場所/石山小学校

④アドバイザー：幼稚園1名、元公立幼稚園長 小学校/退職女性校長会から毎回2名程度

4. 活動内容

○各教科等で基礎的な内容の習熟を図る指導補助 ○個別の指導補助 ○日常生活の指導補助

○各教科や総合的な学習の時間、遠足等の校外学習での引率補助

○生活単元学習（特別支援学級）における指導補助 ○発表会の練習や自由遊びにおける指導補助

5. 定例省察会の開催

春秋各2回、幼稚園と小学校の校種別に、省察会を大学で開催。省察会では、学生が当該月に行った学校園でのスクールサポート活動を振り返り、活動のやりがいや感じたこと、自信がついた点や自らの成長を実感できた点、課題として捉えていることや悩み・戸惑い、子どもの言動の理解に難しさを感じた場面、さらには指導や教育に当たっている教師の意図などについて意見を出し合い、相互に交流を行った。この省察会には、退職園長および女性校長会の協力を得て、学校園での豊富な経験を有する熟練の元校園長を外部講師として迎えた。外部講師からは、学生が提示した課題に対して明確な助言や励ま

しが与えられ、学生自身が課題を整理・明確化するとともに、子どもへの対応を改善しようとする意欲を高める機会となった。

また、幼稚園においては、春学期の報告会を秋学期の参加予定者も交えて実施したことで、秋学期参加者が活動の見通しを持つことができ、活動への意欲付けにもつながった。次年度以降も継続していきたい。一方、小学校では、今年度も省察会・報告会への参加者が少数にとどまっているという課題がみられる。今後は、学生の主体的な学びへの自覚を促すとともに、参加者増に向けた根本的な方策を検討していく必要がある。

6. 省察会，報告会で意見交流から

【小学校／学生】

- ・石山小学校でのスクールサポーターとして子どもたちや先生方と関わらせていただく中で、今後教員として活かすことのできる多くの経験を積むことができました。
- ・教員は「伴走者」である認識をもつことの重要性も学びました。将来担任をもつ際には、「じっと待つ」時間も大切にしたいと考えるようになりました。

【小学校／講師】

- ・子どもの発達段階を踏まえ、一人一人に応じた対応を行っていくためには、常に先入観を排した姿勢が求められます。近年、1、2年で教職を離れる先生が増えていますが、思うようにいかないことがあっても、どうか一人で抱え込まないでください。先輩の先生方に相談しながら、目の前の子どもの姿から学び合い、成長し続けてほしいと願っています。

【幼稚園／学生】

- ・子どもたちへの関わりにおいて、大人が大切にすべきことを伝えていくことが重要だと考えていました。しかし、石山幼稚園での実習を通して、子どもたちの関わりを見守ることで、子ども同士に気づきが生まれ、互いに認め合いながら成長していくことに気付くことができました。
- ・石山幼稚園の先生方から、子どもを中心とした保育について学ぶことができました。また、外国籍の子どもに対する環境づくりなど、多様な子どもへの関わりについても学ぶことができました。この実習を通して、保育の魅力を感じるようになりました。

【幼稚園／講師】

- ・遊びの中に発達や育ちがあるという視点から考えると、子どもが夢中になることができる遊びに対して、教育的展開や環境設定をどのように行うかが大切です。学生のみなさんは、石山幼稚園の先生方に気付かせてもらえる場所を与えていただいたことに感謝し、また多くのことに気付くことができました自分に自信を持って、これからも学び続けてください。



石山小学校省察会(2026. 2. 6)



石山幼稚園省察会(2026. 2. 6)

(文責 青木善治 田中 満 山下 亮)

3 出前講義

出前講義は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。この事業は今年度で開始から 20 年余りとなり、大学の状況や大学と地域との関わりの変化を受けて、本事業の継続を協議した結果、来年度から出前講義を休止することになった。これまでの多くのご利用に感謝します。

令和7年度の出前講義については、こども9園(延べ14園)、小学校6校(延べ7校)、中学校1校(延べ1校)、中・高等学校1校(延べ1校)、高等学校2校(延べ2校)、特別支援学校1校(延べ1校)、教育委員会4件(延べ4件)、学童、発達支援センター、県、市役所、図書館、の計30件(延べ38件)の実績があった。他に県内外からいくつかの依頼があったが、日程等の関係で成立しなかったケースがある。下記が今年度実施した出前講義である。

◆ 出前講義一覧

| 講師 | 実施日 | 依頼機関 | 対象 | 題名 |
|----------|-------|--------------------|---------------------------------------|--|
| 青木 善治 先生 | 4月23日 | 米原市立米原小学校 | 教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 大平 雅子 先生 | 5月19日 | 光泉カトリック中学・高等学校 | 児童・生徒 (中学校・高等学校) | 睡眠とストレスの向き合い方 |
| 山田 淳子 先生 | 5月19日 | 草津市立矢倉こども園 | 園児・教員(こども園) | 運動遊び指導(サーキット遊び) |
| 芦谷 道子 先生 | 6月3日 | 滋賀県教育委員会事務局特別支援教育課 | 教員(幼稚園・小学校・ 中学校・高等学校・ 特別支援学校) | 就学相談専門研修「保護者に寄り添った就学相談の進め方」 教育的ニーズを中心においた児童生徒のアセスメントの仕方 や保護者との面談の進め方について |
| 山田 淳子 先生 | 6月9日 | 草津立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり |
| 山田 淳子 先生 | 6月16日 | 常盤こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる環境と関わり |
| 青木 善治 先生 | 7月2日 | 草津市立草津第二小学校 | 児童・教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 山田 淳子 先生 | 7月4日 | 草津立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり |
| 松丸 真大 先生 | 7月12日 | 東洋大学附属姫路高等学校 | 生徒・教員(高等学校) | ん!?-日本語のしぐみを考える- |
| 青木 善治 先生 | 7月18日 | 彦根市立平田小学校 | 児童・教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 大平 雅子 先生 | 7月24日 | のびっこ渋川 | 児童(小学校) | 「眠り」について |
| 青木 善治 先生 | 7月25日 | 草津市立常盤こども園 | 教員(幼稚園) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞・造形する指導のアイデア |
| 青木 善治 先生 | 7月25日 | 草津市立笠縫こども園 | 教員(幼稚園) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 篠原 雅史 先生 | 7月27日 | 守山市立図書館 | 児童・生徒・教員 (中学校・高等学校・ 保護者・一般市民) | 令和7年度理系専門分野講座「正多面体から広がるかたちの 世界～5つの王様とその仲間たち～」 |
| 窪田 知子 先生 | 8月1日 | 野洲市教育委員会 | 教員(小学校・中学校) | 野洲市特別支援教育夏期研修会 「ちょっと気になる子どもたちの発達と障害」 |
| 芦谷 道子 先生 | 8月1日 | 京都府立豊学校 | 教員(特別支援学校) | 特別支援学校における生徒指導上の今日的な課題への対応 について |
| 山田 淳子 先生 | 8月4日 | 草津市立山田こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び指導 |
| 芦谷 道子 先生 | 8月20日 | 滋賀県養護教諭研究会 | 教員(幼稚園・小学校・ 中学校・高等学校・ 特別支援学校) | 子どもたちを取り巻く Well-being な環境の醸成 |
| 松丸 真大 先生 | 8月26日 | 近江八幡市教育委員会 | 教員(保育所、幼稚園、 こども園、小学校、 中学校)、行政職員 | VUCA時代におけるリベラルアーツの重要性について「変化の 時代を生き抜く未来創生リベラルアーツ」 |
| 青木 善治 先生 | 8月29日 | 野洲市立野洲小学校 | 教員(小学校) | 作品をみる・語る、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 山田 淳子 先生 | 9月2日 | 草津市立矢倉こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び指導 |
| 大平 雅子 先生 | 9月3日 | 野洲市立野洲小学校 | 教員(小学校)、 保護者、一般市民 | 良質な睡眠とは 日頃から心がけることとは |

| | | | | |
|----------|--------|----------------|---------------------------------|--|
| 山田 淳子 先生 | 9月8日 | 草津市立常盤こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる環境と関わり |
| 山田 淳子 先生 | 9月16日 | 草津市立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり |
| 山田 淳子 先生 | 9月22日 | 草津市立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり |
| 長岡 由記 先生 | 10月8日 | 大津市立石山小学校 | 児童・教員(小学校) | 「課題を読み解くことができる子どもの育成」 ～対話を通して読み解き、理解する力を培う国語科 「読むこと」の指導～ |
| 長岡 由記 先生 | 10月22日 | 大津市立小松小学校 | 教員(小学校) | 「一人ひとりの伝える力を高める授業作り」～始めと終わりを見 通して「話し」てから、「書く」～ |
| 芦谷 道子 先生 | 11月9日 | 東近江市健康医療部 | 一般市民 | 令和7年度こころの健康づくり講演会(セルフコンパッションに ついて) |
| 長岡 由記 先生 | 11月11日 | 甲賀市教育委員会 | 教員(小学校) | 子どもが主体となり、学びが深まる・広がる授業づくり～単元を 貫く協働探究型課題を視点にして～ |
| 松丸 真大 先生 | 11月17日 | 愛知県立豊田南高校 | 生徒(高等学校) | 方言を考える |
| 芦谷 道子 先生 | 11月30日 | 愛媛大学教育学部 | 院生・教員(大学院) | 愛媛大学教職大学院生及び一般参加者(現職教員)に対す る、マインドフルネスに関する講義・ワークショップの実施 |
| 山田 淳子 先生 | 12月15日 | 草津市立常盤こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる環境と関わり |
| 松丸 真大 先生 | 1月31日 | 守山市立守山図書館 | 生徒・教員 (中学校・高等学校) 保護者、一般市民 | 方言を考える |
| 安藤 哲郎 先生 | 2月9日 | 滋賀県立守山中学校 | 生徒(中学校) | 地理から考える物語の舞台 |
| 山田 淳子 先生 | 2月10日 | 草津市立山田こども園 | 教員(幼稚園) | 運動遊び指導 |
| 篠原 雅史 先生 | 2月16日 | 湖南市立三雲東小学校 | 児童・教員(小学校) | 正多面体とその数理 |
| 芦谷 道子 先生 | 2月24日 | 野洲市発達支援センター | 支援センター職員 | 野洲市発達支援センター事業(相談支援事業)にかかるスー パーバイズ研修 |
| 山田 淳子 先生 | 2月24日 | 野洲市立さくらばさまこども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり |

◆ 出前講義の様子，利用された学校園からの感想（一部抜粋）



・睡眠の大切さを改めて学べ、大変勉強になりました。自分の得意な時間を知る朝型・夜型テストがおもしろかったです。子ども達の睡眠に問題が多いので、家族で生活リズムを改めていきたいと思いました。

・様々なデータを持ち寄り、具体的な例や捉え方などを含みながらアドバイスしてくださり、とても分かりやすい講義でした。

・皆、身を乗り出して話を聞いていました。相談したり、考えたり、先生の講義に引き込まれていました。講義の流れを生徒が感じ取り、「話す、聴く」といった状況判断を自然に実行できていました。先生の知識を伝えたいという想いを受け、生徒達も懸命に情報をものにしようとしていました。非常に一体感のある講義をしていただきました。

・生徒は、地理と歴史は別々の学習内容であると捉えていたため、地理と歴史をコラボレーションさせた授業は新鮮であった。また、地図から何かを読み取るということは、生徒にとって新たな視点となった。





- ・講義内容は、クイズ形式や挙手での確認などもあり、実際に方言分布を実感しながらお話を聞いていただきました。「とても興味深かった」「単なる道具ではなく文化としての方言の大事さを実感した」等好評のお声をたくさん頂戴しました。
- ・「就学相談に限らず、日々の保護者や子どもとの関わりにも生かせそうなことをたくさん学ぶことができた」「共生社会を目指すインクルーシブ教育の実現のために意識を変えていかなければならないことに気づかされた」などと、非常に好評でした。

これまで、多くの教育関係者の方々に本出前講義を利用していただくため、出前講義一覧を本学部ホームページにアップロードしてきた。次が令和7年度の出前講義一覧である。

【国語教育関係分野】

| 講義題目 | 講師 | 専門 | 対象 | 内容 |
|---------------|---------------------|----------|---|--|
| 近江国と和歌 | 井ノ口 史 (いのぐち ふみ) | 日本古代文学 | 生徒(中・高) 教員(中・高) 保護者・市民一般 | 古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介いたします。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。 |
| 書とその周辺 | 中村 史朗 (なかむらしろう) | 書道 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 人はどのようにして「書之美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において“手書き”の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。 |
| 国語教育における学びの探究 | 長岡 由記 (ながおか ゆき) | 国語教育学 | 教員(幼・小・中) | 近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していきたいと思っております。 |
| 方言を考える | 松丸 真大 (まつまる みちお) | 日本語学/方言学 | 児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。その中でも地域による言葉の違い(=方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜ・どのように方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。 |

【社会教育関係分野】

| | | | | |
|-------------------|----------------------|----------------|---|--|
| 地理から考える物語の舞台 | 安藤 哲郎 (あんどう てつろう) | 地理学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般 | 説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。 |
| 史料を基礎とした日本史(前近代史) | 宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき) | 日本史学/ 日本中世史 | 児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高) | 歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。 |

| | | | | |
|-------------------------|----------------------|---------------|---|--|
| 論理学初歩 | 齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ) | 哲学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことかを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リーディングについて、その基本の紹介と実践を旨とした演習を行います。 |
| 滋賀の近代史 | 馬場 義弘 (ばんば よしひろ) | 政治学／歴史学 | 市民一般 | 明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、籠手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。 |
| 社会調査に触れる | 宮本 結佳 (みやもと ゆか) | 社会学 | 市民一般 | 近年、パソコンを利用する機会が増え、表計算ソフトが身近になったこともあって様々な場面でアンケート(質問紙調査)を実施する機会が増えています。本講義ではアンケートをつくる時、一体どのようなことを気をつけていけばいいのかについてご紹介します。 |
| 身近な事件や話題をもとに法・裁判の役割を考える | 渡邊 暁彦 (わたなべ あきひこ) | 法律学／ 日本国憲法 | 児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 私たちが「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。 法や憲法、そして裁判に対する関心も高まっています。 本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文なども活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。 |

【数学教育関係分野】

| | | | | |
|--------------------------|-----------------------|-------|---|--|
| 正多面体とその数理 | 篠原 雅史 (しのはらまさし) | 離散幾何学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・高・特) 保護者・市民一般 | 正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。 |
| 無限の考え方 | 神 直人 (じん なおんど) | 解析学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用して、無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。 |
| 非線形現象の解析 | 鈴木 宏昌 (すずき ひろまさ) | 解析学 | 生徒(高) 教員(中・高) | 私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わりの一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。 |
| 江戸時代の数遊びから見る現代数学 | 長谷川 武博 (はせがわ たけひろ) | 代数学 | 生徒(高) 教員(中・高) | 江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊びに「目付字(めつけじ)」「継子立(ままこたて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。 |
| 数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業 | 渡邊 慶子 (わたなべ けいこ) | 数学教育学 | 教員(小・中・高) | 「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探索した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。 |

【理科教育関係分野】

| | | | | |
|----------------|------------------|-----|---------|---|
| 細胞をつくっている物質・脂質 | 糸乗 前 (いとのりさき) | 生化学 | 生徒(中・高) | 生物を形作っている細胞は脂質でおおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとってあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。 本講義では「セラミド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話とどのように調べるかなどのお話をします。 |
|----------------|------------------|-----|---------|---|

| | | | | |
|---------------------|----------------------|---------------|--|--|
| 太陽の科学 | 大山 真満 (おおやま まさみつ) | 太陽物理学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) | 太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。 |
| コミュニケーション トレーニング | 加納 圭 (かのう けい) | 科学コミュニケーション | 生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大キャリア通信: サックス2013年1月7日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝える・分かち合う」ができるようになります。 |
| 物性物理学入門 | 恒川 雅典 (つねかわ まさのり) | 物理学/ 物性物理学 | 生徒(高) 教員(高) | 「物性」といってもなじみが薄いかもかもしれませんが、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根底から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話しします。 |
| 私たちの科学 | 徳田 陽明 (とくだ ようめい) | 無機化学/ 物理化学 | 教員(小・中・高) | 科学現象は私たちの身の回りにたくさんあります。この講座では、皆さんが不思議だなと感じる現象を題材にして、科学がそれをどのように説明するのかについてお話しします(例えば、なぜ虹が見えるのか、スマホで電話ができる仕組み等)。この講座を通じて、科学が生活をいかに豊かにしてきたかについて学びます。 |
| 遺伝情報とは何か? | 古橋 潔 (ふるはし きよし) | 生物学 | 生徒(高) | 生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか? この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。 |

【音楽教育関係分野】

| | | | | |
|--------------------------------|----------------------|---------------|--|---|
| オーボエ演奏法/ 木管アンサンブル | 中根 庸介 (なかね ようすけ) | オーボエ/ 木管合奏 | 生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般 | オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。 |
| 楽しい音楽づくり | 林 睦 (はやし むつみ) | 音楽教育 | 教員(幼・小・中・高・特) | 音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。楽器がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間と一緒に体験できたらと思います。 |
| 音による表現を めぐって | 若林 千春 (わかばやし ちはる) | 作曲/音楽理論 | 教員(中・高・特) 保護者・市民一般 | お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの?」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通して、音による表現を共に深めてゆく場を体験してみましょう。 |
| 本当の「声」と出会う ～ヴォイス トレーニング～ | 渡邊 史 (わたなべ あや) | 声楽 | 児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 その他(福祉関連作業所など) | 人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。みなさんの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか? 発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。その「声」を用いた歌唱表現まで踏み込むことも可能です。歌唱、合唱等のブラッシュアップにも、機会をご活用ください。 |

【美術教育関係分野】

| | | | | |
|--------------------------------------|---------------------|---------|--|---|
| 入門アート ～ラクガキから アール・ブリュット まで～ | 藤田 昌宏 (ふじた まさひろ) | 彫刻/現代美術 | 児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) その他(福祉関連作業所など) | ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあいっこし、ラクガキの名作を鑑賞? し、そこから見えてくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。そこからの展開は、「アールブリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講して下さる顔ぶれやリクエストでアレンジします。 |
|--------------------------------------|---------------------|---------|--|---|

| | | | | |
|---|----------------------|------------|---------------------------------------|---|
| 探究心が芽生える 教科横断型 ハイブリッド鑑賞 | 馬淵 哲 (まぶち さとし) | 絵画/美術科教育 | 児童・生徒(小・中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般 | 伝統的美術から現代の製品デザインまで、身近な美術品を比較したり、対話したりしながら鑑賞します。子どもの探究心の芽を育てる鑑賞学習のヒントになればと思います。総合的な学習やSTEAM教育等、教科横断的な探究的学習の導入例としても提案したいと思います。 |
| 学びが深まる 「造形遊び」 (子供の主体的な 探究活動としての 図画工作) | 村田 透 (むらた とおる) | 美術科教育 | 児童(4～5歳児・小) 教員(幼・小) | 「造形遊び」は、準備や後片付けが大変で、抵抗があると思いませんか？「造形遊び」で、子供は楽しく意欲的だけど、「遊びの中に学びはあるの?」と思いませんか？「個性的だよね」「いろいろあっていいよね」で、子供の「造形遊び」への評価を思考停止していませんか？「造形遊び」には、表現の多様性(現象)と学びの深まり(探究)があります。現場で明日から実践できる題材体験を通して、「造形遊び」の学び・楽しさ、題材開発、指導や支援の在り方について学びます。 |
| グラフィックデザイン の世界 | 世ノ一 善生 (よのいち よしお) | グラフィックデザイン | 生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般 | グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話したいと思えます。 |

【保健体育教育関係分野】

| | | | | |
|---------------------------------|---------------------|----------|---|--|
| ①ストレスと上手に 付き合う方法 ②良質な睡眠とは | 大平 雅子 (おおひら まさこ) | 衛生学/健康科学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | ①誰も聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、ストレスと「上手に付き合う」方法について様々な視点から考えていきます。 ②エビデンスに基づいて、良質な睡眠とは一体何かを考えていきます。 |
| 運動好きの子どもを 育てる体育の授業 づくり | 山田 淳子 (やまだ じゅんこ) | 体育科教育 | 児童(幼・小) 教員(幼・小) | 教師も子どもも運動が大好きになれる体育科の授業づくりを、実技や講義を通して学んでいただければと思います。体育科の授業づくりのヒントとなる事例を紹介していきます。子ども向けにも模擬授業を行い、子どもも教師もともに学ぶ場を提供したいと思います。 |

【情報・技術教育関係分野】

| | | | | |
|----------------------------|----------------------|--------------------|-----------------------|--|
| 教育工学的手法を 用いた教育環境の 改善 | 岩井 憲一 (いわい けんいち) | 認知科学/ 教育工学 | 生徒(中・高) 保護者 | 教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等のICT導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。 |
| 一本の木から 椅子をつくる | 岳野 公人 (たけの きみひと) | 技術教育/ 環境教育 | 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介します。米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にこもって、器づくりをしていたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。 |
| 動物の行動を 真似るロボット | 右田 正夫 (みぎた まさお) | 認知科学/ ロボット工学 | 生徒(高) | 外界からの情報に応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。 |
| 複雑系入門 —フラクタルとは 何だろう— | 水上 善博 (みずかみ よしひろ) | コンピュータ シミュレーション | 生徒(高) | 海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした図形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。 |

【家庭科教育関係分野】

| | | | | |
|---------------------------------|----------------------|-------|---|---|
| 何をどう食べる？ —自分のための 食べ物、食べ方— | 久保 加織 (くぼ かおり) | 食物学 | 教員(小・中・高・特) 市民一般 | 誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいいか、きちんと理解しておくことが大切です。 様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。) |
| くつろぎの住まい | 田中 宏子 (たなか ひろこ) | 住居学 | 児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。また、そこで暮らす人々がゆつくりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。 |
| 家族の機能 | 平松 紀代子 (ひらまつ きよこ) | 家庭経営学 | 児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般 | 家族の存在はどのような機能を果たしているのだろうか。 社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代に同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りしつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話します。 |

【英語教育関係分野】

| | | | | |
|------------------------|----------------------|-------------------|---------------------|---|
| イメージ教育と 英語学習 | 田中 佑美 (たなか ゆみ) | 英語教育学 | 教員(小・中) | 本講義では、イメージ教育と英語学習、特に英語学習に対する動機づけについてお話します。 イメージ教育はカナダで始まった第二言語を使って理科や社会などの教科を指導するバイリンガル教育の一つです。 日本における英語によるイメージ教育にも触れながら、英語を通して教科を学ぶことによる英語学習と英語学習に対する動機づけについてご紹介いたします。 |
| 英語の効果的な 学習方法・英語の指導法 | 新本 庄悟 (にいもと しょうご) | 英語教育学・ 英語科教育 | 生徒(中・高)・ 教員(中・高) | 英語学習における効果的な学習法を実際に体験しながら、今後の英語学習の方向性を探ります。 また、中高の英語教員の方を対象に実践的な英語教授法を紹介いたします。 |
| アメリカ小説を読む | 林 直生 (はやし なお) | アメリカ文学/ アメリカ文化 | 市民一般 | 詩や小説などの文学作品は、それ自身が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。 この講義では、主に 20 世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。 |

【学校教育関係分野】

| | | | | |
|---------------------------|---------------------|-------|---------------------------|--|
| 子どもたちの心の支援と マインドフルネス | 芦谷 道子 (あしたに みちこ) | 臨床心理学 | 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般 | マインドフルネスとは、「今この瞬間の経験に、価値判断を加えずに意図的に注意を向けること(Jon Kabat-Zinn)」と定義され、さまざまな感覚や感情を優しくあるがままに受け入れ、ゆるず態度を涵養します。プラクティスを続けると、集中力やパフォーマンス、幸福感の向上、抑うつなどの否定的感情の低下や脳機能の改善といった効果があることが、科学的に示唆されています。本講演では、マインドフルネスについてやさしく解説し、教育におけるマインドフルネスの導入についてご紹介いたします。簡単なプラクティスも体験していただけます。 |
| 教師-生徒関係 の変容とこれから | 太田 拓紀 (おおた ひろき) | 教育社会学 | 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 現在、教師と児童・生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師-生徒関係の歴史的变化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。 |
| 他者理解の コミュニケーション 心理学 | 蔵永 瞳 (くらながひとみ) | 社会心理学 | 教員(幼・小・特) 保護者・市民一般 | 人間は、他者とたくさんのコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話します。 |
| 比較教育学で 教育を考える | 児玉 奈々 (こだま なな) | 比較教育学 | 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 比較教育学は、諸外国の教育事象を対象に教育と社会のつながりを考察する学問領域です。 この講義では、現代の日本の学校で課題となっていることの諸外国における状況や各国の解決策を見ていきます。諸外国の教育事象の考察を通して、日本の学校の当たり前が海外の学校では当たり前でないことに気づき、教育と社会のつながりを知り、さらには、人間にとって教育や学校はどんな意味を持つものなのか、教育や学校の本質について考えることを目指します。 |

| | | | | |
|-------------------|----------------------|-------------------|-----------------------|--|
| 外国ルーツの子どもの教育 | 児玉 奈々 (こだま なな) | 比較教育学 | 教員(幼・小・中・高・特) | 外国ルーツの子どもなど多様な文化的・言語的背景をもつ子どもが在籍する学校が増えています。子どもの教育的ニーズを適切にとらえて学びと育ちを支援するために、教員にはどのような視点や意識が必要でしょうか。カナダやアメリカで行われている多文化教師教育ワークショップの体験を通して、考えていきます。 |
| 教育法規を読み解く | 藤村 祐子 (ふじむら ゆうこ) | 学校教育講座 (教育制度学) | 教員(小・中) | 教育法規は、教育の枠組みとなる重要な要素です。様々な教育改革が進められる中で、教育法規に目を通し、教育に何が求められ、どの方向に進もうとしているのか、改めて考えてみたいと思います。 |
| キャリア教育の理解と推進 | 若松 養亮 (わかまつ ようすけ) | キャリア心理学 | 教員(幼・小・中・高・特) | 進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話しします。 |
| 子どもが「こころ」に気づく時 | 渡部 雅之 (わたなべ まさゆき) | 発達心理学 | 教員(幼・小・特) 保護者・市民一般 | 幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができません。他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ動きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話しします。 |
| 育みたい学力に応じた評価課題づくり | 山本 はるか (やまもと はるか) | 教育方法学 | 教員(小・中・高) | 子どもたちに育みたい学力をどのように考えるのか、その学力を見取る評価課題をどのように作るのかについて、ワークショップ形式で進めていきます。 |

【幼児教育関係分野】

| | | | | |
|------------------|----------------------|-------|------------------|--|
| 幼児期の遊びを豊かにする環境構成 | 山本 一成 (やまもと いっせい) | 幼児教育学 | 生徒(高) 教員(幼・小) | 幼児は遊びを通して様々なことを学んでいきます。そして、幼児が夢中になって遊ぶためには、子どもたちの遊びを可能にする環境が整えられている必要があります。この講座では、子どもの遊びの大切さや、遊びにかかわる環境の在り方について、理論と実践の両面から学んでいきます。 |
|------------------|----------------------|-------|------------------|--|

【障害児教育関係分野】

| | | | | |
|------------------------------|----------------------|--------------------|--|---|
| 子どもの小さなサインから考える重症心身障害児の理解と支援 | 石田 基起 (いしだ もとき) | 障害児教育・ 障害児生理心理学 | 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 その他(福祉関連作業所など) | 重い障害のある子どもたちは、自分の気持ちや意思を言葉で伝えることが難しいことがあります。本講義では、表情や視線、姿勢の変化といった行動的なサインに加え、心拍や皮膚温の変化などの生理心理学的な視点から、子どもが何を感しているのかを読み取るヒントを探ります。具体的な事例をもとに、子どもたちの小さな反応にどう寄り添い、どのような関わりができるかを、参加者の皆さんと一緒に考えていきます。 |
| ちょっと気になる子どもたちの発達と教育 | 窪田 知子 (くぼた ともこ) | 特別支援教育 | 教員(幼・小) 保護者 | 私たちの身のまわりにいる“ちょっと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいのか？家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか？保護者どうまく連携するには…？などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。 |
| 支援の必要な子どもと教育 | 羽山 裕子 (はやま ゆうこ) | 障害児教育 | 教員(小・中) | 通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまずきを抱えがちなのか、どのような支援が可能なのか、一緒に考えていきたいと思っています。 |
| 「気になる」児童・生徒の発達の理解と支援 | 松島 明日香 (まつしま あすか) | 障害児心理 | 教員(幼・小・中・特) 保護者 | 友達とトラブルになる、じっとしてられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が注目されています。その支援と対応には彼らの困難さを発達の的に理解していくことが重要です。本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童・生徒の困難さをどのように理解し、対応していけば良いのかについて考えます。 |

【環境教育関係分野】

| | | | | |
|--------|----------------------|-------|---|--|
| 湖沼の生態系 | 石川 俊之 (いしかわ としゆき) | 湖沼生態学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 湖沼の水の中には一見すると何もないように見えます。しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。琵琶湖を例に生物と生息環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。 |
|--------|----------------------|-------|---|--|

| | | | | |
|---------|------------------|-----------|---|---|
| 食料生産と環境 | 森 太郎 (もり たらう) | 園芸学/植物病理学 | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか？ 一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか？ の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。 |
|---------|------------------|-----------|---|---|

【教職大学院担当教員関係分野】

| | | | | |
|---|---------------------|----------------------|-----------------------|--|
| 教師の変容と省察を促す研修会の創造 | 青木 善治 (あおき よしはる) | 教育方法学 | 教員(小・中) | 「主体的・対話的で深い学び」の実現の上で不可欠な要因があります。それは、そもそも教師が一人ひとりの子どもの学びの姿をしっかりとらえることができればはじまりません。しかしながら、教師自身の見方や感じ方を一人でとらえ直すことはなかなか難しいことです。そこで、令和2年度まで新潟県内の小学校校長として研修による学校経営を行ってきた経験もいかし、私たち教師が生涯に渡って学び続け、変容し省察しやすい研修会を授業研究時の事後協議会を活用して行います。 |
| コーチングを意識するだけで子どもが変わる〇〇の方法 ~子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはここにあった！ | 青木 善治 (あおき よしはる) | 教師教育 | 若手~中堅教員(小・中) | 子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはどこにあるのでしょうか。実は、コーチングを意識するだけで子どもが変わる様々な方法について、具体的に楽しみながら紹介します。令和2年度まで新潟県内の小学校校長として学校経営を行ってきた経験もいかして行います。 |
| 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア | 青木 善治 (あおき よしはる) | 美術科教育 | 教員(幼・小・中) | 新潟県立近代美術館勤務の経験もある講師が、「対話型鑑賞(朝鑑賞)」や「アートカード」や「造形遊び」に関する活動など、楽しく表したり、鑑賞したりする指導のアイデア満載な研修会を行います。 |
| 幼児の健康と生活 | 奥田 援史 (おくだ えんじ) | 健康教育 | 教員(幼) 保護者 | 幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。 |
| 暮らしと消費と環境 | 岸田 蘭子 (きしだらんこ) | 家庭科教育 | 教員(小・中・高) | 新学習指導要領でも重視されている「消費と環境」についての教材開発や授業実践についての解説を行います。受講者主体のワークショップ型の講座で、小・中・高対象ですが、学校種別でも合同型でも対応できます。 |
| 社会科の学力とパフォーマンス評価 | 岸本 実 (きしもとみのる) | 社会科教育 | 教員(小・中・高) | 社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。 授業の中の15~20分の中心活動、1時間として1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。 |
| 新しい時代が求める資質・能力を伸ばす教育課程・指導・評価 | 岸本 実 (きしもとみのる) | 教育方法学 | 教員(小・中・高) | 新しい学習指導要領により整理された、新しい時代が求める資質・能力を伸ばすためには、学校を基礎に教育課程を編成し、カリキュラムマネジメントを適切に実施していくことが求められています。また単元や授業において確実にその資質・能力を身につけさせる 学習指導と評価の在り方が問われています。 本講座では、学校、学年、教科など学習者の状況に合わせて、これらの問題を考察します。 |
| 国語科の授業づくり | 北村 拓也 (きたむら たくや) | 国語科教育 | 教員(小・中) | 主体的・対話的で深い学びの実現を目指した国語科の授業づくりについて、実際の授業や指導案を通して検討します。 |
| 算数・数学科における統計の授業 | 詫摩 京未 (たつま きょうみ) | 算数・数学教育/ データサイエンス | 児童・生徒(小・中) 教員(小・中) | 算数・数学の教科書には、すでに収集されたきれいなデータが掲載されており、それらを基にして整理・分析し、考察しながら、学習をすすめます。ここで学んだことを実際に活用するためには、子どもたちが自分でデータを収集するところから体験させる場面に授業に取り入れることは大切であると考えます。そこで、本講義では、与えられたデータではなく、実際に自分たちでデータを集めてみるから始める授業作りについて考えていきたいと思います。 |
| 校園長としての学校危機管理 | 田中 満 (たなか みつる) | 学校経営 | 園長・校長(幼・小・中) | 学校は、幼児・児童・生徒が安心して過ごせる場所ではなくはなりません。学校の最高責任者であり多くの子どもたち・教職員を預かる重要なポジションにある校園長は、徹底した危機管理を図る必要があります。校園長の役割を確認しながら、管理職としての学校危機管理を考えます。 |

| | | | | |
|-------------------------------------|----------------------|---------------|--------------------------|---|
| 体育授業における指導と評価の一体化 | 辻 延浩 (つじ のぶひろ) | 体育科教育 | 教員(小・中・高) | 子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきましょう。 |
| 「モンスターペアレント問題」を読み解く視座 | 西野 倫世 (にし の みちよ) | 教育行政学 | 教員(幼・小・中・高・特) | 特に2000年代以降、保護者からの理不尽な要求が増し、社会問題となってきました。本講義では、いわゆる「モンスターペアレント問題」がなぜ生じてきたのか、その背景を確認した上で、この問題をめぐる論点・視座について考えを深めたいと思います。 |
| 学校における人材育成 | 前田 利幸 (まえだ としゆき) | 教師教育/ 学校経営 | 若手～中堅教員(小・中) 管理職(小・中) | 今日、学校現場では教職員の多忙化が深刻な課題であり、働き方改革の推進が求められています。さらに滋賀県の教職員の年齢構成からも学校現場での人材育成は喫緊の課題となっています。このような状況下、多忙な学校現場においていかに効率よく計画的に人材育成を進めるのか、また教育課題解決に向けていかに学校組織力を向上させていくのか、校長のリーダーシップとマネジメント力が求められます。教員の各ステージに合わせて、明るく元気に学び続ける教職員を応援できるよう自身の経験を活かして研修を行います。 |
| 科学教育における話し合い活動 -「滝をのぼる水滴」を事例として- | 山岡 武邦 (やまおか たけくに) | データサイエンス | 児童・生徒(小・中・高) 教員・市民一般 | 本講義では、科学教育における話し合い活動に焦点化し、深い学びの実現を目指す授業づくりについて検討します。具体的には、錯視に関する実験を行い、話し合い活動を取り入れながら自然現象を理解し、そこで得たデータを解釈していくプロセスを体験します。 |
| 障害のある子どもの支援 | 山川 直孝 (やまかわ なおたか) | 特別支援教育 | 教員(幼・小・中・高・特) | 勉強が苦手だったり、集団生活になじめなかったりする子どもが少なくありません。障害の状態やそれに伴う学びにくさは多様かつ個人差が大きく、個別最適化した学びが求められます。心理アセスメントの紹介や気になる行動をする理由、子どもの長所を生かした対応などについて、自立と社会参加を見据えながら考えていきます。 |
| 全国学力・学習状況調査から考える算数・数学科の授業づくり | 山下 亮 (やました りょう) | 数学科教育 | 教員(小・中) | 全国学力・学習状況調査の調査問題は、学習指導要領が求める育成を目指す資質・能力を踏まえ、その具体的なメッセージとして示されています。この調査問題をもとに、算数・数学科の授業づくりについて考えます。 |

4 教職探究講座

教職探究講座は、滋賀県内の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解し、教職への理解を深めてもらうことを通じて、教員を目指す優秀な生徒を多く輩出することを目的としている。こうした観点に立って、昨年度より文部科学省の補助事業「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」の1つとして対象の高等学校を拡大し、今年度は12校(昨年度は10校)から教職を志す1, 2年生の生徒, 131名(昨年度は105名)を迎えて12月に2日間にわたって開催した。5つの講義は、教育社会学, 臨床心理学, 情報教育学の教育学部教員及び現場を経験している実務家教員によって行われた。高校では学ばない多方面からの教師論が展開され、本学に在籍しているOB・OGも36名(昨年度は25名)が参加して学生目線での情報提供を行った。受講後のアンケート調査では、回答した高校生の多くが「自分の進路を考えるうえで、参考になった」「教職について興味が深まった」と答えている。

【参加した生徒の感想より】

(2年生) 講師の先生の話はとても教師になる上で大切なことをたくさん聞けました。特に現役生の話はとても参考になりました。教育実習の話、受験の話、僕らにとってはまだまだやと思っていても、すぐに来るだろうから今この時期に考えさせられることをたくさん聞けてとてもいい機会になりました。講座とは関係ないですが、こちらが挨拶をしたら必ず笑顔で挨拶をしてくれる滋賀大の学生と、先生方にはとても感謝しています。笑顔たっぷりの滋賀大に行きたいと感じました。来年もあるのであればぜひ参加したいと思います。2日間ありがとうございました！

(2年生) 2日間に渡り、貴重なお時間を割いてくださり、ありがとうございます。私はこの講座で、教師へのリスペクトが増えたと思います。教職に担われた大きな責任と私たちが知り得なかった能力など、教員を少し掘り下げて知れたのは良い経験になりました。これから教師を目指す立場として、明確な道が見えた気がします。またお世話になる機会がありましたら、よろしくお願いします。

(1年生) 在學生の方々による、お話と交流会が特に良かったです。滋賀大学では、教員採用試験に受かる人がとても多いということや、授業の組み立て方を学ぶ授業が充実しているということを知り、教員を目指す上での、様々な能力が滋賀大学で身につけられることを知りました。滋賀大学に行きたい、という気持ちがとても強まったので、来年もこの講座に参加して、滋賀大学合格を目指して進路実現に向けた学習をより一層頑張ろうと思います。

(1年生) 現代の教師に必要な資質能力、専門性など特に学び続ける意欲をもつことについての重要性を学べた。教員としての学級運営や生徒への寄り添い方、ICT活用など教師に必要な多様な能力について高校生ながら予備知識として学ぶことができイメージがより鮮明になった。在學生との懇談会ではイメージしづらい大学生活についてや先に受験などを経験された先輩としてアドバイスなどいただけてこれからのビジョンをより具体的にすることができた。

【令和7年度教育実践総合センター連携講座「教職探究講座」(高大連携)】

- 1 目的 教職を志望する滋賀県内の高校生を対象に、教職に対する理解を深めると共に進路(教職)に対する視野を広げ、モチベーションを高めることを目的とする。併せて、地域が求める「これからの『滋賀型』学校教育」人材を養成するスタートアップ講座とする。
- 2 対象 滋賀県内高等学校の1・2年生
- 3 主催 滋賀大学教育学部(附属教育実践総合センター)
- 4 期日 令和7年12月17日(水)・18日(木)
- 5 会場 滋賀大学大津キャンパス 大講義室・中講義室
(プログラム)

(1) 1日目: 12月17日(水)

- ◆ 開講式(14:00~14:05)
挨拶: 学部長 久保 加織 教授
- ◆ 第1講(14:10~14:55)
講義名: これからの教師に求められる資質と能力
講師: 太田 拓紀 教授
 - 教師の資質能力
 - ・教師の仕事の実際
 - ・教師に求められる資質能力
 - 教師の資質能力を高めるために
 - ・教師の力量形成と大学での学び
 - ・「学び続ける教師」とは
- ◆ 第2講(15:00~15:45)
講義名: 子どもたちのWell-beingを育む教師の役割
講師: 芦谷 道子 教授
 - 現代の子どもたちが抱える心の問題
 - Well-beingに満ちた学校環境を育む
- ◆ 第3講(15:50~16:35)
講義名: 教職の魅力
講師: 小島 秀樹 特任教授
 - 教職の魅力を考える
 - 学校を取り巻く状況
 - 学習指導要領と育成すべき資質能力
 - 学校における学びの基本
「理解するということ」と「伝えること」
 - 教員に求められるもの
 - 教職を志すうえで大切なこと
—高校時代にやってほしいこと—

(2) 2日目: 12月18日(木)

- ◆ 第4講(14:00~14:45)
講義名: 授業とICT
講師: 岩井 憲一 准教授
 - 教育におけるICT活用とは
 - ICT活用の重要性和効果
 - 教育の情報化に向けたICT活用の取り組み
 - ICTを扱う上での注意
- ◆ 第5講(14:50~15:35)
講義名: 教育学部で学ぶとは
講師: 山下 亮 准教授
 - 教育学部とは
 - ・各学校種の免許取得方法
 - ・他学部との違い(教育学部の独自)
 - ・教育学部の可能性(就職)
 - 先輩に学ぶ: 在学生との懇談交流会
 - ・「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」(先輩からの話)
 - ・「先輩への質問と応答」(高校生からの質問)
- ◆ 閉講式(15:35~15:45)
司会: センター長 神 直人 教授
 - 修了証書授与(生徒代表)
 - 挨拶: 学部長 久保 加織 教授
- ◆ 在学生との懇談交流会(15:55~16:25)



開講式 久保加織学部長の挨拶



在学生から高校生へのメッセージ



在学生との懇談交流会

(神 直人)

5 教育臨床研究

1. 教育相談領域

2007年から継続して実施している非公開での教育相談業務を継続した。相談場所としては主に大学内にある研究室（芦谷研究室）を用いた。今年度は、教員からの相談やコンサルテーションの依頼が3件、スーパービジョンの依頼が5件（1件につき、必要に応じて複数回実施）、本人や保護者からの教育相談依頼が1件、学生からの相談が5件あり、相談延べ件数（2月末までの予定を含む）は30件であった。スーパービジョンとしては、教員になった卒業生を対象としたもの、自治体や病院、大学心理相談室の心理師を対象としたものを実施している。グループを対象とした自治体への支援として、「野洲市発達支援センター」での指導員を対象としたスーパービジョン研修も行った。

継続面接が必要な事例は保健管理センターや学外の相談機関などに繋ぎ、連携して支援している。学生の間にも、将来や進路への不安、発達の問題からくる学習や対人関係の困難さ、不安障害などが見られている。保健管理センターは敷居が高いと感じる学生も多く、教員が支援への入り口として機能することの意義を感じている。

（文責：芦谷道子）

2. 滋賀県教育委員会との連携事業

① オンラインを活用した不登校支援事業

本事業は、県内の不登校児童生徒に対してオンラインによる学びや交流の機会を試験的に確保し、社会的自立に向けた支援となるか効果検証することを目的としている。

小学5、6年生及び中学生を対象としてそれぞれ2回ずつの「子どもオンライン教室」を実施し、ストレスの理解と対応、心の上手な使い方について解説を行った。少人数の参加であったが、問いかけに対して絵文字で反応してくれるなど、積極的な参加が伺えた。「きもちが少し楽になった」「ためになった」といった感想があつて概ね好評であったが、参加者が少なく、オンライン授業へのハードルの高さや利用者の開拓が課題として浮かび上がった。

オンラインを活用した不登校支援事業
小学5・6年生
子ども
オンライン教室
①11月11日(火) 13:30~15:30
ストレス 野菜のふしぎ
②11月18日(火) 13:30~15:30
心の筋トレ おうち体育
申し込み 10月31日

② 1人1台端末等を活用した『心の健康観察』推進事業

本事業は、児童生徒の心身の状態を確認できるICTツールを活用し、メンタルヘルスの悪化や援助要請などを学校および教職員が早期に把握することを目的としている。問題が深刻化する前に、教職員が緊密に連携し、チームで積極的に支援を行う。

昨年度のモデル実施での成果を踏まえ、今年度は県立高等学校での取組の効果検証および市町教育委員会での事業の推進を図った。現状と好事例の共有、課題の検証を行った結果、問題の早期発見、早期対応に繋がった事例も見られ、本事業の意義が感じられた。

教師の負担軽減につながるシステムの構築や、教育委員会によるバックアップ支援が、事業普及の鍵となると考えている。次年度の事業実施に向けて、さらに具体的に検討を進めている。

事業概要

- ・児童生徒に心身の状態を尋ねることや、悩みや不安に思うことがないか確認することが可能なICTツールを導入し、児童生徒のメンタルヘルスの悪化や援助要請、学級の変容などを学校及び教職員が把握する。
- ・問題が深刻化する前から教職員が緊密に連携しつつチームで積極的に支援するモデル構築を行い、成果の普及展開を通じて、県内の全ての小中高等学校等における「ICTを活用した悩みや不安を抱えた児童生徒の早期把握・早期支援(心の健康観察)」の導入を推進する。

「心の健康観察」の在り方検討 (R5. 10月)

有識者 管理職、ICT担当者 養護教諭等
本来の健康観察の重要性を重視しつつ、自身の不安や悩みを
表出しにくい子どもへの配慮として、1人1台端末の活用、学
校の実態に応じて多様な方法を考慮する必要がある。

モデル校による実証 (R6. 1月)
県立学校1校で、1か月L-Gateを利用し検証

令和6年度1人1台端末等を利用した「心の健康観察」の導入に向けた調査研究事業

県立学校4校、4市

- <心の健康観察の実施>
- ・県立モデル校を4校選定。「今日の気分」、「食欲」「睡眠時間」等を質問。
- ・ICTツールは、「Microsoft Forms、L-Gate」等、学校により異なる。
- <事業運営協議会の設置>
- ・事業運営協議会を設置し、事業計画の検討や取組の進捗管理、効果検証およびモデル校・モデル市町教育委員会への指導助言等を行う。

現状

・使用しているICTツールはそれぞれで異なっている。
・質問の項目は「今日の気分」、「睡眠時間」、「食欲」等で、
特に「今日の気分」の数値が低い児童生徒に対し担任等
が声をかけ、児童生徒が抱える問題等について早期発
見・早期対応を行っている。

課題

・回答結果を集約・確認することについて業務が増加することが懸念される。
・児童生徒からの相談希望に対して適切な対応ができるよう、
教育相談等の研修の実施を行う必要がある。

事業の効果

- ①「相談がしたい」と回答した児童生徒に早急に対応することができた。 ②担任と情報共有することにより、生徒理解につながった。
③児童生徒自身が自分の状態に気付き早めに教員に相談するきっかけになった。 ④複数での対応や見守りにつながった。

令和7年度の重点的な対策



- ◎県立高等学校において校務ネット等を活用した心の健康観察を実施し、悩みや不安を抱えた児童生徒の早期把握や早期支援を行う。
- ◎推進協議会を設置し、県立高等学校での取組の効果検証および市町教育委員会での事業の推進を図る。



「1人1台端末等を活用した『心の健康観察』推進事業」概要

(文責：芦谷道子)

3. 心理教育開発実践事業

2019年より、英国教育施設 MiSP (Mindfulness in Scholls Project)、オックスフォード大学、関西医科大学心療内科学講座、MBSR 研究会と連携協力して、英国で開発された子どもを対象としたマインドフルネスプログラム「.b プログラム」の指導者養成、実践事業に取り組んでいる。日本の子どもたちを対象とした複数フィールドでのプログラム効果検証を行う4か年計画の「.b プロジェクト」を終え、2021年より、英国とオンラインで繋ぎ、子どもマインドフルネス指導者 .b Teacher 養成研修 Teach .b を年に一度継続実施する体制を整えている。5回目となる今年度の研修は8月に4日間にわたって行われ、日本各地から心理士、教師、医師、その他の教育関係者より申し込みがあり、17名(累計125名)の新たな指導者を育成した。複数フィールドにおけるプロジェクトの効果検証を経て、今後の日本における普及について検討を進める。今年度からは、子どもに関わる親や教師を対象とした「親と教師のための.b プロジェクト」もスタートし、全国から公募した98人を対象に、6月から11月にかけてランダム化比較試験を実施した。「子どもの問題行動に穏やかに対応できるようになった」「イライラしなくなった」「眠れるようになった」「幸せはなるものではなく、感じ取るものだと実感できた」など、ポジティブなフィードバックが多数寄せられ、子どもに関わる成人に対する実施の手ごたえも得ている。

昨年度から開始した、より年少者(10歳～)も対象に含む4回短縮版のプログラム「.breathe: ドットブリーズ」の指導者育成プロジェクトも6月に実施した。こちらも日本全国から27名(累計60名)の参加者があり、参加者からは概ね肯定的なフィードバックを得た。Teach .b に比べて養成講座の時間やプログラム回数も短く、マインドフルネスの本質を指導者が理解して子どもたちに伝えることができ

るかどうか不安だとの声もあり、次年度からは1日の講習ではなく、複数週にまたぐ講座を検討してゆくこととなった。また昨年度より、心身症や発達障害などのケアを必要とする子どもたちへの .breathe も実施している。今年度は滋賀大学大津サテライトで、2～3月の5週間にわたり、不登校の中学生15名を対象にプログラムを実施した。

子どもマインドフルネスの団体 (MfCP : Mindfulness for Children's Project) を運営し、ホームページ (<https://mfcp.info/>) において情報交換、情報共有、各種コンテンツの提供を行っている。さらにオンライン上で指導者のプラットフォームを作り、指導者同士の交流と自主プラクティスの機会を設けている。今後もこの活動を継続、発展させ、子どもマインドフルネスの普及に努めたい。

(文責：芦谷道子)

4. SKC キッズカレッジ (滋賀大キッズカレッジ) 2025年度連携活動報告

① 2025年度の活動の重点

基本的方向は前年度を引き継ぎつつ、本年度は発達障害にたいするSKCの理論や実践的方法を外に向けても広めていくことにも取り組むことにしました。

② 滋賀大学との連携・協力

● 教職大学院ダイバーシティ教育力開発コースフィールドワーク実習の実施

11月5日、昨年に引き続き、SKCキッズカレッジ学習室にて、上記フィールドワーク実習を実施しました。本年度は3名の参加でした。はじめにアセスメントと学習指導についてのレクチャー、続いて粘土を使った指導の実習、参与観察、最後にミーティングを行いました。レクチャーの内容は「はじめて聞いた」という感想がありました。

● 滋賀大学教育学部の授業への協力

昨年度に引き継ぎ、当法人のスタッフである横江真理子と深川美也子が、教育学部の非常勤講師として講義を担当しました。

③ 地域支援・啓発活動

● 大津サテライト相談室

本年度で3年目になりますが、大津駅前のサテライトで毎月一回、予約なしでも参加可能な発達障害や不登校などの相談を行っています。参加者0の月や3～4名の月もありますが、年間を通して約10名の相談がありました。そのうち数名は、さらにアセスメントや学習室の参加に継続しています。

● 現職教職員向け『子ども理解と指導力アップ講座』

本年は2つの研修講座を、対面とオンラインのハイブリッドで行いました。

スローラーナー(境界線児)の子どもたちの 特別の学習困難さと発達の可能性について(連続4回)

4月26日(土)、6月28日(土)、8月23日(土)、10月25日(土)

音韻意識のアセスメントと指導方法の実践的研修講座(連続3回)

11月22日(土)、12月27日(土)、1月31日(土)

いずれも、対面約10名、オンライン約10名の20名の参加で、特徴としては現職教員だけでなく、福祉施設や病院で働く心理士、指導員の参加が複数あったことです。課題の広がりを感じました。

(文責 窪島務)

6 情報教育研究

1. 事業名及び担当者

教育実践において、子供たちの「確かな学力」を育成するためには、学習内容をよりわかりやすく伝える授業づくりが重要であり、そのための手段の一つとして、教員が ICT を効果的に活用した授業を展開することが求められます。文部科学省も、ICT には学習内容の理解を促進する効果があると整理しており[1]、ICT の導入を含む教育の DX は、今後さらに重要になると考えられます。また近年は、生成 AI やデータサイエンスの活用も広がっており、データの分析・表現・活用を踏まえた授業実践も求められています。

筆者は、令和 7 年 12 月 17 日から 18 日に開催された「教職探究講座」の 2 日目において、授業における ICT の活用法とともに、教育分野で注目されている Learning Analytics（学習分析）[2][3]について、昨年度[4]に続いて今年度も講演を行いました。あわせて、今年度は情報技術を用いてアプリケーション化した実践についても紹介しました。本稿では、その概要を報告します。事業名は「授業と ICT — データでひらく学び」、担当者は岩井憲一です。

2. 事業の目的

Learning Analytics については昨年度の報告でも触れましたが、授業中および授業外の学習活動を ICT 機器や各種技術によって記録・デジタル化し、そこから得られた情報を担当教員に示すことで、学習支援や授業改善につなげることを目的としています。一方で、昨年度の分析では、対象となる受講者数が増えると処理に一定の時間を要し、システム面での調整が必要になるという課題がありました。本事業では、こうした課題を踏まえ、データの活用をより身近で扱いやすいものにするを目指しました。



3. 事業の概要

3.1 Learning Analytics の Web アプリケーション化について

実用段階の Learning Analytics では、多くの場合、システム構築や運用に相応のコストと人的資源を必要とします。そこで筆者は、Learning Analytics の処理の流れを見直して軽量化し、より扱いやすい Web アプリケーションとして再構成しました[5]。図 1 に、その一例として理解度と満足度の推移を示します。



図 1 理解度と満足度の推移例

今回の改善により、200名弱の登録者と2,000件弱のデータであっても、問題なく扱えるようになりました。また、スマートフォンからも閲覧できるようになったため、休み時間などの短い時間にも授業前に必要な情報を確認できるようになりました。

3.2 学習内容の Web アプリケーション化について

授業において学習内容をわかりやすく示す方法の一つとして、教えたい内容そのものを Web アプリケーションとして具体化することが挙げられます。筆者は、たとえば「暗号変換」のように、文字列の変換過程を視覚的・操作的に理解できる Web アプリケーションを試作しました。

この Web アプリケーションでは、ある一定の規則に従って「任意の文字列」を「異なる3文字」の並びに変換（符号化）することができます。授業内でその処理の流れを示したところ、データ変換の仕組みを具体的に理解しやすくする教材例となりました。例えば、「ひらつ」の3文字で「滋賀大学」を変換すると、

「ひららひつつつひらららひらつらららひつららつひらひららひつつひつつひらひらつひひつらつら」

となります。もちろん逆変換も可能です。

このように、教えたい内容を操作可能な形で Web アプリケーション化することで、学習内容を理解しやすくする授業設計の一方法を示しています。

4. 今後に向けて

本稿では、本事業「授業と ICT — データでひらく学び」の概要について述べました。今後も、授業における ICT 活用とデータ活用の両面から、教育改善につながる実践を進めていきたいと考えています。

参考文献

- [1] 文部科学省：「平成 27 年度文部科学白書」，第 11 章，
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201601/1375335_017.pdf
- [2] Siemens, G., & Long, P., "Penetrating the fog: Analytics in learning and education." *EDUCAUSE Review*, Vol.46, No.5, pp.30-32, 2011,
<https://er.educause.edu/articles/2011/9/penetrating-the-fog-analytics-in-learning-and-education/>
(2026年2月6日アクセス)。
- [3] Society for Learning Analytics Research, <https://solaresearch.org/> (2026年2月6日アクセス)。
- [4] 岩井憲一：“6 情報教育研究”，滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター年報 Vol.8, pp.89-90, 2025, https://www.edu.shiga-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/R6jisen_rpt2.pdf (2026年2月6日アクセス)。
- [5] 岩井憲一：「軽量 Web 型 Learning Analytics システム SiLA の設計と基礎評価」，日本教育工学会 2026 年春季全国大会（第 48 回大会）講演論文集，1-S04A2, pp.121-122, 2026.

(文責 岩井憲一)

7 教育実習支援

今年で21年目を迎える教育参加カリキュラムは、1年次の「教育参加プランニング」「観察実習」、2年次の「実習基礎」「交流実習」、3年次の「基本実習(教育実習)」「教育実習中間指導」「教育実習終了後の発展実習(3年次の秋学期と4年次)」「自主参加体験」という滋賀大学のすべての教育実習科目と教育体験科目を、原則として4年間で積み上げ式に体験するプログラム(詳細は後述)である。

特に、地域実習(栗東実習・守山実習・大津実習・草津実習)は、次年度から本格的に始まる湖北実習を含め年々拡大しており、「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力量を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1年生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して将来の目標を設定し、これからの4年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識と見通しをもって、充実した学生生活を送るための一助となるものである。

この時期で完結するのではなく、毎年更新をさせて実践を行うための支援機会を設け、4年間で更新しながら有効に活用していくべきものである。

2. 観察実習

同じく1年生の観察実習は、交流・基本実習の事前指導として、附属学校園での授業参観等を行う活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校園の日常に触れ、教員としての心構えや学校園の現状を体感する機会になっている。

3. 交流実習

2年生の交流実習は、授業場面ではなく、主に学校行事等における準備や運営に指導者の立場から体験的に関わる実習である。交流実習の中で、小学校では校外学習や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール(文化祭)等の指導補佐を行っている。先生方や児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等をどのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。

また、ここ数年は、意図的に交流実習の打合せ日を3年生の基本実習期間に設定してもらい、先輩の授業参観や研究会への参加機会とすることで基本実習への準備を行っている。

4. 基本実習(教育実習)

3年生になると、交流実習を行った学校で3週間(前期・後期方式または後期一括方式)の基本実習(教育実習)を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、授業実施、一日担任等である。

基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくことや授業を進めていくことが求められる。また、多様な児童生徒や、様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことで、より具体的な対応を学ぶことができる。さらには、現場教員の児童生徒との関りの姿を見て、教員志望への気持ちを向上させることにもつながる。



地域実習校での基本実習

5. サポーター活動（自主参加体験・発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、配属校で3年次の3月まで原則として週1回のサポーター活動を行う（栗東実習3回生は全員必修，他も原則実施）。基本実習前のサポーター活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置き，それを活かして実習期間中での児童生徒との信頼関係の形成，担当教員との授業の打ち合わせ，授業構想・指導案の確認等を行っている。そのため，基本実習に欠かすことのできない有意義な活動となっている。また，基本実習終了後の活動では，基本実習で学んだ成果を活かして児童生徒や先生方とより深く関わり，学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。

なお，基本実習前（実習中間期）のサポーター活動は自主参加体験として，実習後のサポーター活動は，発展実習として単位申請することができる。また，4年次になっても必要なら基本実習の配属校でサポーター活動を続けることもできる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが，代表的な支援は，以下の3点である。

(1) 実習中の支援

地域実習担当の学部教員が，学生の授業を参観・助言したり，学生から実習の様子を聞いたりして，技術面や精神面への支援を行っている。また，前期・後期方式，後期一括方式にかかわらず，中間時期に教育実習中間指導を実施している。そこでは，これまでの実習をふりかえり，前期の課題を見つけて後期に向けての目標を明確にすることをめざしている。この時に他の実習仲間と情報を共有できる機会を設けることができれば，いっそう効果的である。

(2) 実習後の支援

基本実習終了後に，学生からの実習アンケート結果に基づき，授業づくりに関する内容と生徒指導的な内容の2つに分けて事後指導を行っている。実習のふりかえりをグループで共有したり，実習担当からの指導を受けたりすることで，今後の学生生活をプランニングすることにつながる。

また，3年生の基本実習と1年生の教育参加プランニングが終了する頃に，専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3年生が基本実習の成果を発表し，それぞれの経験をふりかえる機会とし，1・2年生は，上級生の発表や先輩との意見交流を通して，今後行う実習の情報を得る場となっている。

(3) サポーター活動への支援

スクールサポーターでは，運動会や音楽会といった学校行事の準備や手伝いといった，日頃は経験をしない裏方的な仕事を行うことになる。そのことにより，授業だけでなく，陰で支える仕事の存在を知り，教員同士の「思いやり・感謝・協力」の心を学び，チーム学校の大切さを体感するのである。地域実習の学生だけでなく，附属実習の学生にもその機会を知らせ，紹介する支援も行っている。



スクールサポーター活動

7. 今後に向けて

今後は，教員という仕事のやりがいや魅力を実感させ，その職業への憧れや意欲を高めさせるために，身近な先輩である卒業生からの声を聴く機会を増やしていくことやスクールサポーター活動が継続的に，また，発展実習が更に実践しやすいように環境を整えることが必要である。そのためには，地域実習校と大学との連携が不可欠である。

（上島 憲一）

8 教師力向上支援

教育実習支援担当の主たる役割は、前項「7 教育実習支援」で示した教育参加カリキュラムを学生たちが円滑に進めていけるよう支援すること。もう一つは、教師力向上をめざす学生たちの自主的な行動を支援し、その活動を支える「教師力向上支援」である。以下は、その取り組みである。

1. 教師力養成サークル「教師のたまご」の設立

このサークルは、令和5年度に新しく立ち上げたものである。それ以前は、基本実習を終えた3回生から授業づくり研修や教員採用試験対策を望む声上がり、それに応える形で支援活動を行っていた。

ところが、年々参加希望者が増える反面、全国的には教員不足が深刻化し、教員をめざして入学して来た教員養成系の学部生でさえ卒業後の進路に教員を選択しない傾向が強まっている。そこで、附属教育実践総合センターでは、教員志望を抱いて入学してきた学生に対し、その夢の実現に向けて主体的かつ気軽に学べる機会と場を提供したいと考え、本サークルを設立することにした。

2. サークルの主な活動内容

本サークルでは、教師力養成の内容を図1のように「受かる力」・「遊び心と即戦力」の2つに分けて参加者を募集し、グループ別に活動を行っている。昨年度までは、「授業力UP」という2回生対象の授業づくりを取り組む活動も参加募集をかけていたが、6年度は参加募集がなく、かつ2回生の授業にこのサークルに参加ができる余裕がないこと等を考えて、2つのグループに絞った。

教師力養成サークル 教師のたまご
参加者募集について
2025.11.17 滋賀大学教育学部 附属教育実践総合センター

附属教育実践総合センターでは、教師力の向上をめざす学生の主体性を支援したいと考え、昨年度より教師力養成サークル「教師のたまご」と称する活動をはじめました。

同じ志を持つ学生が集まり、地域実習担当教員とともに協力的な学びを展開し、新たな学びの蓄積や新たな友人関係を築いていってくれることを願っています。

参加希望者は、登録専用 Form に必要事項を記入し、申し込んでください。
サークル活動への参加と退会はあくまで自由。費用は一切かかりません。

教師力養成サークル 教師のたまご

グループ A: 受かる力 UP
対象: 3回生 (11月～翌年8月)
(翌年教採受験予定の2回生も参加可)

教師への道を拓くためには、是非とも採用試験に合格したいもの。
このグループでは、志を共にする仲間が集まり、情報共有はもとより小論文や面接の練習を通して「受かる力」の向上に迫っていきます。

グループ B:
遊び心と即戦力 UP
対象: 4回生 (11月～翌年3月)

正規採用、講師採用の区別なく、卒業後4月から即学校現場で働く4回生に対し、学級経営や学習指導、教員としての心得等も含め教員としての即戦力UPにつながる講話や不安を払拭するための相談などを行っていきます。

【図1：募集案内】

(1) 「受かる力UP」グループの活動

教員をめざすという共通の志をもつ仲間が集まり、情報共有はもとより小論文や面接、討論、模擬授業の練習を通して「受かる力」を向上させている。

全国的に採用試験日が早まり、3年次受験を実施する自治体が急増している中、令和7年度も2回生の参加も可とした。そして、できる限り早くスタートを切ることにより、学生の自信とゆとりを捻出したいと考え、年明けからこの活動を始めている。

(2) 「遊び心と即戦力UP」グループの活動

卒業後学校現場で働く4回生に対し、今年度も教師の遊び心と学級づくりに視点をあて、「レクリエーション技法を取り入れた人間関係づくり」をテーマにその道に長けた元

小学校長を講師に招き、実体験を通した学びの場の提供を行った。

(写真1)

また、教職大学院と連携し、座談会形式で気軽に現職教員から学校現場の実情や教壇に立つまでの準備等について話が聞ける場を設け、就職に向けての不安払拭の一助とした。



【写真1：レクリエーション研修】

3. 各グループの活動における成果と課題

(1) 「受かる力UP」グループ

1月から活動を始めたことで、現状、教育課題や答申等に対する基本的な知識や理解を深め、個々の考えや思いをゆっくり共有することができている。(写真2)

2月25日現在の参加者は12名で、採用試験対策への学生のニーズと授業の合間の関係からか、今年度は少数精鋭の活動となっている。3年次受験に臨む学生が増えていることを踏まえ、本サークルだけではなく大学として改めてその支援の在り方を検討する必要がある。



【写真2：受かる力UP 集団討論】

(2) 「遊び心と即戦力UP」グループ

「ちょっとした遊びで、今まで話したことがほとんどなかった人とつながれることを強く実感した。4月の子供が緊張する中で、こういったレクリエーションを行って、緊張をほぐしていきたいなと思った。」この学生の感想にあるように、講師を招き、実体験を通してその技法の魅力と学校現場での具体的な活用法について学べた価値は大きい。

また、昨年度に引き続き今年度も教職大学院と連携させていただき、現職教員から指導を受けたり話を聞かせてもらったりする機会(写真3)が持てたことは、教員同士の「つながり形成」という面でも意義深かった。



【写真3：現職教員との座談会】

4. まとめ

教員離れが社会問題化している今、学生同士がつながりを広げ、深めていく中で教職の魅力を感じてほしいと願いこの活動を進めている。その際改めて感じることは、勉学にはとても真面目に取り組んでいる学生が多いが、幅広い視野から社会や教育を見つめ、自身の意思で何かに関わろうとしている学生が少ないことである。そのため、今年度も「遊び心」を活動の柱に加え、実体験から学ぶ楽しさを味わう機会を設けたが、この流れはぜひ次年度以降も継続していきたい。

(高田 聡)

9 キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業 担当者：学部教員 西坊 晴美

2. 事業の目的

大学での学びを支援し、就職相談を中心とした進路支援（キャリア支援）を行う。原則対面指導により、教員採用試験をはじめその他の就職対策について指導助言をする。

3. 事業の概要

1) 取り組み

① 新入生対象 キャリア支援の案内とキャリア支援アンケートの実施

1年生全員の個人あてに、オンライン success のシステムにより「キャリア支援の案内」と「キャリア支援アンケート」を送付し、各個人から調査回収を行った。新入生の本学入学理由や大学生生活の満足度、進路（教職）希望の実態把握をし、学内で情報共有をした。

また、学生には、「キャリア支援についての案内」を配布し、進路相談や就職相談などにおいて、キャリア支援室を気軽に活用してほしい旨を周知した。

② 教員採用試験対策の指導

a 就職委員会主催の事業に協力参加する。

- ・就職・教採ガイダンス（学部3回生、院1回生、学部2回生〈希望者〉対象）（説明講義）
- ・教員養成研修（学部3回生、院1回生対象）（説明講義）・分科会（高校の部の進行）
- ・直前模擬面接（教採受験者対象）面接（説明講義）・模擬面接実施
- ・春季スタートアップ面接・討論（学部2・3回生対象）（説明講義）
- ・スタートアップ面接練習会の実施（学部2回生～4回生対象）

b 個別指導

- ・教員採用試験、公務員試験用小論文指導（小論文予想課題問題を提示、ワード文書で受けとり、添削してメール返送する。指導助言はメールおよび対面で行う）
- ・面接カード等の記入指導（手書きおよびメールによる文章提出を受け、添削を行う）
- ・個人面接・集団面接、集団討論練習指導

③ 進路相談・就職相談

a 教員採用試験の受験についての迷いや他の就職採用試験・大学院入試等についての相談

公務員試験対策、企業採用試験の受験対策の助言、エントリーシート記入助言を対面指導により行う。

b 本学経済学部就職係へ協力依頼し、連携を図る。（就職相談・企業説明会の実施など）

c 教員採用試験や他の就職試験関係の情報収集と掲示・求人票整理（キャリア支援室設置）

④ 入学時から就職決定までの「教員志望変遷の状況」レポートを作成（学内情報共有）*後掲

2) 実績

a 進路・就職相談および面接練習・対策指導（R7 3月～R8 2月末）のべ127件

b 小論文・エントリーシートの文章添削指導（R7 3月～R8 2月末）のべ56件

3) その他 就職対策関連図書及び小論文対策図書の選定と貸出管理を行う（キャリア支援室設置）

4) 新入生対象アンケート調査結果

問1 あなたが本学へ入学した理由は何ですか。(1つ選択)

- 1 教職を目指しているから 2 入試難易度や受験科目などが自分にあっていたから
3 国立大学法人だから 4 親や高校の教師などが勧めたから 5 理由はない 6 他

| 回答 \ 年度 | 令和2入学 | 令和3年入学 | 令和4年入学 | 令和5年入学 | 令和6年入学 | 令和7年入学 |
|---------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 68.6% | 65.3% | 74.6% | 63.2% | 64.3% | 62.6% |
| 2 | 15.9% | 15.9% | 12.1% | 14.9% | 16.6% | 19.3% |
| 3 | 8.8% | 11.7% | 10.3% | 18.2% | 14.5% | 12.6% |
| 4 | 4.4% | 1.3% | 1.7% | 2.9% | 3.4% | 2.9% |
| 5 | 0.9% | 2.1% | 1.3% | 0.8% | 1.3% | 2.5% |
| 6 | 1.3% | 4.2% | 0 | 0 | 0 | 0 |

問2 あなたは本学での大学生活に満足していますか。(1つ選択)

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している 3 やや不満である 4 大いに不満である

| 回答 \ 年度 | 令和2入学 | 令和3年入学 | 令和4年入学 | 令和5年入学 | 令和6年入学 | 令和7年入学 |
|---------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 4.4% | 11.3% | 28.9% | 27.3% | 23.4% | 29.4% |
| 2 | 49.1% | 64.4% | 64.2% | 64.5% | 66.4% | 60.1% |
| 3 | 40.7% | 23.9% | 6.5% | 7.4% | 9.4% | 9.7% |
| 4 | 5.8% | 0.4% | 0.4% | 0.8% | 0.9% | 0.8% |

* 令和2, 3年はコロナ禍の影響があり、大きく落ち込んだが、その後満足度が回復している。

①②の理由については、複数選択可

- ① 満足+ほぼ満足の理由：1 講義に関する事(80人) 2 進路に関する事(119人)
3 部活や人間関係(121人) 4 施設・設備(35人) 5 バイトなど(53人)
② やや不満+不満の理由：1 講義に関する事(16人) 2 進路に関する事(6人)
3 部活や人間関係(4人) 4 施設・設備(6人) 5 バイトなど(5人)

問3 現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか。(1つ選択)

- 1 教員になりたい 2 できれば教員になりたい(迷っている・悩んでいる)
3 教員以外を考えている 4 未定

| 回答 \ 年度 | 令和2入学 | 令和3年入学 | 令和4年入学 | 令和5年入学 | 令和6年入学 | 令和7年入学 |
|---------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 62.4% | 56.9% | 63.4% | 62.8% | 60.9% | 60.1% |
| 2 | 24.8% | 31.4% | 28.9% | 26.0% | 28.9% | 30.3% |
| 3 | 4.9% | 7.5% | 5.2% | 9.5% | 6.0% | 8.8% |
| 4 | 7.9% | 4.2% | 2.6% | 1.7% | 4.3% | 0.8% |

4. 今後に向けて

視野が広く意欲ある教員を育成すること、また、学生の希望就職実現に向けて指導助言を行う。

10 教員志望について「志望の変遷」を追う

滋賀大学は、教育学部と経済学部、データサイエンス学部の3学部からなる総合大学である。キャンパスが、大津と彦根にあり、教育学部のみ大津キャンパスである。つまり、滋賀大学教育学部生は、単一の学部のキャンパスで学んでいる。

教育学部の学びは、変化の激しい時代に対応できる多様で個性豊かな教育者の育成を目指し構築されている。本学部での学びを経て、一人でも多くの本学出身者が、意欲をもって教育現場で活躍してくれることを願い、日々教育活動が進められている。本学部入学の志望動機は、「教員として就職すること」を基本にしているが、就職結果をみると「教員以外」の仕事に就く学生も毎年一定数いる。教員養成を理念としている教育学部の学生の教員志望の目標がどの時点でどのような理由によって変遷し、どう就職につながったのかをまとめてみた。

学生には、在学中に何回かアンケート調査が行われている。今回、資料として使用するものは、

- ① 大学入学直後、前期中にキャリア支援アンケートとして実施しているもの。(キャリア支援室で実施)
- ② 1回生の11月に学生が所属するコースと専攻が決定したときに実施しているもの。(教育実践総合センターと教務係で実施)
- ③ 3回生の教育実習終了後、実施しているもの。(教育実践総合センターと教務係で実施)

この3種類の個人別調査データを用いて教員志望の変遷を追跡した。

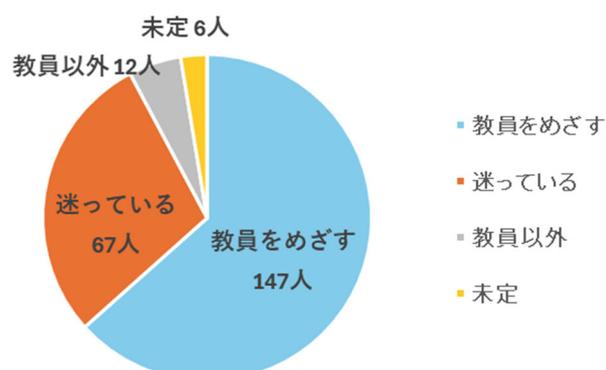
アンケート調査の項目は、

「1 教員になりたい。2 教員になるか迷っている。3 教員以外をめざす。4 未定またはその他」である。以下の資料は、直近の過去4年、2019年～2022年4月入学生⇔2022年～2025年度卒業生のデータをまとめたものである。

1 2022年度入学生の進路希望調査の推移

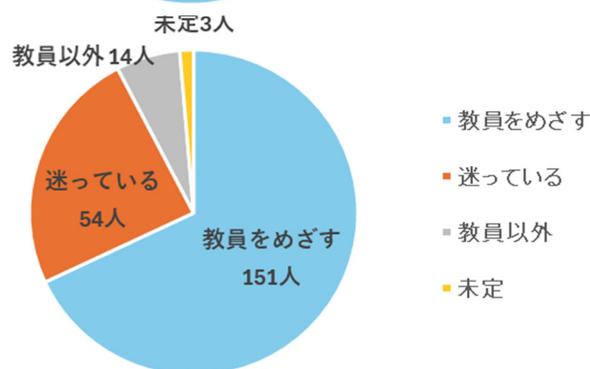
- ① 1回生入学時志望調査(4月～7月) (回答数 232人)

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 147人 | 63.4% |
| 2. 迷っている | 67人 | 28.9% |
| 3. 教員以外 | 12人 | 5.2% |
| 4. 未定 | 6人 | 2.6% |



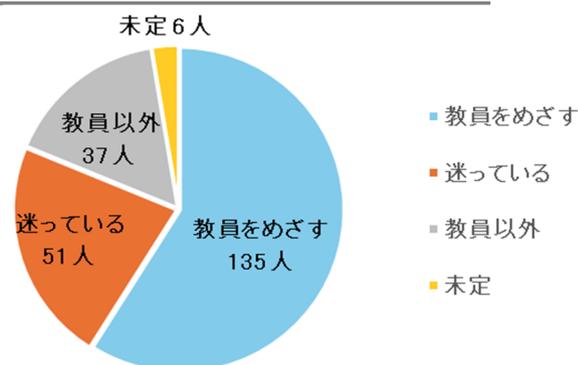
- ② 1回生コース決定時志望調査(11月) (回答数 222人)

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 151人 | 68.0% |
| 2. 迷っている | 54人 | 24.3% |
| 3. 教員以外 | 14人 | 6.3% |
| 4. 未定 | 3人 | 1.4% |



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 229人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 135人 | 59.0% |
| 2. 迷っている | 51人 | 22.3% |
| 3. 教員以外 | 37人 | 16.2% |
| 4. 未定 | 6人 | 2.6% |

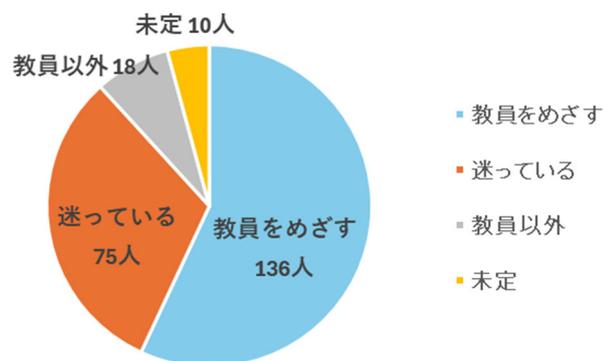


入学時および1回生コース決定時（11月）は、「教員をめざす」が堅持され、コース決定の影響はほぼ見られない。3回生の教育実習後において、教員以外を目指す学生や迷っている学生が増加した。教育実習後は、丁寧なサポートや声かけ、教職の魅力発信が必要であると考えられる。

1 2021年度入学生の進路希望調査の推移

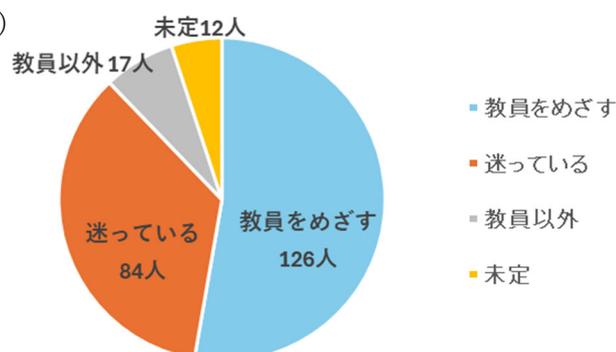
① 1回生入学時志望調査（4月～7月）（回答数 239人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 136人 | 56.9% |
| 2. 迷っている | 75人 | 31.4% |
| 3. 教員以外 | 18人 | 7.5% |
| 4. 未定 | 10人 | 4.2% |



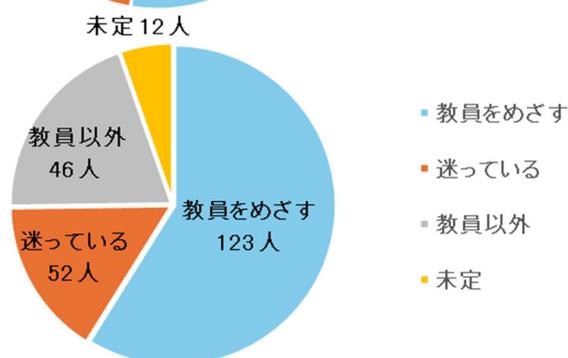
② 1回生コース決定時志望調査（11月）（回答数 239人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 126人 | 52.7% |
| 2. 迷っている | 84人 | 35.1% |
| 3. 教員以外 | 17人 | 7.1% |
| 4. 未定 | 12人 | 5.0% |



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 233人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 123人 | 52.8% |
| 2. 迷っている | 52人 | 22.3% |
| 3. 教員以外 | 46人 | 19.7% |
| 4. 未定 | 12人 | 5.2% |



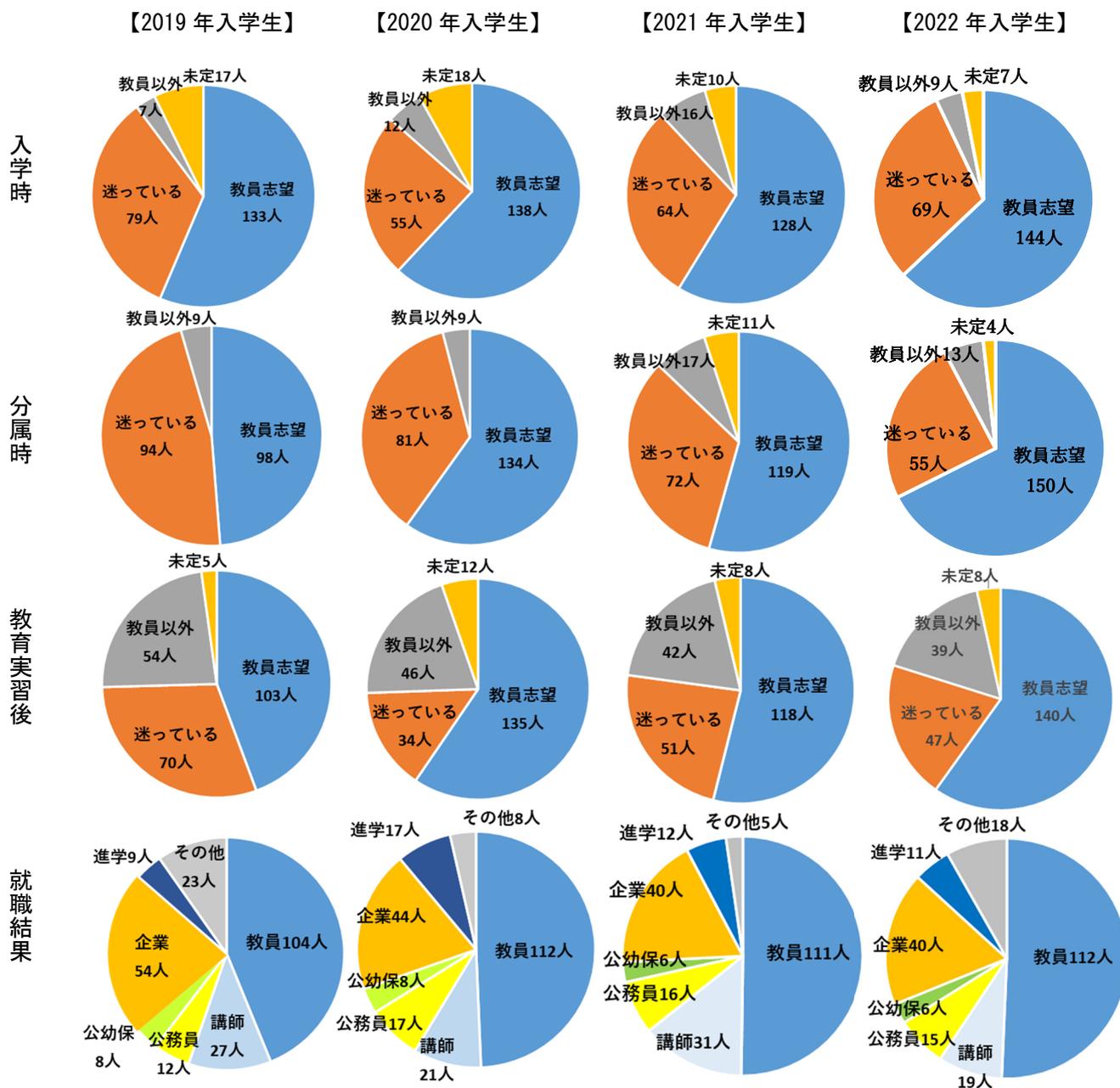
入学時および1回生コース決定時（11月）は、「教員になるか迷っている」「教員以外」が例年より多かった。3回生の教育実習後において、教員以外を目指す学生は例年並みだが、まだ教員への迷いを感じている学生が一定数おり、教育実習後の丁寧なサポートが必要であると考えられる。

2 教員志望者の推移と就職結果

上段：該当者／回答者の実人数
下段：該当者／回答者の割合

| 入学年 卒業年度 | 2019年 (R1) | 2020年 (R2) | 2021年 (R3) | 2022年 (R4) | 2023年 (R5) | 2024年 (R6) | 2025年 (R7) |
|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 2027年度 | 2028年度 |
| 入学時教員 志望(1年6月) | 133人/236人 56.4% | 138人/223人 61.9% | 128人/218人 58.7% | 144人/229人 62.9% | 152人/242人 62.8% | 143人/235人 60.9% | 143人/238人 60.1% |
| 分属時教員 志望(1年11月) | 98人/201人 48.8% | 134人/224人 59.8% | 119人/219人 54.3% | 150人/222人 67.6% | 182人/241人 75.5% | 161人/232人 69.4% | 147人/239人 61.5% |
| 教育実習後 教員志望(3年) | 103人/232人 44.4% | 135人/227人 59.5% | 118人/219人 53.4% | 140人/234人 59.8% | 143人/237人 60.3% | 未実施 | 未実施 |
| 教員就職結果 (含講師) | 131人/237人 55.3% | 133人/227人 58.6% | 142人/221人 64.3% | 136人/235人 57.9% | — | — | — |

※入学年 2022 年の就職結果は 2 月末現在

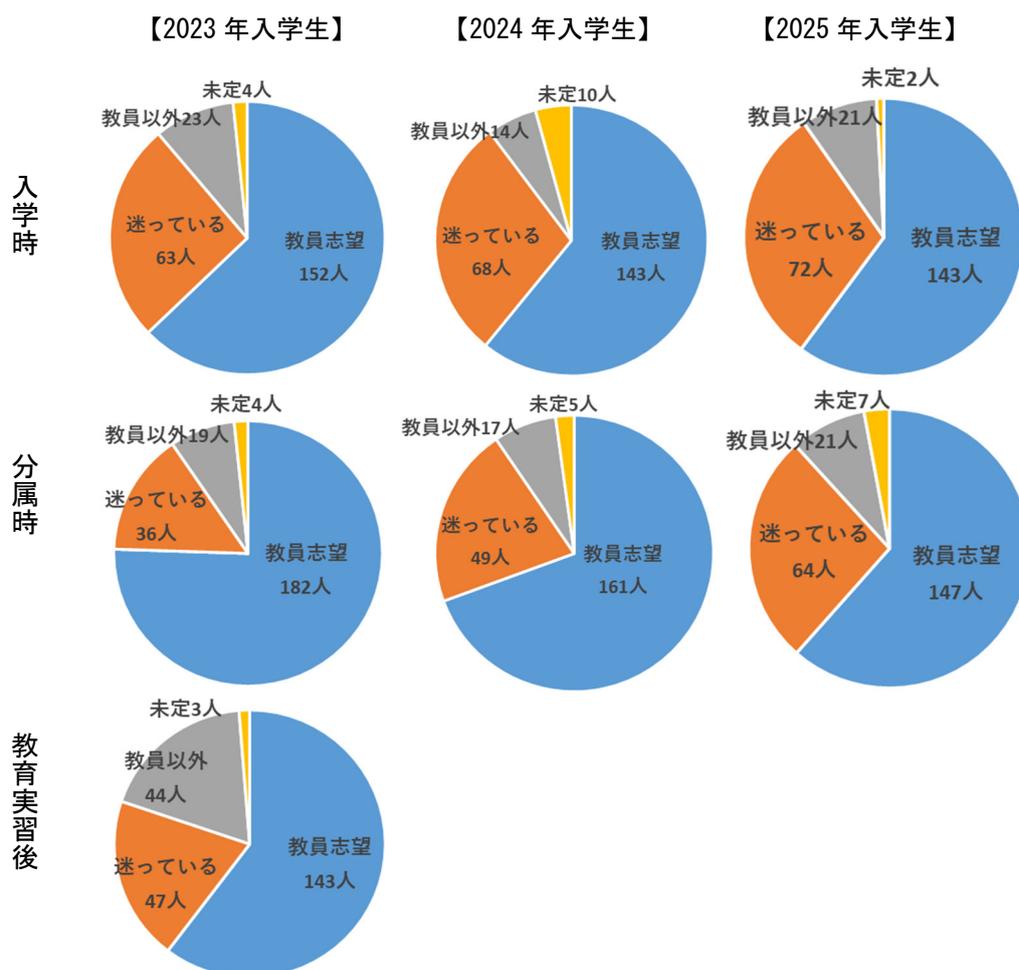


※入学年 2022 年の就職結果は 2 月末現在

学校教員として就職した者、次年度に向けて講師就職した者は、この4年間で少しずつ増加傾向にある。

今年度卒業生（2022年入学生）の特徴は、一回生の間は教員志望者の割合が例年よりかなり高かったが、3回生の教育実習後は、その割合が例年並みになった。2月末の就職結果においても、教員や講師になることを選んだ者の割合はほぼ昨年と同じであった。

学内の様々な場面において、教員の仕事の魅力を発信し、丁寧に指導していきたい。



過去においては、1回生の入学時に比べ、分属時に教員志望者が減少する年度もあったが、近年は教員志望を堅持しており、分属が教員志望におよぼす影響は全体として少なくなっている。

教育実習後に、はっきりと教員以外の進路を目指す者の数が増え、実際の企業就職も例年それに近い人数になる。ただ企業の採用の取り組みは年々前倒しになり、教育実習後迷いが生じ、すぐに企業就職に切り替えたとしてもすでにスタートは切られており、乗り越えるべきことは多い。

また、入学時調査で、教員以外の就職を希望、もしくは進路未定の者が、どの年度も20～30人程度いる。教員養成学部としての本学の魅力、取り組みを今後もさらに広く高校生に周知していく必要がある。

3 卒業時の就職状況からみる進路希望の推移

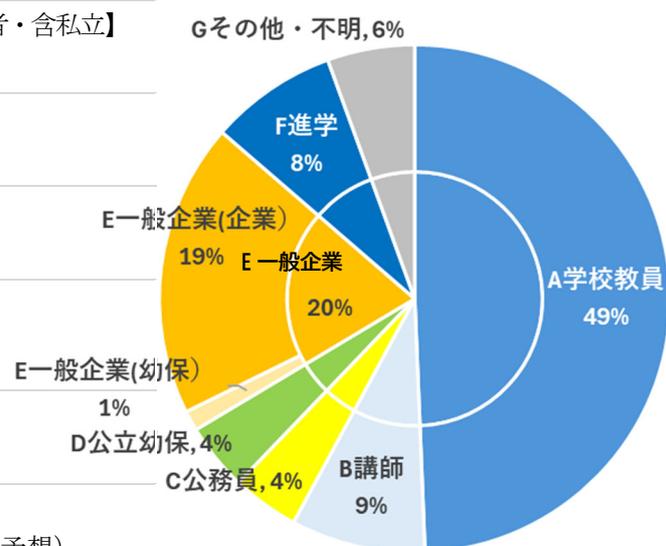
卒業時の就職決定先をグループ化して、学生個別の教員志望変遷を追ってみた。
それぞれの就職先のグループ別に教員志望の変遷をたどる。

【2022 年度入学生】

グループを次のように分けた。2025 年度卒業生 235 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 216 人である。

- A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】
116 人（回答者 110 人）
- B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】
20 人（回答者 17 人）
- C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】
10 人（回答者 10 人）
- D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】
10 人（回答者 10 人）
- E 【一般企業に採用された者】
47 人（うち幼保は 3 人）
（回答者 37 人（うち幼保は 3 人））
- F 【大学院に進学した者含留学】
19 人（回答者 16 人）
- G 【自営業・その他・不明】
13 人（回答者 13 人）（3 月末には、減少予想）

就職決定先別人数比（回答者 235 名）



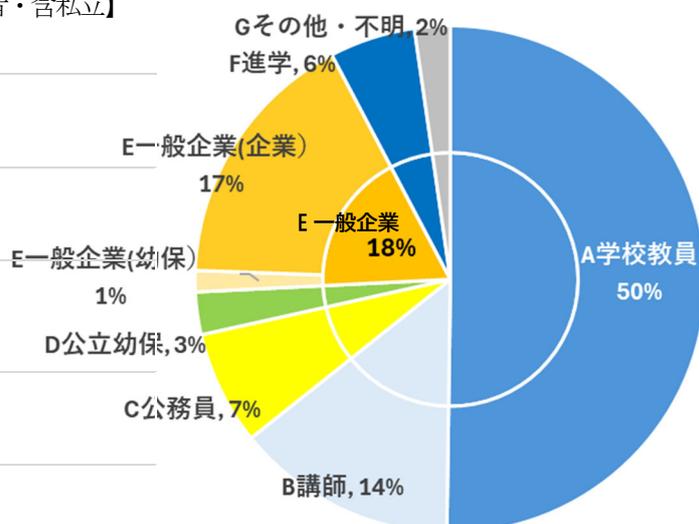
※2022 年度入学生の就職結果は 2 月末現在

【2021 年度入学生】

グループを次のように分けた。2024 年度卒業生 221 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 216 人である。

- A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】
111 人（回答者 110 人）
- B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】
31 人（回答者 30 人）
- C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】
16 人（回答者 16 人）
- D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】
6 人（回答者 6 人）
- E 【一般企業に採用された者】
40 人（うち幼保は 3 人）
（回答者 39 人（うち幼保は 3 人））
- F 【大学院に進学した者含留学】
12 人（回答者 11 人）
- G 【自営業・その他・不明】
5 人（回答者 4 人）

就職決定先別人数比（回答者 221 名）



【2020 年度入学生】

グループを次のように分けた。2023 年度卒業生 227 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 220 人である。

- A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】
112 人（回答者 109 人）

- B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】
21 人（回答者 19 人）

- C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】
17 人（回答者 17 人）

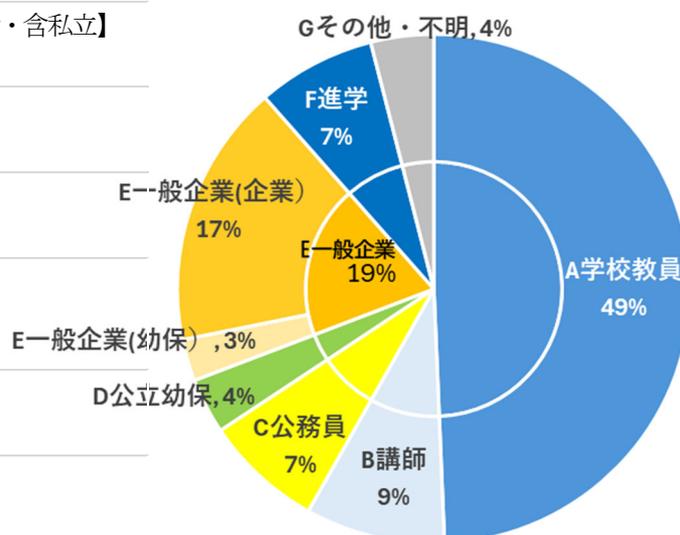
- D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】
8 人（回答者 8 人）

- E 【一般企業に採用された者】
44 人（うち幼保は 6 人）
（回答者 44 人（うち幼保は 6 人））

- F 【大学院に進学した者含留学】
17 人（回答者 17 人）

- G 【自営業・その他・不明】
8 人（回答者 6 人）

就職決定先別人数比（回答者227名）



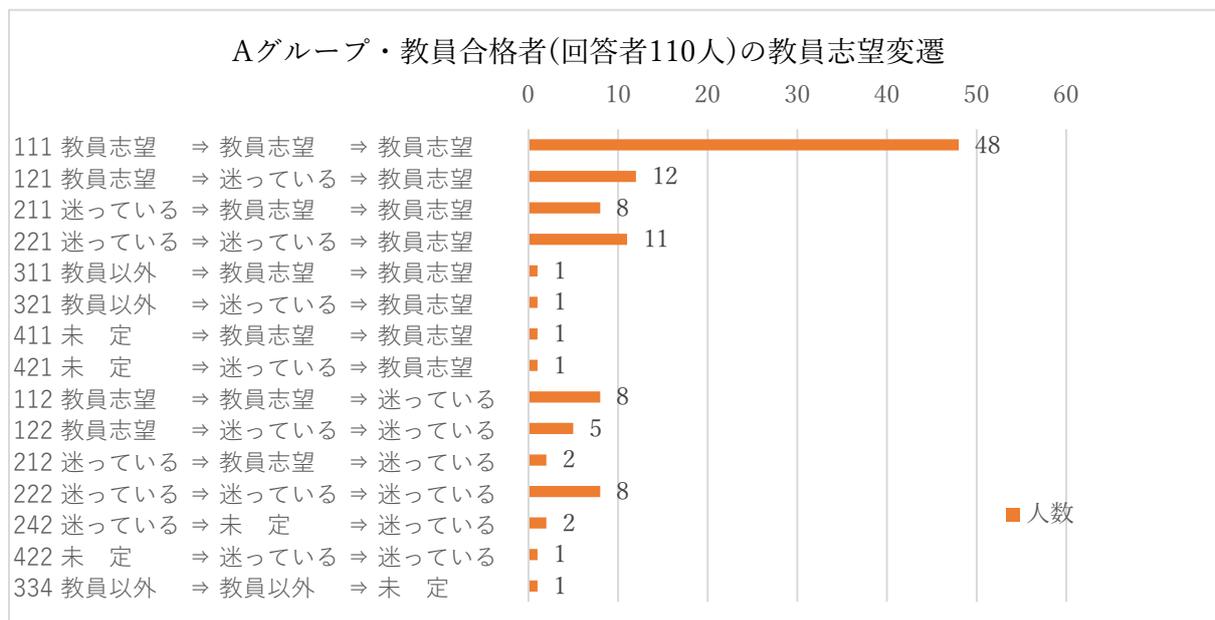
◆ AグループからGグループ7種類の卒業時の進路別グループの教員志望変遷パターン

志望調査項目： 1 教員志望 2 教員になるか迷っている 3 教員以外をめざす 4 未定

調査時期： 1 年入学時調査 ⇒ 1 年コース決定時 ⇒ 3 年教育実習後

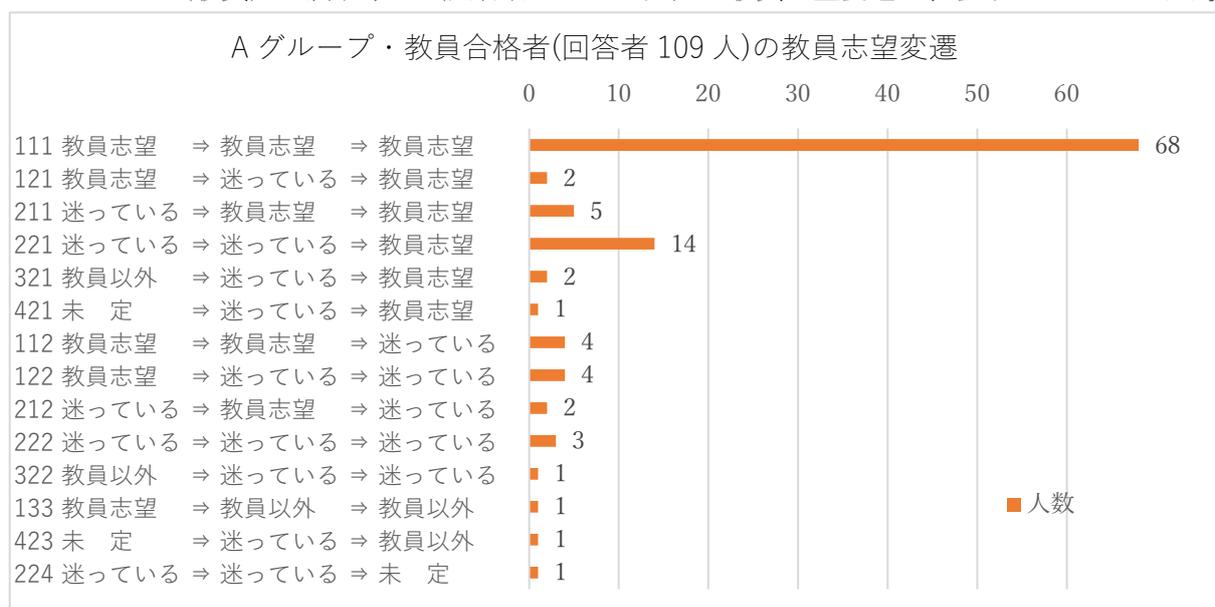
2021 年度入学生

【A のグループ（教員）に属す学生（回答者 110 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2020 年度入学生との比較 〉

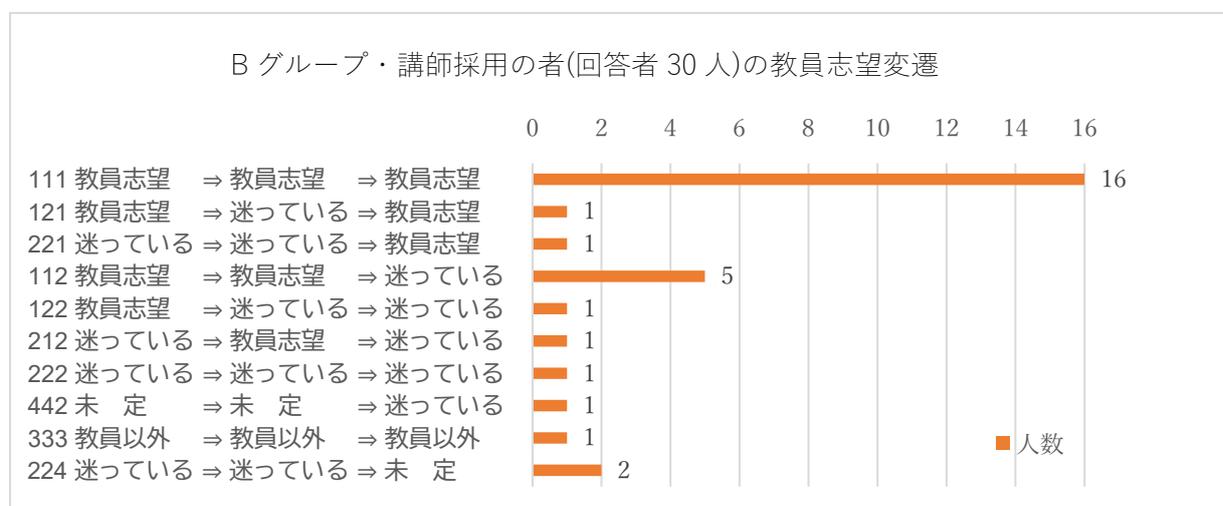
【A のグループ（教員）に属す学生（回答者 109 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*入学後から卒業時までの教員志望の変化がなく、一貫しているものが多いが、途中で迷いが生じたり、ずっと迷いながらも最終的に教員志望に至り、採用試験に合格した者も一定数いる。

2021 年度入学生

【B グループ（講師）に属す学生（回答数 30 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2020 年度入学生との比較 〉

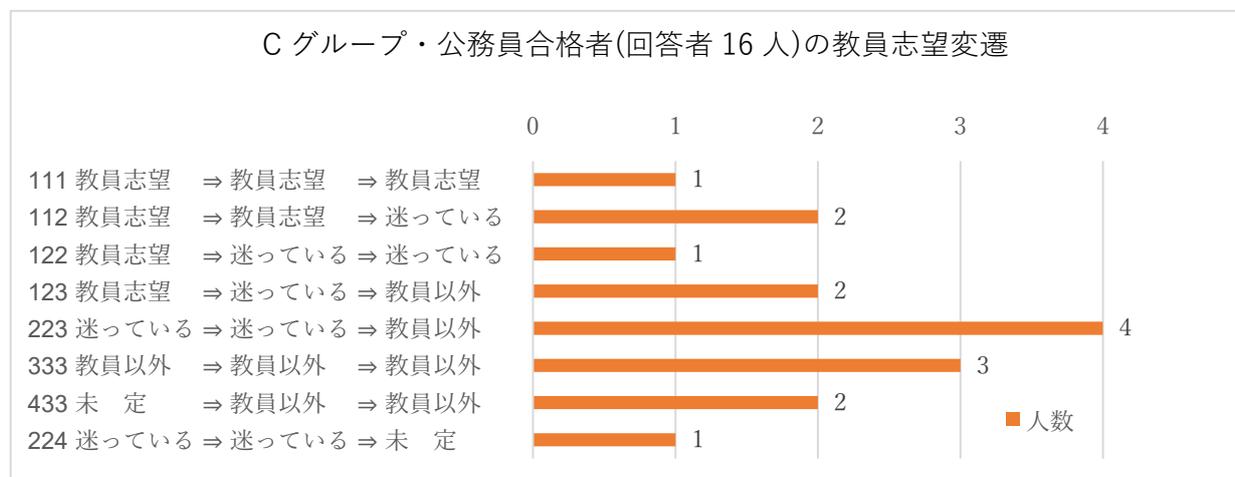
【B グループ（講師）に属す学生（回答数 19 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望の気持ちをいずれかの時期に持っている者が多い。

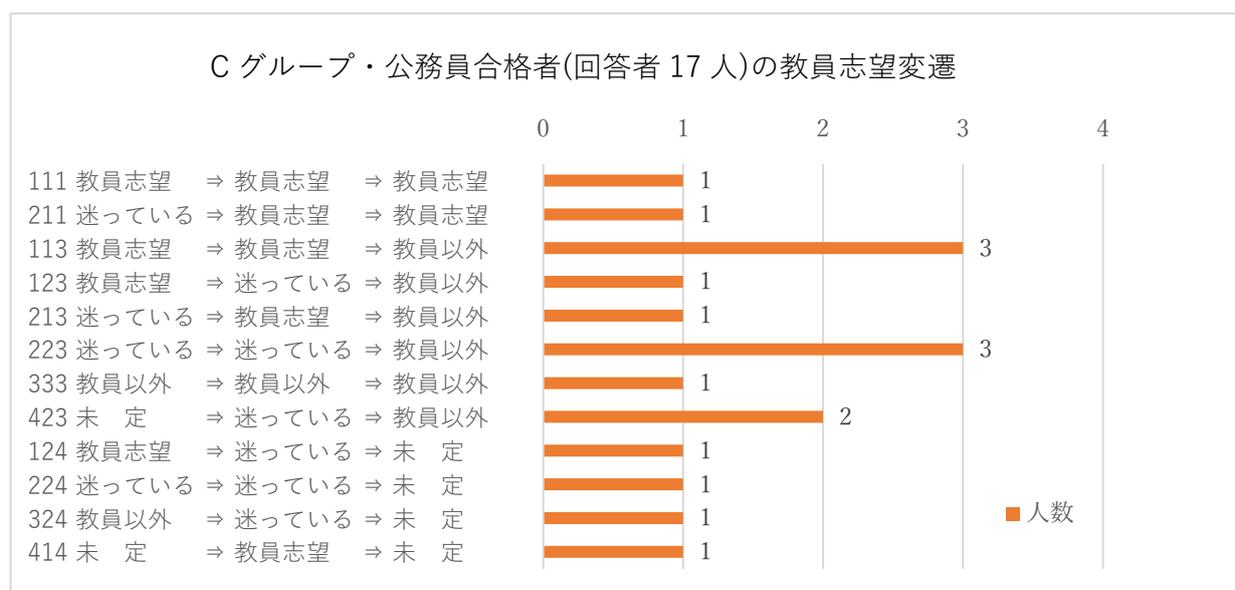
2021 年度入学生

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 16人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2020 年度入学生との比較 〉

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 17人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】

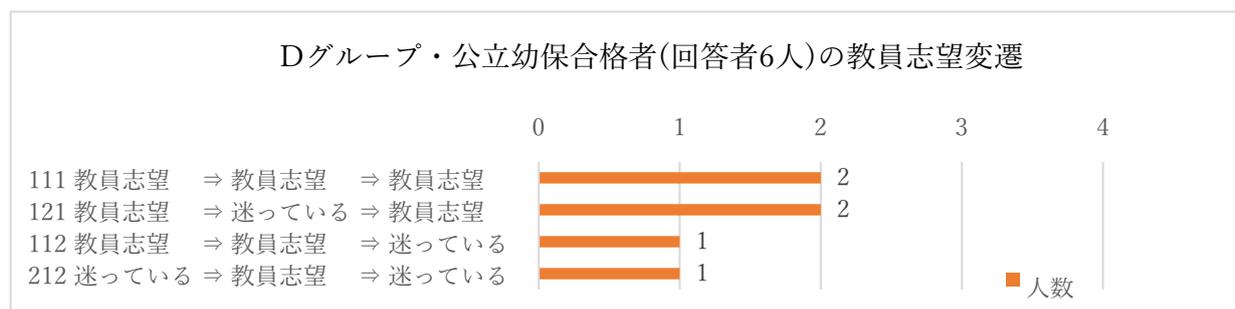


*ほとんどの者がいずれかの時期に教員以外と考えている。

教育を学び、学んだことを行政的視点で生かすため公務員をめざした者もいる。

2021 年度入学生

【Dグループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数6人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



〈 2020 年度入学生との比較 〉

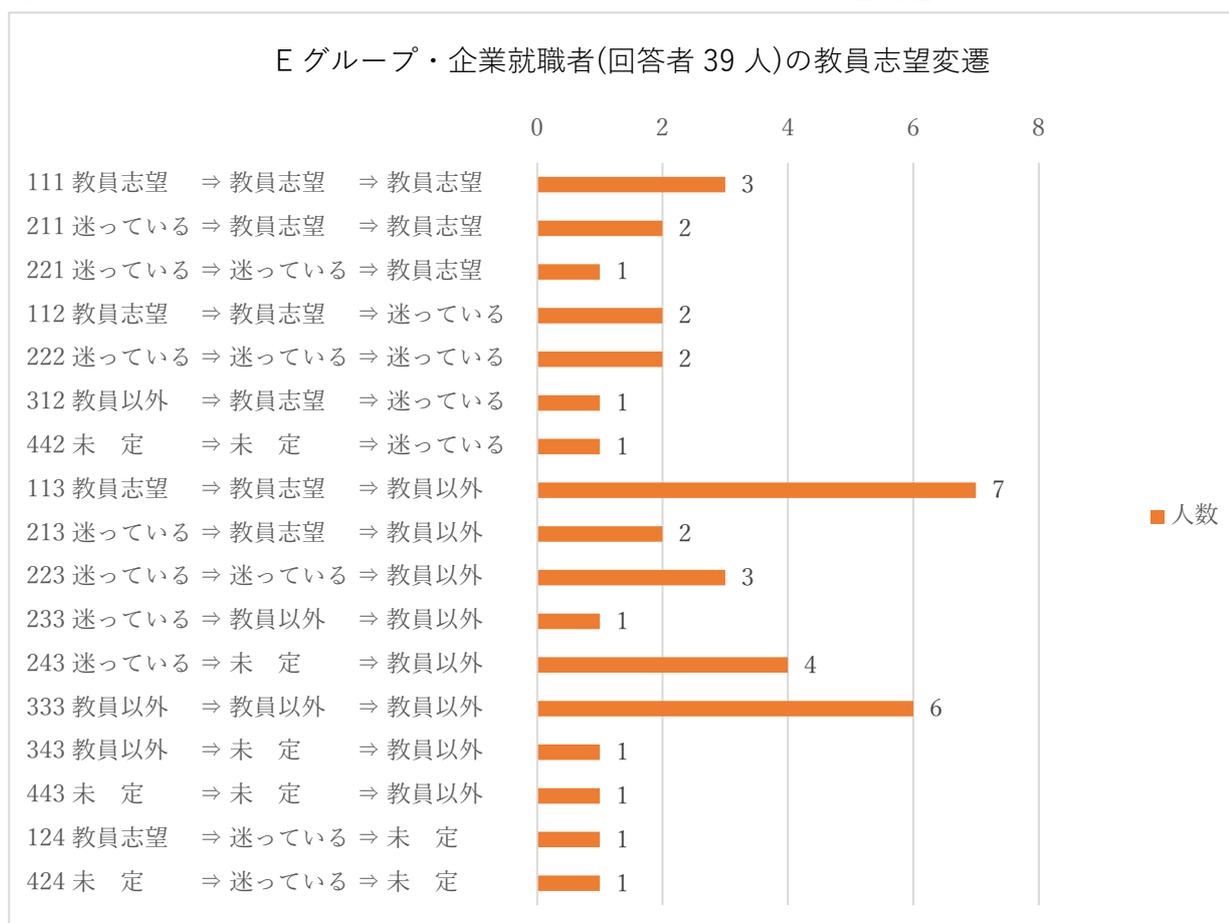
【D グループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数 8 人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



* 公立幼保の採用試験は市町の公務員試験を受験することになるが、幼稚園教諭も保育士も教員志望である。採用試験は幼稚園教諭と保育士を一緒に募集される自治体が多い。

2021 年度入学生

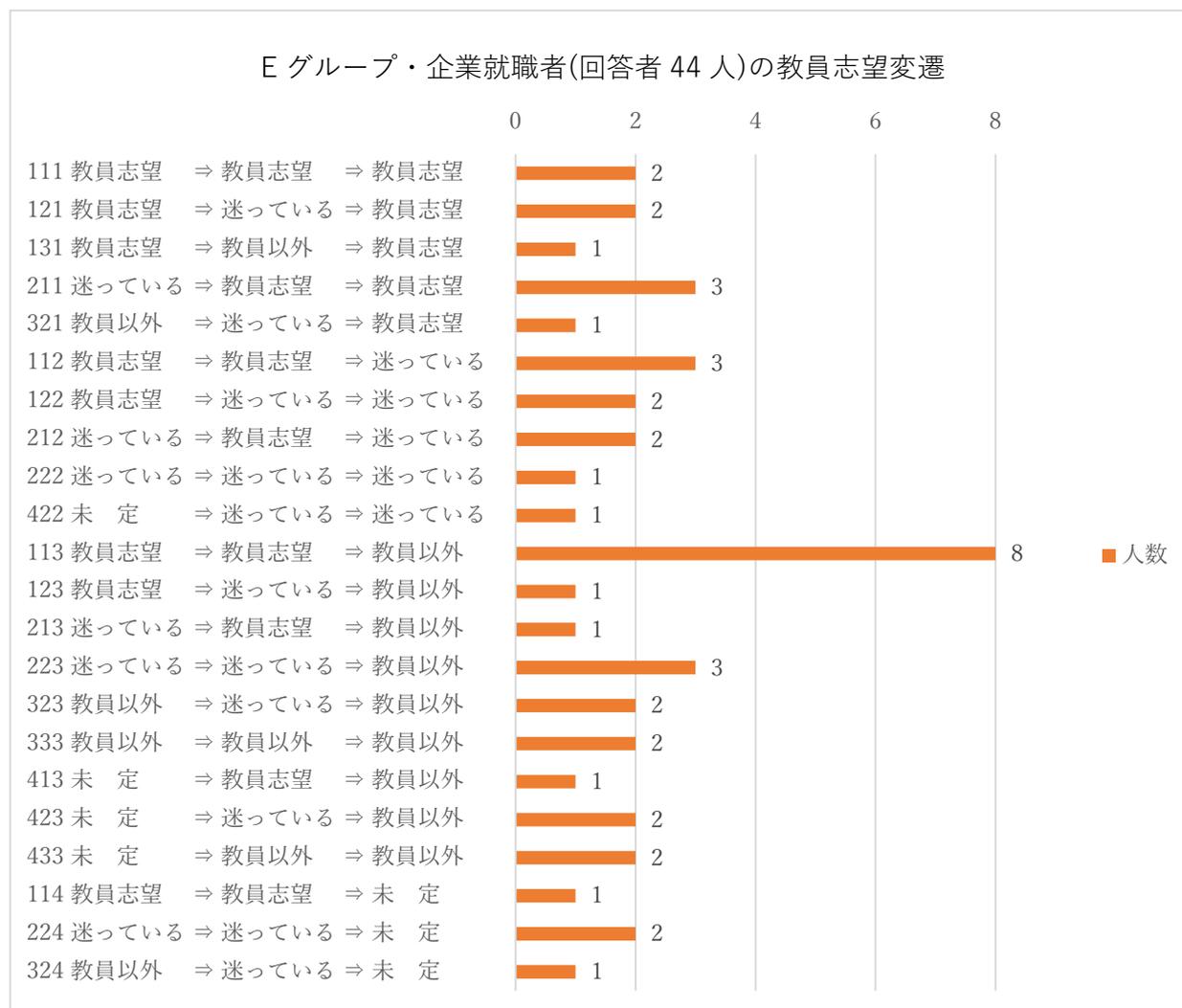
【E グループ（一般企業）に属す学生（回答数 39 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



* 入学時点から「迷っている」「教員以外」と回答している者が多く、教育実習後にはっきりと「教員以外」を考えている傾向がある。

〈 2020 年度入学生との比較 〉

【E グループ（一般企業）に属す学生（回答数 44人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



* 早い時点で、迷ったり、教員以外を考えたりしている。

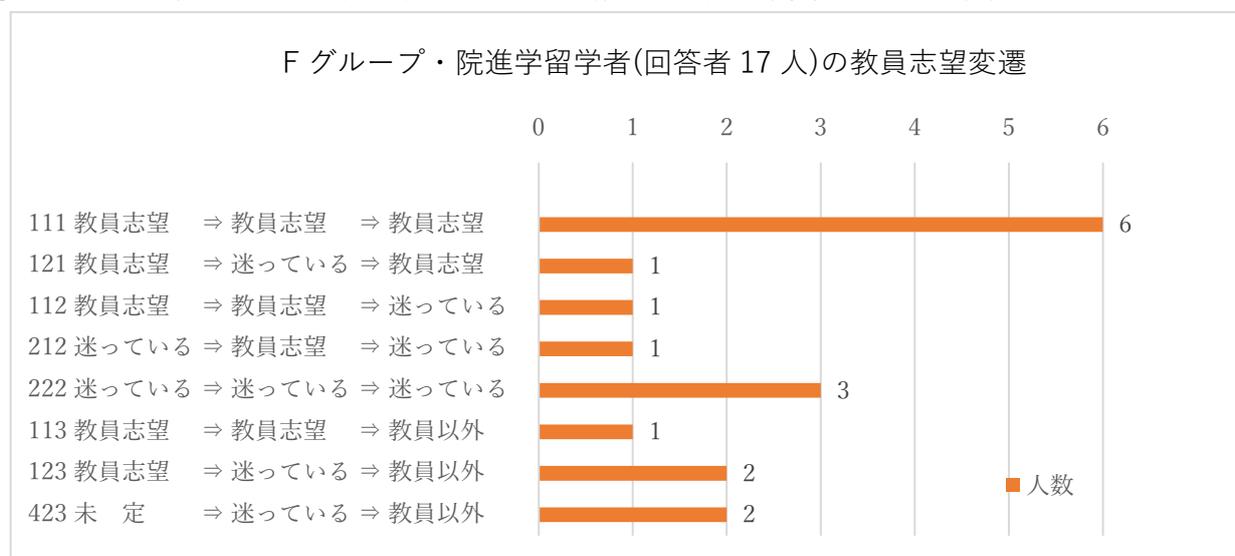
2021 年度入学生

【F グループ（院進学・留学）に属す学生（回答数 11人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2020 年度入学生との比較 〉

【F グループ（院進学・留学）に属す学生（回答数17人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望で大学院に進学する者とともに、在学中に関心が深まった他の分野での学びを深めたい者も一定数いる。

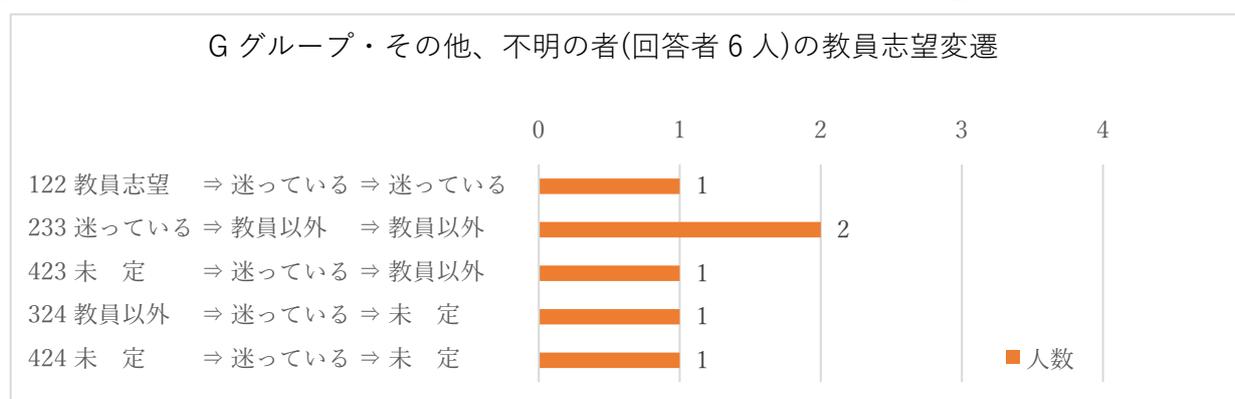
2021 年度入学生

【G グループ（自営業・その他・不明）に属す学生（回答数4人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



〈 2020 年度入学生との比較 〉

【G グループ（自営業・その他・不明）に属す学生（回答数6人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



*いずれかの時期に迷いがあり、教員以外の進路を志す者が多い。

【考察】

2022年度卒業生、2023年度卒業生、2024年度卒業生、2025年度卒業生の教員志望の変遷を辿ってみた。コロナ禍の影響は、年次を追うごとに減少していったが、特に2022年度卒業生は、教育実習を含め大学生活においてコロナ禍の影響を大きく受けた。結果的に教員になったものの割合が、コロナ禍が徐々に回復していった他の年度より低かったのはその影響のためと考える。対面での接触が極度に制限されたコロナ禍を経て、改めて人間の発達段階における人と人との直接交流の大切さが広く認識されることとなった。

教育実習終了後に、子どもたちや現場の先生方との出会いや学校現場での経験により、教員志望をより固める学生の報告を耳にするのは大変うれしい。同時に、現場の教師の働きぶり、教育活動の多様さに自信をなくし、教員志望が揺らぐ学生も多いが、時期を置かず種々のサポートや声かけをすることにより、本来の目標に立ち返っていく学生の姿も見受けられた。教育実習での経験は、教員志望をさらに確固たるものにしたり、進路を迷っている学生が、教員以外を目指す大きな分岐点になっているように思われる。

また、教育現場の大変さ、過酷さに関する報道が目立つが、教職の魅力、やりがい、現場で工夫し、協力しあいながら、子ども達や生徒達とともに日々成長している先生方の姿ももっと発信していく必要性を強く感じる。

教員養成学部の学生には「知・徳・体」を一体で育む学校教育の重要性を深く受け止めてほしい。そして教育の仕事に携わる素晴らしさ、未来の担い手となる子どもたちの成長を育む教員の仕事のやりがいをしっかり受け止め、一步一步前進してくれることを願っている。

11 地域教員養成プログラム

昨年度から、教育学部においては文部科学省「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」に採択され、新たに「地域教員養成プログラム」に着手した。これは、地域がかかえる教育課題を正しく理解し、地域の文化的・歴史的財産に愛着をもちながら、確かな教育力を軸として、それに教育データサイエンス/ICT/DX 活用力を掛け合わせることで、様々な地域の教育課題を主体的に克服していこうとする意欲ある教師を育てることを目的としている。

本センターにおいては地域教員養成プログラムの中で、① 高校生を対象とした入学前教育、② 滋賀県北部（彦根市，米原市，長浜市）における教育実習の実施、及び③ 全学共通教養科目「地域からの視点」の運営に関わっていく。

◆ 高校生を対象とした入学前教育

本学では、これまでから東大津高校、水口東高校と共同で「教職探究講座」を実施してきた。昨年度から対象校を拡大し、さらに今年度は対象校を拡大して実施し、12校、131名の高校生の参加があった。

この取り組みは、高校生の皆さんに本学に来ていただいて教職の魅力伝えるものであるが、本学に来校して講座を受講することが難しい高校生も多い。そこで、新たに「出前型講座」として「みらいの先生養成セミナー」を実施した。このセミナーは、教職に関心を持つ高校1、2年生を対象に原則90分で実施するものである。

内容は、教員の仕事と役割、滋賀で教えるということ、教育データサイエンス、本学学生からのメッセージ、本学出身の先輩の先生からのメッセージで構成されている。先生の1日を紹介する動画を用いて、児童生徒から見えている教師の仕事と見えていない仕事についての話や、教師の仕事と深くかかわる法律の話、教師の給料や休暇制度などの勤務条件に関する話、授業の様子を紹介する動画を用いて、滋賀で教えることの意義や授業の大切さを伝える話、将来、AIの進歩等により未来の学校の姿はどのようなかといった話題や学校現場で発生するデータをいかに有効に活用して、効果的な指導に結び付けるかという教育データサイエンスについての話題なども取り上げ、講義と動画でわかりやすく伝える取り組みである。現役の学生からのメッセージや現職の先生からのメッセージ動画も交えて、高校生に今何をすべきか、将来どんな先生になりたいかを考えさせる指針を与える内容となっている。今年度は、県内の高校6校で、合わせて101名の高校生が受講した。

実施後のアンケートでは、「進路を考えるうえで参考になったか」「教職について興味が深まったか」「本学教育学部への関心は高まったか」の問いには、9割を超える生徒が肯定的な評価をしている。受講を終えた3名の生徒の感想を以下に紹介する。

地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業

先生をめざす高校生のための出前型講座

みらいの先生 養成セミナー

滋賀大学教育学部附属教育実践総合センターでは、高校生皆さんに教職の魅力を伝え、一人でも多く皆さんに、教職に興味を持ってもらえるよう、先生をめざす高校生のための出前型講座を実施します。

- 実施形態：依頼のあった高校へ、本学教員が出向き、セミナーを実施します。
- 受講対象者：先生をめざすまたは、教職に興味のある滋賀県内の高校生（主に高校1年生と高校2年生）
- セミナーの内容：教員の仕事についての講義や動画による先生の1日の様子紹介、動画による授業紹介、教育データサイエンスの講義、学生から高校生の皆さんへのメッセージ、先輩教員から高校生への皆さんのメッセージといった内容です。動画やスライドを使ってわかりやすくお話しします。
- セミナーの時間：30分のセミナーと質疑応答を含めて、授業前2時間を基本としますが、学校の都合に合わせてご相談させていただきます。
- お申込み方法：附属教育実践総合センターのホームページの出前型講義「みらいの先生養成セミナー」のページ（<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/ceip/seminar/>）で詳細をご確認のうえ、お申込みください。お申込み受け付け後、日程調整を行います。なお、お申込みは、学校単位となりますので、教職員ご担当者様からお申込みください。※日程によっては講師の都合が難しい場合がありますので、ご了承ください。

【お申込み先・お問い合わせ先】
滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター
〒520-0842 滋賀県大津市幸二丁目5-1
センターHP: <https://www.edu.shiga-u.ac.jp/ceip/>
セミナーHP: <https://www.edu.shiga-u.ac.jp/ceip/seminar/>
E-mail: ceip@centeredu.shiga-u.ac.jp
TEL: 077-837-7993

国立大学法人 滋賀大学 教育学部

「先生に見える仕事や、見えない仕事について理解することが出来ました。先生の1日の様子や、授業の様子の動画があり、先生の仕事についてたくさん知ることが出来ました。どの大学に行くか、どの学部に行けばいいのかということもよく理解できました。」

「いままで「先生の仕事ってこういうことするんでしょ。」「給料そこまで高くないやん。」などの固定観念というものにとらわれていたんだなあと今回の講義を聞いていくにつれ実感しました。初めて先生たちの隠れた努力を知って、これからの先生という職業の見方が180°変わりました！！改めて先生たちに感謝を伝えたい、そう思いました！！」

「先生になろうか迷っている自分を一步前に進めさせてくれた気がする。先輩の人達の意見を聞いてもう少し頑張ってみようという気持ちになれた。」

また、この「出前型講座」とは別に、8月2日（土）に本学で実施されたオープンキャンパスにおいて、特別版として希望者対象に90分のセミナーを実施した。これには、46校から69名の参加があった。

（文責：小島 秀樹）

◆ 滋賀県北部（彦根市・米原市・長浜市）における教育参加体験の拡充

令和7年度は、北部3市の教育委員会との事前協議や連携協定の締結、各市の校長会での概要説明などを踏まえた上で、受入れ校との具体的な打合せを行い、2回生北部出身者14名が「交流実習」に参加した。引き続き同一校で、次年度も「基本実習」としてお世話になる予定である。また、令和7年度1回生についても、北部出身者の個人面談や希望調査を行い、次年度の「交流実習」に向けた準備を進めている。学内においても、定期的な面談や広報を行い、北部出身者の交流や情報共有に努めた。

【令和7年度のおもな実践】

| | |
|-------------------|----------------------------|
| 〈4月〉基本実習オリエンテーション | 〈5月〉北部3市学校訪問 |
| 〈6月〉地域基本実習（前期） | 〈7月〉交流実習オリエンテーション |
| 〈8月〉観察実習オリエンテーション | 〈9月〉地域基本実習（後期）・2回生交流実習（随時） |
| 〈10月〉教育参加ガイダンス | 〈11月〉教育参加プランニング・基本実習事後指導 |
| 〈12月〉教育実習事前説明会 | 〈1月〉1回生個人面談&希望調査 |
| 〈2月〉北部3市学校訪問 | 〈3月〉副免実習基礎（講義&補講） |

【令和7年度2回生の交流実習実績】

| | | | |
|-----|---------|---------|--------------------|
| 彦根市 | 小学校4校4名 | 中学校2校2名 | |
| 米原市 | 小学校4校4名 | 中学校1校1名 | |
| 長浜市 | 小学校1校1名 | 中学校2校2名 | 合計 小学校9校9名 中学校5校5名 |

【令和7年度1回生の北部実習希望状況】

対象者21名（初等8名＋中等13名）のうち、現段階での北部地域実習希望者は17名である。

◆新設科目「地域からの視点」の試行実施

令和8年度より本格実施となる「地域教員養成プログラム」の必須科目である「地域からの視点」について、今年度は北部出身者を中心に試行実施を行った。

【授業の目的】

本授業では、滋賀の良さや強み、課題などをよく理解したうえで、滋賀に愛着を持った児童・生徒を育てることのできる教員（地域マインドを持った教員）の育成を目的とした。受講生は、滋賀の地理・歴史、自然、民話・昔話などの魅力を知るとともに、多様なニーズをもつ児童・生徒、外国にルーツをもつ子どもらの就学をめぐる課題も学ぶと同時に、文化財や博物館でのフィールドワークを体験して学びを深めた。なお、この授業は集中講義の形態を取ったが、大学での授業は木曜日4限に実施した。

【授業の概要】

- 第1回：9月29日（月）③「オリエンテーション」（担当：神T，横尾）
- 第2回：10月9日（木）④「地域学習」（担当：高田T）
- 第3回：10月16日（木）④「外国にルーツのある児童生徒」（担当：児玉T）
- 第4回：10月30日（木）④「滋賀の文化財」（担当：小島T）
- 第5回：11月13日（木）④「調査活動報告会①」（担当：神T，横尾）
- 第6・7回：11月16日（日）「石山寺フィールドワーク」（担当：小島T）
- 第8回：11月20日（木）④「平和学習」（担当：県立平和祈念館 田井中T）
- 第9回：11月27日（木）④「民話や昔話の魅力」（担当：大阪樟蔭女子大学 大杉T）
- 第10回：12月11日（木）④「絵本の読み聞かせ会」（担当：神T，横尾）
- 第11回：12月18日（木）④「滋賀の自然」（担当：横尾）
- 第12・13回：12月21日（日）「琵琶湖博物館フィールドワーク」（担当：横尾）
- 第14回：1月8日（木）④「算数物語」（担当：附属小学校 荒井T，神T）
- 第15回：1月22日（木）④「報告会②&エンディング」（担当：神T，横尾）

【受講生】合計22名（3回生2名，2回生7名，1回生13名）（県外4名＋県内18名）

【受講生の声】

- ・滋賀の魅力を知ることができ、とても勉強になった。フィールドワークも楽しかった。
- ・全体的に浅く広くといった内容だったので、もっと深いところまで学びたかった。
- ・校外学習計画の作成ポイントなど、教師の仕事や支援について具体的に知りたかった。
- ・フィールドワークの振り返りや共有の場、グループでの活動や話し合いなどがあると良かった。
- ・母校訪問の日程を組むのが大変だった。時期を冬休み中にするなどの工夫が必要である。
- ・フィールドワークや地域学習の交通費や活動費を補填してほしかった。

【次年度の方向性】

- ・今年度のプログラムや受講生の声をベースにして再構築を行う。
- ・母校訪問の期間が授業期間と重ならないように配慮するなど、授業の順番を入れ替える。
- ・フィールドワークの時数カウントを減らし、振り返りや共有の時間を組み入れる。
- ・グループワークや学生の主体的な活動を取り入れる。

（文責 横尾博邦）

11 業務報告（春学期）

| 教職支援事業 | | | | |
|--------|--|---|--|--|
| キャリア支援 | 教育実習支援 | 教師力養成サークル「教師のたまご」 | 石山プロジェクト | |
| 4月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・新入生対象キャリア支援案内・アンケート実施(SUCCESS) ・キャリア支援室管理/備品・書類・図書整理及び貸出(以後年間常時) ・就職関係揭示物整理(以後年間常時) ・就職求人票分類・整理(以後年間常時) ・教員採用試験小論文指導 ・教員採用試験面接・集団討論指導 ・教員採用試験大学推薦面接 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・教育実習委員会 ・教育改革委員会 ・教育実践総合センター担当者会議 ・地域実習連絡協議会(栗東、守山、草津) ・地域実習校挨拶訪問(大津市内協力校) ・地域実習市教委挨拶訪問(栗東、守山、大津、草津) ・基本実習オリエンテーション(3回生) ・基本実習開始式(地域実習3回生) | <ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験に向けての個別面談(受かる力UP) ・「教師のたまご 受かる力UP」参加者募集パンフレット配信(4回生対象) | <ul style="list-style-type: none"> ・春学期実施の打合せ 石山PJ(幼・小) ・退職女性校長会、退職園長への協力依頼 ・春学期参加募集受付(SUCCESS掲載) ・退職女性校長会 石山PJ(小)に関して挨拶4/23 ・春学期募集締切(小) 4/24 ・春学期募集締切(幼) 4/24(幼は、5/7まで延長) |
| 5月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・教員採用試験面接・集団討論指導 ・インターンシップ面接指導 ・公務員小論文添削・面接指導 ・教員採用試験面接・集団討論指導 ・教員採用試験小論文添削 ・2021入学生教員志望変遷資料作成 ・新入生キャリア支援アンケート回収 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・地域実習校挨拶訪問(栗東、守山、草津) ・基本実習訪問指導(地域実習協力校) ・教育実習事前説明会(2回生) | <ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験に向けての個別相談(受かる力UP) ・教員採用試験小論文対策(受かる力UP) ・教員採用試験県外受験者集団面接練習(受かる力UP) | <ul style="list-style-type: none"> ・打合せ会 石山PJ(幼・小) 5/9 |
| 6月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・就職・インターンシップ面接指導 ・公務員小論文添削・面接指導 ・教員採用試験面接・集団討論指導 ・教員採用試験小論文添削 ・新入生キャリア支援アンケート結果報告 ・新入生キャリア支援相談個票作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・基本実習訪問指導(地域実習協力校) | <ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験小論文対策(受かる力UP) ・教員採用2次試験面接及び模擬授業練習(受かる力UP) | <ul style="list-style-type: none"> ・石山PJ(幼) 省察会6/13 ・石山PJ(小) 省察会6/20 |
| 7月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・教員採用直前対策面接練習会資料作成 ・教員採用直前対策面接練習会(説明講義・模擬面接) ・教員採用2次対策面接指導 ・インターンシップ事前指導 ・公務員小論文添削・面接指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・教育実習委員会事前打合せ ・基本実習中間指導(3回生対象者) ・交流実習オリエンテーション(2回生) | <ul style="list-style-type: none"> ・教員採用2次試験面接及び模擬授業練習(受かる力UP) ・教員採用2次試験場面対応練習(受かる力UP) | <ul style="list-style-type: none"> ・石山PJ(小) 省察会7/18(中止) ・石山PJ(幼) 省察会7/18 |
| 8月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・教員採用試験面接指導 ・教員採用試験フォローアップ面談 ・教員志望変遷資料作成・整理 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・観察実習オリエンテーション(1回生) ・教育実習委員会 ・実習基礎①(2回生) ・実習基礎②(2回生) ・教育実践総合センター担当者会議 | <ul style="list-style-type: none"> ・教員採用2次試験面接及び模擬授業練習(受かる力UP) ・教員採用2次試験場面対応練習(受かる力UP) | <ul style="list-style-type: none"> ・石山幼小への秋学期実施意向確認 ・退職女性校長会、退職園長へ協力依頼 ・秋学期参加募集受付(SUCCESS掲載) |
| 9月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・就職エントリーシート、面接カード添削 ・就職・教採ガイダンス資料作成 ・面接指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・基本実習訪問指導(地域実習協力校) | <ul style="list-style-type: none"> ・「教師のたまご」次年度活動内容検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・秋学期募集締切(小) 10/2 ・秋学期募集締切(幼) 10/9 |

11 業務報告（秋学期）

| 10月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・就職・教採ガイダンス(説明講義) ・教員採用試験・公務員試験結果等報告書整理確認 ・教員養成研修資料作成 ・面接指導 ・企業就職説明会の調整(経済学部と) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・基本実習訪問指導(地域実習協力校) ・1回生教育参加ガイダンス ・教職実践演習「学級経営」(4回生) | <ul style="list-style-type: none"> ・「教師のたまご」次年度活動内容検討 ・臨時講師等個別相談 | <ul style="list-style-type: none"> ・打合せ会 石山PJ(小) 10/10 ・春学期報告会・秋学期打合せ会 石山PJ(幼) 10/17 |
|------------------------|---|---|---|--|
| 11月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・教員養成研修(説明講義) ・教員採用試験・就職関係図書選定 ・企業就職説明会 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・1回生教育参加プランニング ・教育実習委員会 ・基本実習事後指導担当者打合せ会 ・基本実習事後指導I・II ・事後指導アンケート実施(SUCCESS) ・教育実践総合センター担当者会議 | <ul style="list-style-type: none"> ・「教師のたまご 受かる力UP」参加者募集パンフレット配信(3回生対象) | <ul style="list-style-type: none"> ・石山PJ(小) 省察会11/14 ・石山PJ(幼) 省察会11/21 |
| 12月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・キャリア支援室図書整理 ・滋賀県教員採用試験問題開示・コピー ・公務員試験面接指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・教育参加ハンドブックの確認 ・地域実習連絡協議会(栗東、守山、草津) | <ul style="list-style-type: none"> ・「教師のたまご」遊び心と即戦力UP活動案内配信(4回生対象) | <ul style="list-style-type: none"> ・石山PJ(小) 省察会12/12(中止) ・石山PJ(幼) 省察会12/16 |
| 1月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・春季教職セミナー スタートアップ「面接・討論」について・資料作成 ・教員採用試験問題研究(滋賀県および近隣県市) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・実習基礎指導I、II(補講) ・地域実習校謝意・次年度計画説明訪問(大津市教委、市内協力校) ・令和7年度実習のまとめ ・実習マニュアルの確認及び改訂 ・教育実習委員会打合せ | <ul style="list-style-type: none"> ・特別企画活動② <<外部講師招聘>>「レクリエーション技法を取り入れた人間関係づくり」1/15, 22(遊び心と即戦力UP) ・次年度教員採用試験に向けた基礎学習(受かる力UP) | |
| 2月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・教員採用試験小論文指導 ・教育実践センター報告書等原稿作成 ・春季教職セミナースタートアップ「面接・討論」について(講義) スタートアップ面接練習会(案内) ・2022年入学生教員志望変遷データ集計 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・副実習基礎打合せ ・副実習基礎I ・教育実習委員会 ・実習マニュアルの確認及び改訂 ・教育実践総合センター報告書原稿作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・次年度教員採用試験に向けた基礎学習(受かる力UP) ・特別企画活動③ <<教職大学院とコラボ>>「新任教員Welcomeセミナー」2/19(遊び心と即戦力UP) | <ul style="list-style-type: none"> ・石山PJ(幼・小) 報告会2/6 |
| 3月 | <ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面談 ・春季スタートアップ面接練習会 ・次年度新入生対象ガイダンスの実施方法検討・準備 ・教員採用試験小論文指導 ・公務員採用試験小論文指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・副実習基礎II ・副実習基礎(補講) ・令和8年度実習計画立案 | <ul style="list-style-type: none"> ・次年度教員採用試験に向けた基礎学習(受かる力UP) | |
| ・年報(第9号 令和7年度版)発行 HP掲載 | | | | |
| キャリア支援 | 教育実習支援 | 教師力養成サークル「教師のたまご」 | 石山プロジェクト | |
| 教職支援事業 | | | | |

11 業務報告（春学期）

| 地域教育支援事業 | 地域教員養成プログラム | | |
|--|---|--|----|
| 教職探究講座・出前講義・共同研究事業 | 中・高校生を対象とした入学前教育 | 滋賀県北部における実習等 | |
| ・出前講義「米原市米原小学校」4/23 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 | ・基本実習希望調査（4月上旬実施） ・基本実習オリエンテーション（4/23） ・地域実習開始式（4/23） | 4月 |
| ・出前講義「光泉カトリック中学・高等学校」5/19 ・出前講義「草津市立矢倉こども園」5/19 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 | ・北部3市学校訪問（交流実習受入れ校）（5/9～5/15） （彦根市6校・米原市5校・長浜市3校） | 5月 |
| ・共同研究の募集 ・出前講義「滋賀県教育委員会事務局特別支援教育課」6/3 ・出前講義「草津市立老上こども園」6/9 ・出前講義「草津市立常盤こども園」6/16 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 | | 6月 |
| ・共同研究審査 ・共同研究採択通知 ・出前講義「草津市立第二小学校」7/2 ・出前講義「草津市立老上こども園」7/4 ・出前講義「東洋大学附属姫路高等学校」7/12 ・出前講義「彦根市立平田小学校」7/18 ・出前講義「児童育成クラブ「のびっこ」 渋川7/24 ・出前講義「草津市立常盤こども園」7/25 ・出前講義「草津市立笠縫こども園」7/25 ・出前講義「守山市立図書館」7/27 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 ・「みらいの先生養成セミナー」ハンドブック第2版を制作 | ・交流実習配置決定（北部は前倒しで調整） ・交流実習オリエンテーション（7/11） ・北部2回生サークルミーティング（7/11） | 7月 |
| ・出前講義「野洲市教育委員会」8/1 ・出前講義「京都府立豊学校」8/1 ・出前講義「草津市立山田こども園」8/4 ・出前講義「滋賀県養護教諭研究会」8/20 ・出前講義「近江八幡市教育委員会」8/26 ・出前講義「野洲市立野洲小学校」8/29 | ・オープンキャンパスにおいて、希望する生徒を対象に特別版「みらいの先生養成セミナー」を実施 8/2 | ・観察実習オリエンテーション（8/1） ・北部1回生サークルミーティング（8/1） | 8月 |
| ・出前講義「草津市立矢倉こども園」9/2 ・出前講義「野洲市立野洲小学校」9/3 ・出前講義「草津市立常盤こども園」9/8 ・出前講義「草津市立老上こども園」9/16 ・出前講義「草津市立老上こども園」9/22 ・R7年度教職探究講座、共催高校等に開講案内 | ・附属中学校大学訪問学習で、「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」を試行的に実施9/11 ・「みらいの先生養成セミナー」を入試広報として実施（八日市高校） 9/16 ・「みらいの先生養成セミナー」を入試広報として実施（米原高校） 9/24 | ・2回生交流実習（9月～11月） ・北部3市学校訪問（4校） | 9月 |

11 業務報告（秋学期）

| | | | |
|--|--|--|-----|
| ・出前講義「大津市立石山小学校」10/8 ・出前講義「大津市小松小学校」10/22 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 | ・教育参加ガイダンス（10/2） ・北部1回生サークルミーティング（10/2） ・2回生交流実習（9月～11月） ・北部3市学校訪問（7校） | 10月 |
| ・出前講義「東近江市健康医療部」11/9 ・出前講義「甲賀市教育委員会」11/11 ・出前講義「愛知県立豊田南高校」11/17 ・出前講義「愛媛大学教育学部」11/30 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 | ・教育参加プランニング（11/6） ・基本実習事後指導（11/13・11/27） ・2回生交流実習（9月～11月） ・北部3市学校訪問（3校） | 11月 |
| ・出前講義「草津市立常盤こども園」12/15 ・教職探究講座実施12/17・12/18 | ・「みらいの先生養成セミナー」を実施（草津高校） 12/9 ・「みらいの先生養成セミナー」を実施（近江高校） 12/15 ・「みらいの先生養成セミナー」を実施（甲西高校） 12/22 | ・教育実習事前説明会（12/4） ・北部1回生サークルミーティング（12/4） ・北部実習アンケート（12月中で実施） | 12月 |
| ・出前講義「守山市立守山図書館」1/31 | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 ・「みらいの先生養成セミナー」ハンドブック第3版を制作 | ・北部1回生個人面談（対象21名）（1/20～1/29） ・北部実習希望集約（1月中） | 1月 |
| ・出前講義「滋賀県立守山中学校」2/9 ・出前講義「草津市立山田こども園」2/10 ・出前講義「野洲市発達支援センター」2/24 ・出前講義「野洲市立さくらばさまこども園」2/24 ・出前講義「湖南市立三雲東小学校」2/ ・共同研究事業 成果報告 | ・草津市教育委員会を訪問し、「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の来年度からの実施を依頼 2/10 ・長浜市教育委員会を訪問し、「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の来年度からの実施を依頼 2/12 ・大津市教育委員会を訪問し、「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の来年度からの実施を依頼 2/18 | ・北部3市学校訪問（基本実習受入れ校）（2/10～2/17） （彦根市6校・米原市5校・長浜市3校） ・北部3市教育委員会訪問（2/3・2/12） | 2月 |
| | ・「中学生のためのみらいの先生養成セミナー」の内容検討 ・「みらいの先生養成セミナー」を実施（長浜北高校） 3/23 | ・2回生交流実習と3回生基本実習の受入れ調整（3月中） | 3月 |
| ・年報（第9号 令和7年度版）発行 HP掲載 | | | |
| 教職探究講座・出前講義・共同研究事業 | 高校生を対象とした入学前教育 | 滋賀県北部における実習等 | |
| 地域教育支援事業 | 地域教員養成プログラム | | |

教育実践総合センター年報 第9号

2026年3月発行

滋賀大学教育学部 教育実践総合センター

〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号

TEL 077-537-7993(直通)

FAX 077-537-7909

<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>
